

## 第2章 瀬戸市の歴史文化の特性

### 1 瀬戸市の概況

#### (1) 自然環境・地理的環境

##### ア 位置

瀬戸市は、愛知県西部、旧尾張国の北東部に位置し、北は岐阜県、東は豊田市に接しています。尾張、美濃、三河の三国の境の位置にあります。

中部圏の中核都市名古屋市から北東へ約 20 k m。名鉄瀬戸線が尾張瀬戸駅と名古屋都心の栄町駅とを 30 分(急行)ほどで結んでいます。



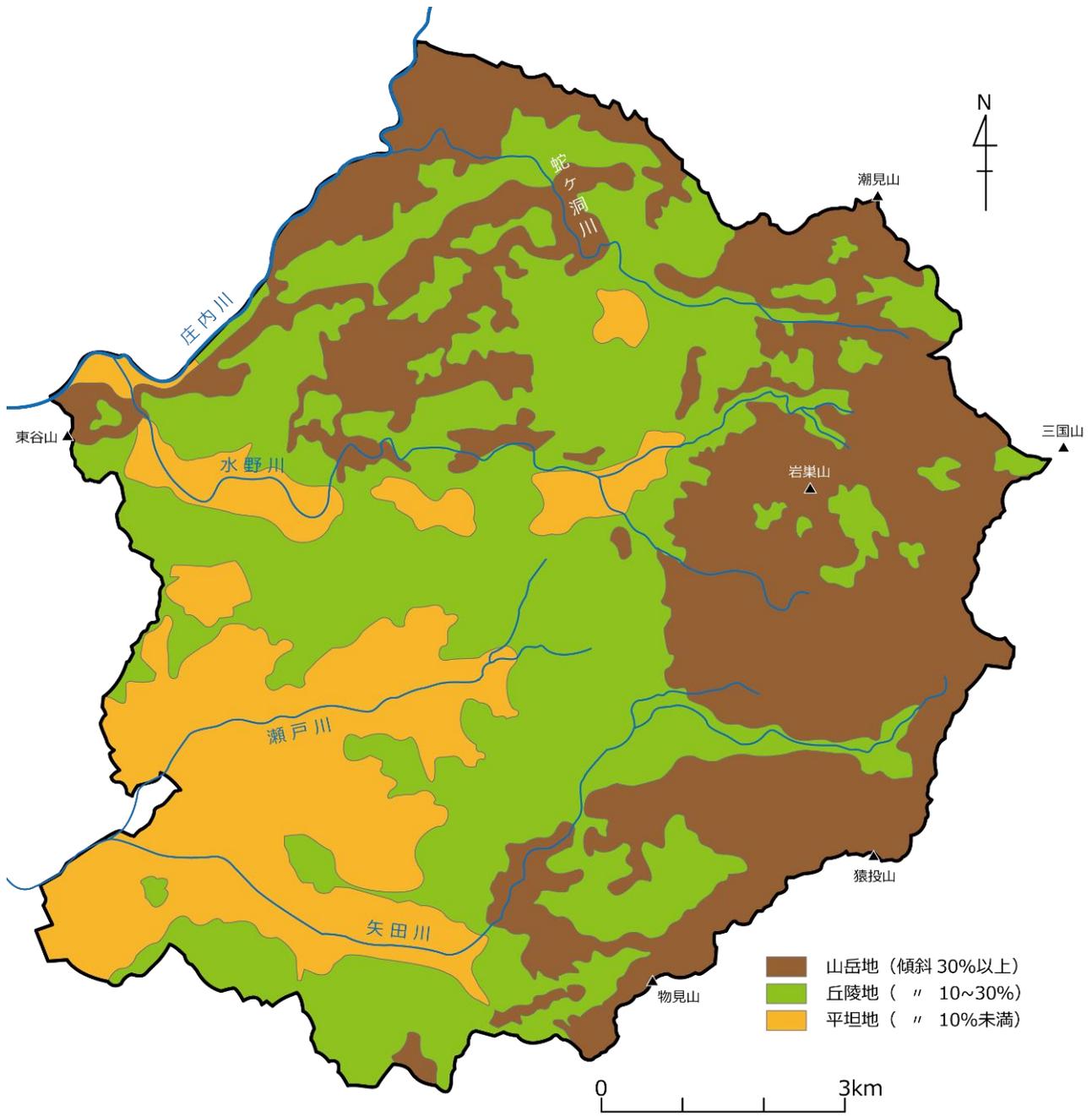
瀬戸市の位置

##### イ 地形・地質

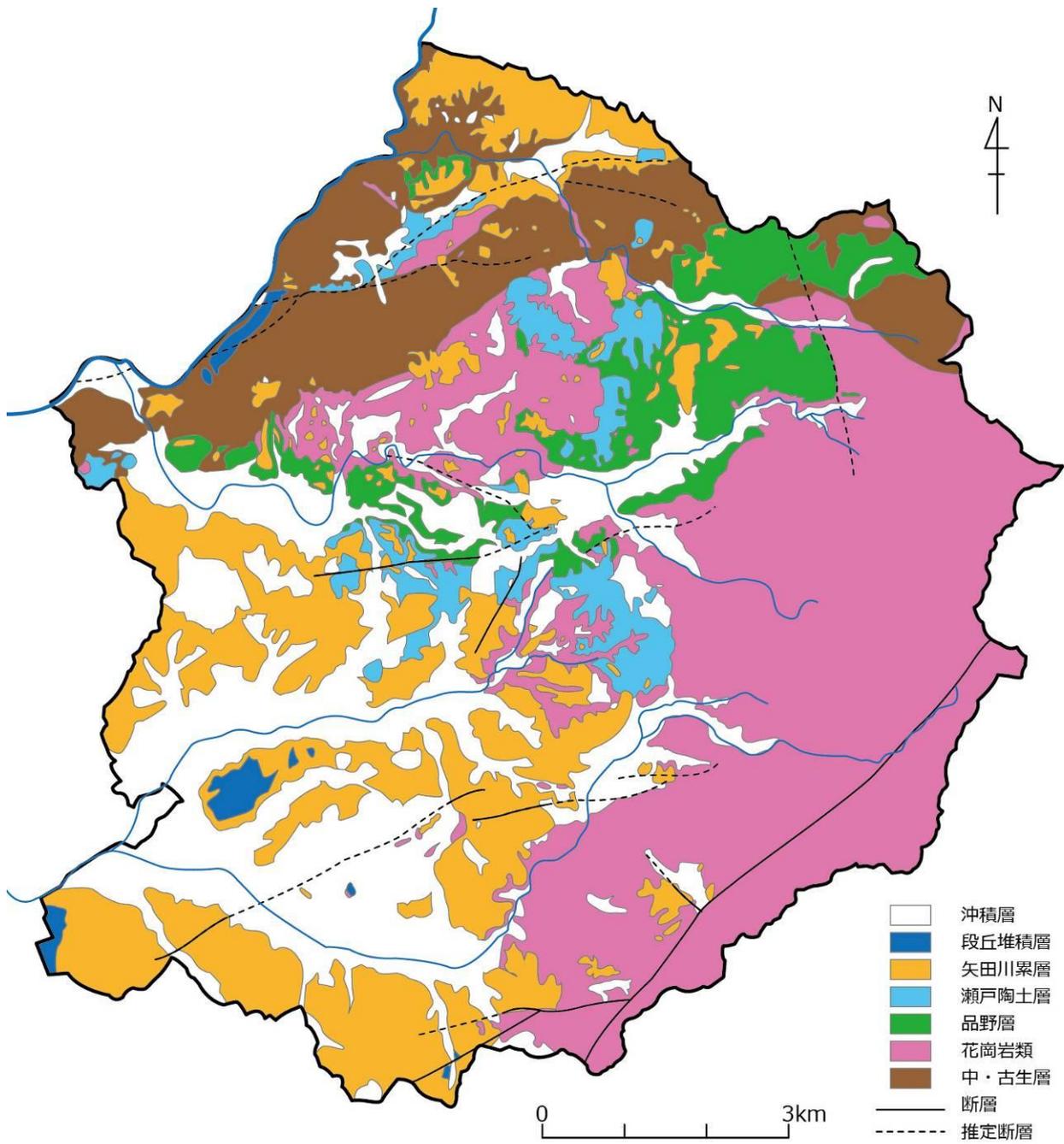
市域の大半が山地及び丘陵地に占められており、東側の<sup>みくにやま</sup>三国山(標高 701m)を最高点として西側へと高度を下げています。

市境の北部から南西部に庄内川が流れ、その支流である<sup>じゃがほらがわ</sup>蛇ヶ洞川、水野川、瀬戸川、矢田川(山口川・赤津川)が市域を東から西にかけて流れています。河川沿いには狭い沖積地が形成され、現在の市街地は主にその沖積地上と丘陵末端部に広がっています。

地質は、市域北部に中生層、東部に花崗岩類がみられ、基盤層となっています。瀬戸市の特徴である瀬戸陶土層は基盤である花崗岩が小規模な湖沼に風化して堆積したもので、約 1,000 万年前の中新世頃の地質年代とされています。



瀬戸市の地形



瀬戸市の地質

## ウ 気候

冬期には雨量が少なく北西の季節風が吹き、夏は高湿度・高気温となる東海気候区分に属しています。

年平均気温は15℃前後、年間の降雨量は1,200～1,500mm程度。降雨日数が最も多いのは4月ですが、雨量が最も多いのは7月であり、梅雨時期は大雨となる場合が多くみられる傾向があります。

山地・丘陵地と沖積地では気温差が平均2℃程度みられ、降雨量も山地・丘陵地の方が多い傾向を示しています。

## エ 植生

山地・丘陵地は森林となり市域の3分の2を占めています。

三国山の標高550m以上は温帯下部林に属し、照葉樹林を形成するアラカシ・サカキなどが見られず、アカマツ・コナラなどが優占しています。三国山・<sup>さなげやま</sup>猿投山の標高400m～550mあたりは、暖温帯上部林となり、アカマツ・ゴヨウマツなどの針葉樹が主体となり、イヌブナ・ミズナラなどの温帯性広葉樹を交えた高木層が形成されています。それ以下の丘陵地は暖温帯下部林となり、アラカシ・ツブラジイ等の常緑照葉樹にアベマキ・ムクロジなどの落葉広葉樹が混在しているとされています。

特色ある木としては、マメナシやシデコブシといった湿地性の樹木があり、特にマメナシは本州中部の極めて狭い範囲に自生する「東海丘陵要素植物」の一つです。また、平成8年(1996)に新種として発表されたマルバタラヨウは、国内でも例の少ない大変貴重な樹木です。

市内の森林には、造林地などの人工林が多く含まれていることも特徴です。

また、明治中期まで窯業燃料として周辺森林の皆伐が行われたため、<sup>はげやま</sup>荒廃した禿山が広がり、河川への土砂流出などが頻繁に起きていました。こうした荒廃地への植林は、砂防工事として近世から行われており、本格的には、明治11年(1878)のオランダ人技術者ヨハネス・デ・レーケによる調査、明治38年(1905)アメリゴ・ホフマンによる工事から始まり、現在まで続いています。砂防工事における植林は、クロマツとヤシャブシを交互に植え、土留め用にハギ・ススキ・シバなどが植えられています。その後自然にアカマツ・コナラ・モンゴリナラ・ツツジ類などが自生して、現在の林地となっています。



マメナシ



マルバタラヨウ

オ 動物

特筆すべきなのは蛇ヶ洞川<sup>じやがほらがわ</sup>に生息する国の特別天然記念物のオオサンショウウオです。ここは西日本に分布するオオサンショウウオの生息地としては東端にあたり、人工巣穴での繁殖も確認されています。

また、国の特別天然記念物であるニホンカモシカも確認されています。



オオサンショウウオ



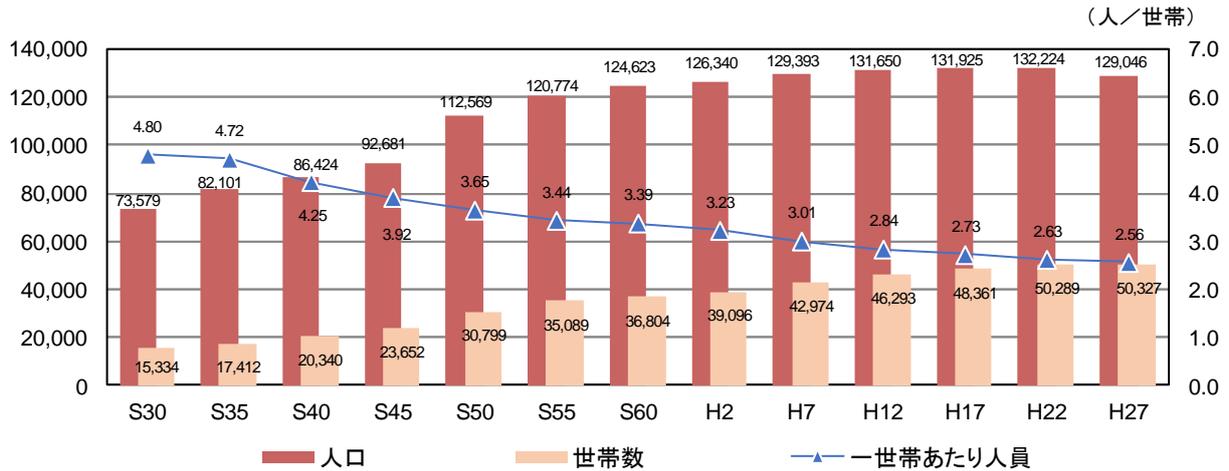
夜間観察会

(2) 社会環境

ア 人口・世帯数の推移

国勢調査によると、平成27年は人口129,046人、世帯数50,327世帯、一世帯あたり人員は2.56人となっています。人口総数は昭和30年から昭和55年にかけて急増し、その後も増加を続けてきましたが、平成22年から平成27年にかけて2.3%減少しています。人口は減少しましたが、世帯数は微増の状態が続いています。

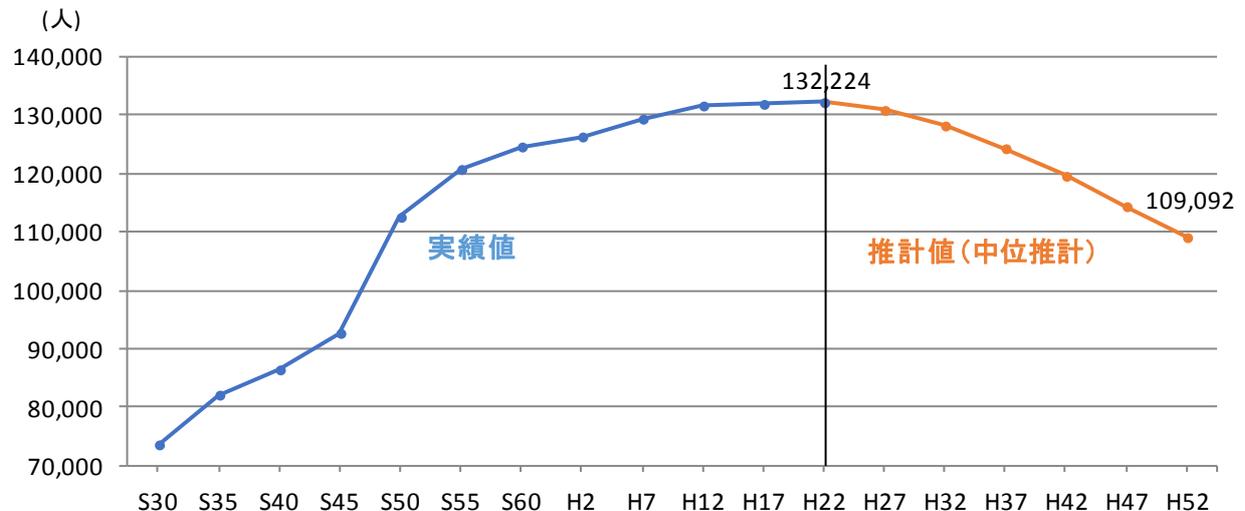
■人口・世帯数の推移



資料：国勢調査

国立社会保障・人口問題研究所による将来人口推計(平成25年3月推計)によると、瀬戸市の人口は平成22年をピークに減少し、平成52年には109,092人となり、ピーク時の82.5%まで減少するものと見込まれています。

■人口の将来予測

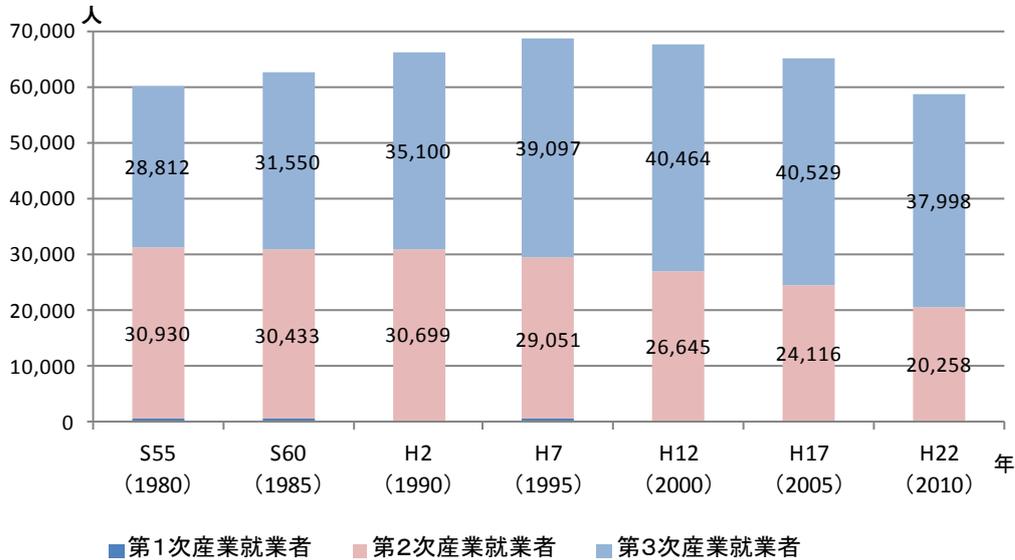


資料：日本の地域別将来人口推計(平成25年3月推計)、実績値は国勢調査

イ 産業構造

昭和55年では、第2次産業就業者は3万人を超えており、第3次産業就業者を上回っていましたが、第2次産業就業者は減少を続け、平成22年では、第2次産業就業者比率34.8%に対し、第3次産業就業者比率は65.2%となっており、第3次産業を中心とするまちに移行しています。

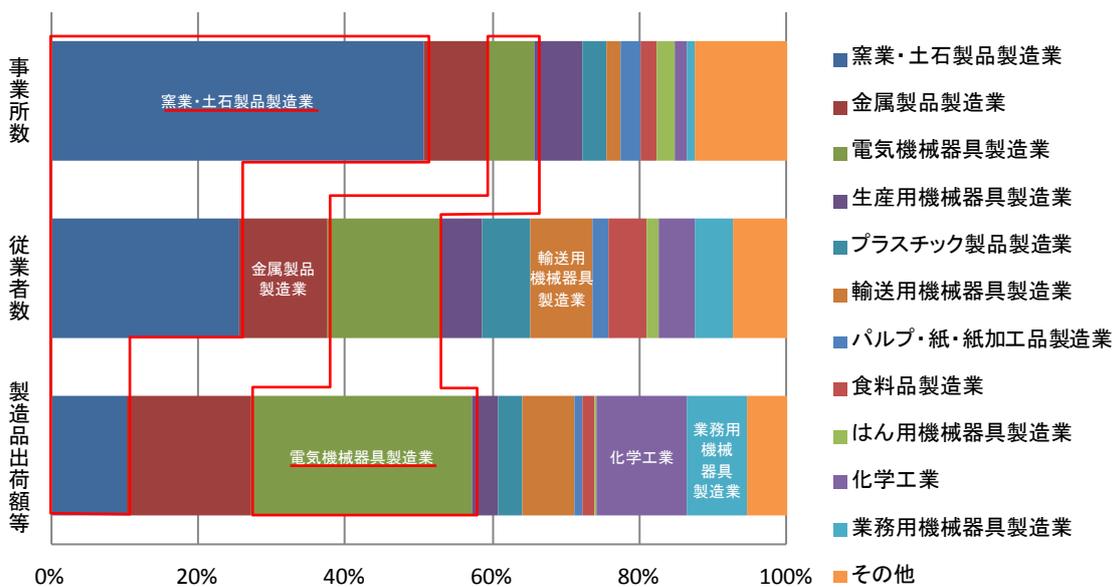
■産業別就業者数の推移



資料: 国勢調査

製造業の状況をみると、事業所数では窯業・土石製品製造業が4割を超えるものの、製造品出荷額では1割程度にすぎず、陶磁器産業から派生した碍子やファインセラミックスなどを含む電気機械器具製造業が製造品出荷額の3割を占めています。やきものを中心に発展してきた「ものづくりのまち」としての特徴を示しているといえます。

■製造業における産業別 事業所数・従業者数・製造品出荷額等の構成比



資料: 平成26年 経済センサス

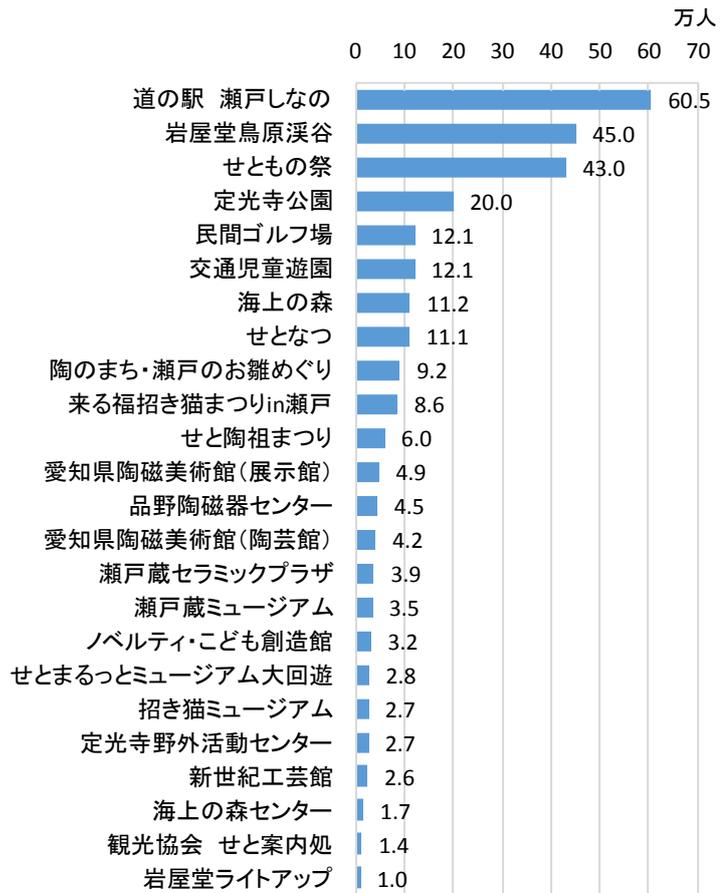
ウ 観光

瀬戸市内で年間利用者数が最も多いのは、「道の駅 瀬戸しなの」60.5万人であり、「岩屋堂鳥原いわやどうとりはら溪谷けいこく」45.0万人、「せともの祭」43万人と続きます。この3つで瀬戸市全体の半分を占めています。

美術館などの展示施設の利用者は、最も多い「愛知県陶磁美術館（展示館）」で4.9万人にとどまっています。

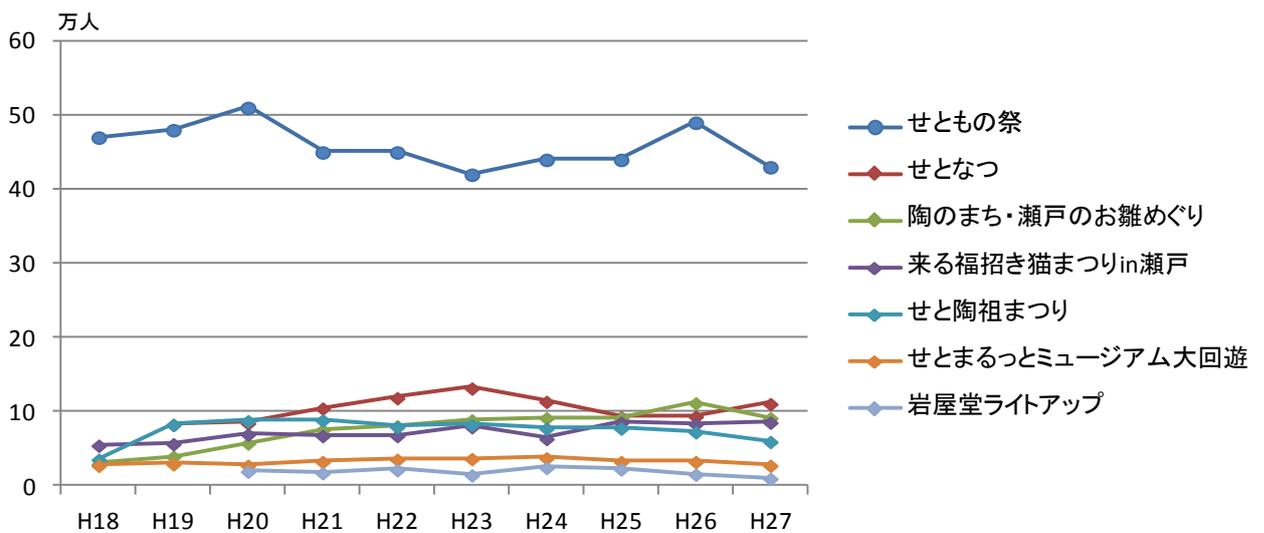
祭り・イベントでは、「せともの祭」が突出しており、次いで「せとなつ」11.1万人、「陶のまち・瀬戸のお雛めぐり」9.2万人、「来る福招き猫まつり in 瀬戸」8.6万人、「せと陶祖まつりとうそ」6.0万人と続きます。年によって変動はあるもののここ10年では、ほぼ横ばいの集客となっています。

■年間利用者数(平成27年)



資料：愛知県観光レクリエーション統計

■祭・イベントへの参加者の推移



資料：愛知県観光レクリエーション統計

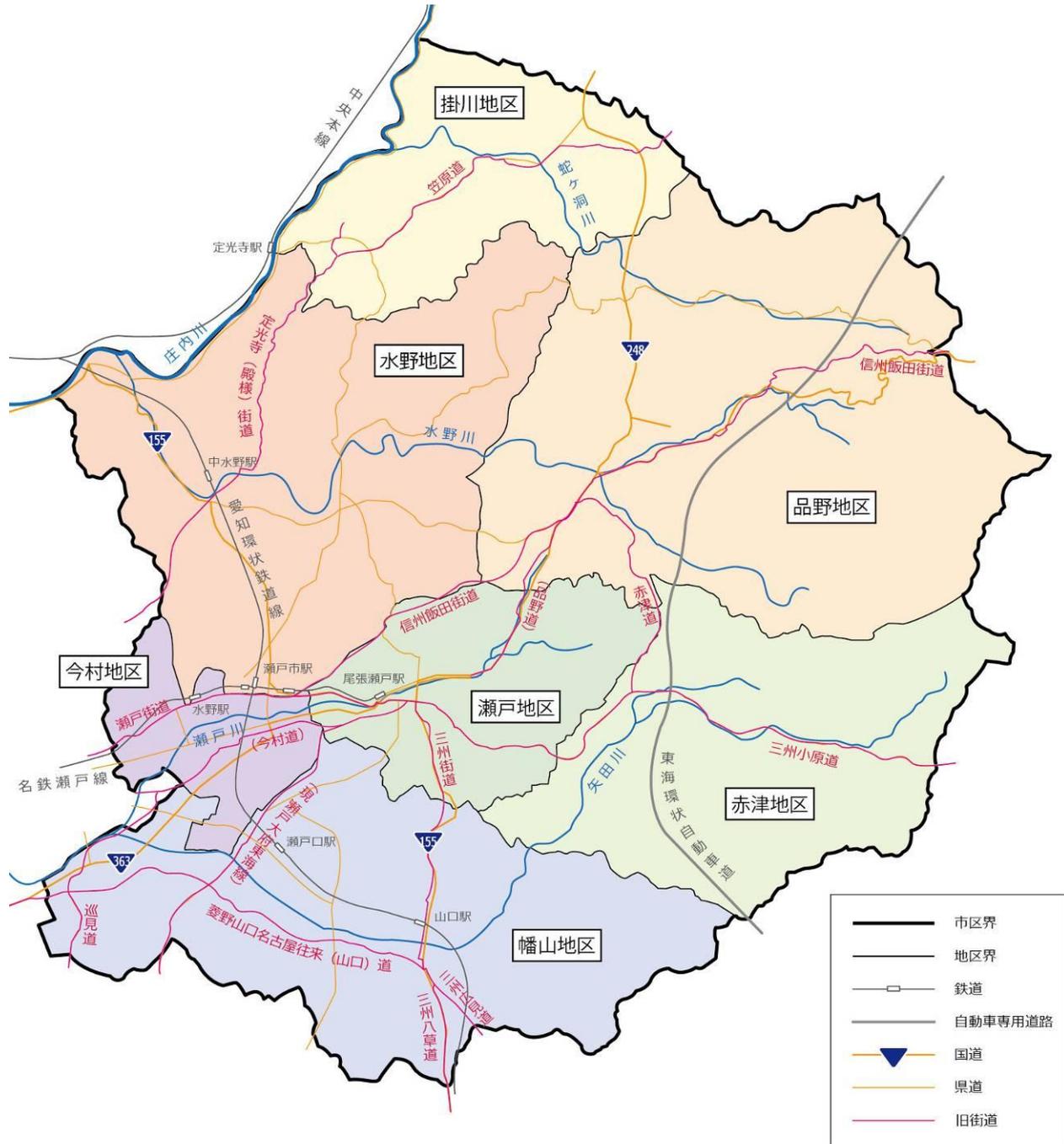
エ 風土・地区区分

現在の瀬戸市は、江戸期の18の村々からなっています。これらの村々は、明治22年(1889)以降の町村合併を経て、瀬戸市域が形成されますが、前後の歴史的・文化的背景から、下表の7地区に区分されます。

地区名	位置	特徴
幡山地区	市域南部	中央部には矢田川(山口川)が東西に流れ、集落や耕作地が川沿いの沖積地上に広がっている。農業や養蚕、窯業関連の採土や運搬、販売などが生業の中心であった。
今村地区	市域西部	瀬戸川を挟んで南北に広がる。今村は街道(信州飯田街道・瀬戸街道)沿いにあることから陶磁器や薪炭等の運送業や宿屋・茶屋、商家などが軒を並べていた。
赤津地区	市域東部	赤津川(矢田川上流)沿いの盆地と周囲の丘陵斜面。伝統的な窯業地であり、農業とともに陶磁器生産を主な生業としていた。
瀬戸地区	市域中央部	瀬戸川の南北に市街地を形成。近世に窯場が集中し、近代以降急速に町場を形成し、陶磁器産業を中心に工業、商業を主体としたまちとなっている。
水野地区	市域北西部	水野川沿いの沖積地上に集落や耕地が広がっている。 尾張初代藩主廟所の敷瓦も焼いた上水野村穴田窯の廃絶後は、尾張徳川藩主の御狩場となり、農業主体の村であったが、近代に入ると、上水野村でも窯業生産が復活し、中水野村では陶土や瓦粘土、薪炭の運搬を行う家が増加した。 上水野村には御林方奉行所、中水野村には代官所が置かれ、近世において尾張藩政との関わりが強い地区である。
掛川地区	市域北部の山間の集落	沓掛村は初代尾張藩主徳川義直の廟所がある定光寺の門前にあたり、定光寺との関わりが深い。農業のほか養蚕が盛んであった。 下半田川村も農業のほか、窯業燃料である薪刈などの山仕事が盛んであった。 また国境の村でもあるため、沓掛村は春日井・高蔵寺方面、岐阜県多治見方面とも生活圏がつながっていた。
品野地区	市域北東部の品野盆地とさらに北東の山地内にある信州飯田街道沿いの村によって構成	品野盆地内では、品野川(水野川上流)の上流から上品野・中品野・下品野の三村に分かれている。近世には下品野村で窯業生産が行われ、近代に入ると中・上品野村でも窯業が盛んとなる。下品野村は品野地区の中心地として街道沿いに町場が形成され、荷継ぎ問屋や窯屋、商店、造り酒屋や料理店などが軒を連ねていた。 飯田街道沿いには白岩村、片草村があり山仕事中心の村であった。また、山地を挟んだ北側には上半田川村があり、近代には盃製造を中心とした窯業も盛んであった。

これらの地区は、すべての地域が瀬戸地区と強いつながりを持っていたわけではありません。下品野は明らかにこの地域のもう一つの中心市街地となっており、下半田川では多治見、沓掛では春日井・高蔵寺などが生活圏内の市街地として機能しています。また、集落における祭礼・儀礼といった民俗面においても、その中心が尾張平野や尾張丘陵、西三河西部あるいは東濃、中濃、西濃のものがみられ、市内の民俗的な地域差となっています。

しかし、どの地区においても、特に近代以降は、「窯業」と何らかのつながりを持っている点が瀬戸市域の最も顕著な特徴としてあげられます。それは、陶磁器生産、陶土の採掘、運搬、燃料となる薪炭しんたんの供給、陶磁器販売、またそれらに関わる人を相手にする様々な商店や飲食店と役割は異なりますが、それぞれの生業や生活の中において窯業生産が共通して存在しています。地域差がありながらも窯業とのつながりを持っていたことが歴史的・文化的に共通する特徴と考えられます。



瀬戸市を構成する地区

## 2 歴史的背景

### (1) 旧石器時代～弥生時代

瀬戸市域では愛知県内でも貴重な旧石器時代や縄文時代の遺跡が発見されています。品野地区に所在する上品野遺跡は、旧石器時代遺跡としては愛知県内では最も古い遺跡です。後期旧石器時代初めごろの台形状石器や局部磨製石斧きよくぶませいせきふが出土しており、小規模ながらも学術的に貴重な遺跡となっています。

縄文時代では、草創期の遺跡として品野地区の品野西遺跡ゆうぜつせんとうき おのがたせつきから有舌尖頭器や斧形石器が出土しており、旧石器時代から縄文時代へと移行する時期を代表する遺跡の一つとなっています。また中期から後期にかけては、幡山地区の吉野遺跡、赤津地区せうさく かねばの惣作・鐘場遺跡、長谷口遺跡では住居跡、水野地区の内田町遺跡では落とし穴遺構が発見されており、この地区での集落の様子を知ることができます。

東海地方の弥生時代は、北部九州から伝わってきた遠賀川式土器様式おんががわが尾張平野に、在来の条痕文土器様式じょうこんもんどきが三河地域に分布していますが、瀬戸市域では遠賀

川式土器は現在までのところ確認されていません。庄内川中流域対岸の春日井市松河戸遺跡まつかわどでは遠賀川式土器様式の環濠集落、勝川遺跡でも遠賀川式土器が大量に出土しており、庄内川が一つの境界となっています。幡山地区の吉野遺跡では、弥生中期の水田状遺構が発見され、水田跡としては愛知県内でも古い遺構です。また、赤津地区の長谷口遺跡では弥生中期の住居跡が確認され、ここでは三河系と尾張系の土器がともにみられます。

弥生時代から古墳時代初めにかけての集落は、赤津地区の惣作・鐘場遺跡で確認されています。集落は川と溝によって周囲が囲われています。溝は断面がV字状に掘られ、防御機能を持つ、比較的規模の大きな集落です。また、水野地区の内田町遺跡ほうけいしゅうこうぼでは弥生時代末の方形周溝墓の一部と思われる溝が確認されています。

弥生時代の瀬戸地域は、尾張・三河の境界の地として、三河的要素の強い前期から、尾張平野の土器文化に含まれつつも独自の地域性を持つ後期へと移行し、古墳時代へ移行しています。

### (2) 古墳時代

古墳時代前期は、大型の前方後円墳が出現し、全国へと拡散する時代です。尾張地方では、前方後円墳に先駆けて前方後方墳が築造されています。名古屋市境とうごくさんの東谷山頂上に所在する尾張戸神社古墳おわりべ(東谷山古墳)は4世紀中頃の築造と考えられていますが、前方後方墳の可能性が指摘されています。また、前方後円墳としては東谷山西麓しらとりづかの白鳥塚古墳があり、庄内川流域は比較的古い段階から前方後円墳が築造されている地区です。



品野西遺跡出土有舌尖頭器

古墳時代中期後半の尾張地方では、熱田台地<sup>だんぶさん</sup>の断夫山古墳や春日井市味美<sup>あじよし</sup>の二子山古墳など全長100mを超える大型古墳が築造されています。矢田川沿いでは、この時期に帆立貝式<sup>ほんじおおつか</sup>の前方後円墳である本地大塚古墳や方墳である駒前第1号墳<sup>こままえ</sup>が築造されます。こうした古墳の動向から、矢田川流域の地域的なまとまりが進み、尾張地方の支配体制の中に組み込まれていったものと考えられます。



本地大塚古墳(市指定史跡)

その一方で、矢田川上流の丘陵内には、6世紀前半の高塚山1号墳、吉田2号墳など竪穴系横口式石室を有する古墳群が出現します。この古墳は北部九州に起源を持ち、伊勢

から西三河地方の矢作川流域に特徴的に分布しています。また、古墳築造に先立つ5世紀後半には、多量の須恵器<sup>すえき</sup>や鍛冶遺構、韓式土器を持つ住居跡が確認される吉野町の吉田奥遺跡があり、西三河から市域南部へ新たに進出した特殊技能を持つ集団の集落であった可能性があります。6世紀から7世紀の円墳・横穴式石室を基本とする群集墳は、矢田川上流域と水野川流域北側の丘陵内に分布しています。水野川流域の古墳は、名古屋市上志段味地区の東谷山古墳群との関係が強く、畿内系と北部九州系の横穴式石室がともにみられます。ただし、東谷山古墳群は7世紀前半にはほぼ終焉するのに対し、水野川流域では分布の中心は7世紀後半代で8世紀まで継続し、奈良期まで古墳の築造が継続する地区となっています。なお、『延喜式』に記される官社である山田郡十九座の中に、大目神社<sup>おおま</sup>、深川神社<sup>おわりべ</sup>、尾張戸神社<sup>おがね</sup>、金神社があり、後に移転した金神社を除いては、いずれも古墳が境内にあり、古墳が後代に各地区の信仰対象となっています。

### (3) 奈良・平安期

奈良期の瀬戸市域は、平城宮出土木簡の「山田郡山口郷」が幡山地区の山口にあたることから、奈良期から室町期まで存在していた山田郡に含まれています。山田郡は現在の瀬戸市域及び庄内川南側から天白川上流域までを含む範囲と考えられています。品野地区の品野西遺跡や落合橋南遺跡では、7世紀後半の瓦や奈良期の大型住居跡や総柱掘立柱建物跡など、大規模な集落の存在が確認されています。また上品野遺跡や上品野蟹川遺跡では平安期の木製祭祀具<sup>ほくしよかいゆうとうき</sup>や墨書灰釉陶器が多量に出土しており、これらは古代の律令的祭祀に関わる遺物と考えられています。こうした特殊な遺跡が分布することから、品野盆地内に展開する7世紀から11世紀に至る集落群は山田郡内でも拠点的な集落で



品野西遺跡出土墨書土器(須恵器)

あったと考えられています。

平安期後半は、荘園や国衙領といった荘園制の中での耕地開発が進んだ時代です。この時代の瀬戸市域内での所領関係が分かる史料は乏しいですが、山田郡内では庄内川流域に醍醐寺領安食荘や鳥羽上皇と関わりの深い安楽寿院領が所在しており、こうした荘園や公地である国衙領を直接支配する荘官や国府の在庁官人など在地武士の所領として開発が進められていました。山田郡に勢力を持った武士としては、尾張源氏の山田氏が知られています。源重宗を祖とする重宗流源氏は、重宗の子重時の代に白河院のもとで、京の軍事を担う武士として院の警護にあたり、一族の重実の子重貞、重遠の代に尾張へ進出し、山田を名乗るに至っています。

市域各地に残る条里地割は、こうした平安期後半の開発状況を知る手がかりとなります。幡山地区、水野地区、品野地区、赤津地区には条里由来の字名や水田区画が確認できます。水野地区の内田町遺跡や幡山地区の吉野遺跡では、平安期末から鎌倉期の屋敷囲いや掘削水路の方向が航空写真等から復元される条里地割の方向と一致しており、平安後期から鎌倉期にかけて条里区画に基づく水路の掘削や屋敷地の配置が行われていました。

#### (4) 鎌倉期

鎌倉幕府成立後は、尾張源氏は鎌倉幕府に圧迫され、承久3年(1221)の承久の乱では、山田重忠ら尾張源氏は京方に属し、幕府軍と美濃・尾張国境で戦い、敗れています。承久の乱後、山田氏は没落し、その郎党も多くは同様の運命をたどったものと思われます。

代わって鎌倉から新守護が尾張に赴任し、新たな地頭として鎌倉武士が入ってきます。

しかし鎌倉期後半になると、再び山田氏が瀬戸地域で復活し、重忠の孫にあたる山田重親とその子重泰、泰親、親氏らが上・下菱野村(幡山地区)や鳥原村(品野地区)で北条氏被官として地頭職を得ています。重親は八事迫地頭とされ、名古屋市天白区八事から日進市岩崎、瀬戸市山口・菱野あたりに至る丘陵地の谷間に散在する所領群を束ねた地域に所領を得ています。

水野地区では、平安期末に山田氏により志談郷の郷司に任じられたとする水野氏が勢力を拡大し、鎌倉期後半に水野氏を名乗るようになります。南北朝期になると、足利尊氏と弟の直義が対立する「観応の擾乱」に水野致秋(致頭)が直義派、水野致国が尊氏派に分かれて対立し、直義派が敗れた後、致秋は新田氏につき関東に所領を得ています。しかしその後水野に戻り、致国の権益を吸収して水野の支配権を得ています。鎌倉期から南北朝期にかけて、水野地区から品野地区は「水野上御厨」として熱田社領となっています。この社領には耕地だけでなく「山千余町」として広大な山林を含んでいました。山林は社殿用材の供給地であると同時に薪材採集、窯場などの生業が行われる場所であり、林地



鉄釉巴文瓶子(県指定有形文化財)

管理が必要な領域です。水野氏はこうした林地支配に長けた一族であったと思われ、江戸期になると尾張藩の御林方奉行を務めるようになります。

## (5) 室町期

南北朝期の尾張国主は京都醍醐寺三宝院に相伝され、国衙領(公領)には国主の支配地と、地頭が開発し管理を請け負う「保」や「村」が存在していました。「飽津保」は、南北朝期の史料に表れ、現在の赤津地区から瀬戸地区、今村地区までを含むと考えられています。

室町期になると、こうした国衙領に対し、室町幕府により尾張守護に任ぜられた大名が、配下の者を給人として送りこみ支配を強めるようになり、従来の地頭請が崩れていきます。15世紀に入ると尾張守護斯波氏や守護代織田氏の配下の者が国衙領に配置されるようになりました。また、地下と呼ばれる自治的な村落が形成されるようになり、瀬戸地区深川神社の永享2年(1438)銘の梵鐘には「瀬戸村」の文字が刻まれ、梵鐘を鑄造する経済力を持った村落の姿をうかがうことができます。また隣接する今村は松原氏の支配となっており、寛正5年(1464)に赤津の万徳寺に太子堂および田畑を寄進した松原広長など、現地に赴任しそのまま定着した給人領主も登場します。

瀬戸市北部、応夢山に所在する臨済宗定光寺は、暦応3年(1340)の創建です。水野の有力者中郷氏の求めにより平心処斎が開山したとされており、美濃から尾張東部まで影響力を持った格式の高い寺院でした。一方、赤津地区の曹洞宗寺院である雲興寺は、応永6年(1399)創建。開山は天鷹祖祐で、その弟子の天先祖命が実質的な開山とされています。禅宗や浄土真宗などの新仏教に対して、古代からの顕密寺院は、瀬戸市域では菱野の東福寺などの天台宗の寺院があります。現在菱野郷倉に保存される東福寺大般若経には鎌倉期のものも含まれており、本来は岐阜県瑞浪市釜戸の瑞応禅寺にあったものです。地域や宗派を越えてもたらされた經典であり、中世後期の寺院を通じた地域間交流を示しています。



定光寺



深川神社永享二年銘梵鐘



万徳寺「聖徳太子絵伝」

## (6) 戦国期

瀬戸市内には現在までのところ、伝承地も含めて24ヶ所に中世の城館跡があります。多くは丘陵内の山城ですが、松原広長の居城とされる今村城や林次郎左衛門の居城とされる菱野城は、沖積地に立地し灌漑用水の要地となる場所に築かれています。

品野地区の品野城と桑下城は、信州飯田街道(中馬街道)を挟んだ対の城館跡で、今村城の松原広長と戦い、これを破ったとされる永井(長江)民部の居城とされています。また永井(長江)民部は松平内膳の臣とされており、松平内膳は徳川家康の父松平清康の叔父松平信定と推定されています。この地は尾張三河の国境にあたり、中馬街道沿いの要所として、尾張勢と三河勢がたびたび争っています。享禄2年(1529)に松平清康が品野郷を奪取し、信定に与えたものの、天文4年(1535)の清康暗殺に伴う内紛により、駿河今川家の管轄となります。その後織田信長の父織田信秀と今川義元の間で尾張・三河の境を巡っての攻防が繰り返され、品野城も織田方に攻められています。しかし、永禄3年(1560)織田信長が桶狭間合戦において今川義元に勝利すると、尾張内における今川勢力が弱まり、品野城も放棄され、境の城としての機能がなくなって廃城となりました。

瀬戸市域における戦国大名や織田・豊臣・徳川などの織豊政権との関わりは、定光寺、雲興寺に出された禁制史料でみることができます。禁制とは、戦闘地域に含まれる郷村や寺社に対し、軍勢の略奪行為等を制止すべく出された文書です。天文19年(1550)の今川義元禁制以降、織田信長、信忠、信雄、松平忠吉、安藤重信の禁制文書が定光寺と雲興寺に伝えられています。永禄元年(1558)の織田信長禁制では、一般的な軍勢の立ち入りや略奪を禁止する条項に加え、信長領国中における通行の自由の保障や通行税の免除があり、瀬戸焼流通にも関わる条項とされます。

## (7) 江戸期

江戸期になると、瀬戸は尾張徳川家領となり、徳川家康の意向を受け瀬戸の窯業の保護に力を入れました。また、初代尾張藩主の徳川義直は鹿狩に水野をたびたび訪れており、寛永18年(1641)には「水野御殿」とされる山荘が水野の地に建てられています。

水野氏は平安期末以降、水野地区の在地領主であった一族ですが、水野正勝は義直の狩場案内役として召し出され、さらには林地管理に長けていたことから、木曾山林を除く尾張藩直轄林の支配を行うようになりました。代々の藩主および家中の狩猟が水野で行われる際には、水野氏が案内役を務め、正徳元年(1711)の朝鮮通信使の饗応には鹿肉等の食材の手配が入念に行われた様子など、在地文書などからうかがわれます。

義直死後、定光寺が墓所とされ源敬公廟が建てられると、歴代藩主が訪れるようになり、正勝の孫正秀の代に林奉行に任せられ、水野御殿の地に御林方奉行所が設置されました。

明和4年(1767)の集中豪雨、安永6年(1777)の干ばつ、安永8年(1779)の台風被害により、年貢皆済ができない百姓と村役人などの裕福な百姓との格差が広がっていく中で、名古屋城下にある代官所への訴えも頻発し、従来名古屋城下にある国奉行所の代官では対応が困難となり、天明元年(1781)各地区に代官所を設置し、村方支配を現地で行うこととなりました。中水野村に置かれた水野代官所は、愛知郡東部から春日井郡および美濃国可児郡の一部までを支配村としており、尾張藩東部を管轄する代官所でした。代官には林奉行である水野正恭が兼任し、当初は役人の官舎が置かれる程度でしたが、文化10年(1813)に本格的な代官陣屋が整備されました。

瀬戸村では、享和元年(1801)に磁器生産が始まり、その直後に御蔵会所が設置されます。瀬戸窯の陶磁器は尾張藩専売制度の元、全国へ流通すると、窯屋だけでなく、その下働きや原料となる土取り、石粉製造、運搬など陶磁器関連の稼ぎ手も増加し町場が形成されていきました。

慶応3年(1867)に瀬戸村禅長峰(現在の陶祖公園)に六角陶碑が建設されます。これは伝説の陶祖加藤四郎左衛門景正を顕彰した碑で、陶製碑としては国内最大のもので、陶祖伝説は江戸前期の茶陶書に表れ、窯屋の筋目を示すものとして祀られてきましたが、尾張藩による窯屋統制により重要性が薄れてきたため、旧来の窯屋たちによって顕彰碑が建設されたものです。



水野代官所跡碑



六角陶碑

(8) 明治・大正期

明治4年(1871)の廃藩置県により尾張藩が廃止され、名古屋県さらには愛知県となります。瀬戸村を中心とした窯業生産は海外輸出など新たな販路拡大により急速に発展していきます。

瀬戸村は明治25年(1892)に瀬戸町となり、市街化が進み、瀬戸川を挟んだ北新谷きたしんがいと南新谷みなみしんがいには、町役場、郵便電信局、警察分署などの官衙、尋常小学校、瀬戸陶器学校などの学校、陶磁器試験場、陶器館、陶磁工商同業組合事務所などの産業施設が建ち並んでいました。町制施行時には「瀬戸千軒」の町とも呼ばれていました。

また、瀬戸川の沿路には商店が軒を連ね、大きな劇場も開設されていました。そして、私設鉄道として瀬戸自動鉄道が設立され明治38年(1905)に開業します。

明治43年(1909)には、六角陶碑のある陶祖廟を中心として瀬戸公園が整備され、観光客の誘致が図られました。大正7年(1918)には品野村の定光寺一帯の公園計画が構想され、日比谷公園や明治神宮社叢の設計を行った本多静六らによる設計案も作られましたが、これは実現しませんでした。

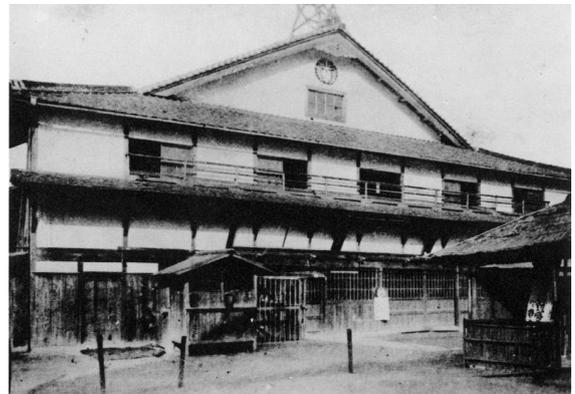
大正13年(1924)には品野村が品野町となり、翌年には瀬戸町が赤津村と旭村の今、美濃之池を合併しています。

■合併変遷図

今村	明治 22.10.1	明治 39.7.16	大正 14.8.25	昭和 4.10.1 瀬戸市
美濃之池村	八白村一部	旭村一部	瀬戸町	
瀬戸村	明治 25. 1. 29 瀬戸町		大正 14.8.25 瀬戸町	
赤津村				
上水野村	明治 22.10.1			昭和 26.5.3 瀬戸市
中水野村	水野村			
下水野村				
本地村	明治 22.10.1	明治 39.5.10		昭和 30.2.11 瀬戸市
菱野村	幡野村			
山口村				昭和 34.4.1 瀬戸市
下品野村	明治 22.10.1	明治 39.7.16 品野村	大正 13.1.1 品野町	
中品野村	下品野村			
上品野村				
白岩村	明治 22.10.1			
片草村	上品野村			
上半田川村				
下半田川村	明治 22.10.1			
沓掛村	掛川村			



瀬戸陶器学校(大正4年ごろ)  
(『瀬戸市制50周年記念誌』より)



陶元座(大正初めごろ)  
(『瀬戸市制50周年記念誌』より)

## (9) 昭和・平成期

昭和4年(1929)に市制施行され瀬戸市が誕生します。しかし翌年から昭和恐慌が始まり、市内の陶磁器工場は半休状態となり、労働争議も頻発します。昭和6年(1931)には満州事変が勃発し、国内に軍事色が強まります。そうした中、昭和7年(1932)の磁祖加藤民吉まつ かまがみしやを祀る窯神社の秋の祭礼日に、瀬戸陶磁器工商同業組合がせともの廉売市を開催して大好評となり、翌年以降「せともの祭」が継続して開催されることになりました。

昭和12年(1937)の盧溝橋事件をきっかけとして始まった日中戦争の長期化により、国内物資の統制が始まります。瀬戸の陶磁器生産も厳しく規制され、金属代用品としての陶磁器生産への転換や小規模事業者の転廃業も進められます。昭和16年(1941)に太平洋戦争が勃発すると、瀬戸市内の学校でも軍事教練が強化され、戦況が悪化すると勤労働員が始まり、生徒たちは軍需工場や開墾地での労働へと動員されていきます。また名古屋などで空襲が激化すると、水野村内(上本町)に愛知航空機瀬戸地下工場が建築されました。

昭和20年(1945)の終戦とともに、瀬戸は陶磁器産業を中心に急速に復興していき、総合型陶磁器産地として独自の発展を遂げます。昭和26年(1951)には水野村、昭和30年(1955)に幡山村、昭和34年(1959)には品野町と合併し、現在の瀬戸市となります。

瀬戸市は、高度経済成長期に陶磁器産地として最大の発展を遂げ、加えて、菱野団地や水野団地の造成など大都市名古屋近郊都市としての発展をしてきました。その後の低成長期においては、陶磁器産業の衰退を余儀なくされますが、市のアイデンティティとしての「瀬戸焼」は失われておらず、今日においても瀬戸市は「せとものまち」として全国に知られています。

平成17年(2005)に開催された愛・地球博では、瀬戸市南東部の海上の森が会場の一つとなり、多くの来訪者を迎えました。開催決定以来、瀬戸市では様々なハード・ソフト事業を手掛け、まちの姿は目に見える形に変貌し、多くの市民がボランティアとして来訪者をおもてなしし、市民の意識を変える機会ともなりました。さらに、「自然の叡智」をテーマとし、環境面での取り組みもすすみました。愛・地球博の成果を活かし、さらなる展開を図っていくことが期待されています。

### 3 文化財の現況

#### (1) 文化財把握の経過

瀬戸市における文化財調査は、窯跡調査が明治期より寺内信一(半月)や塩田力蔵などの陶磁器研究者によって行われています。その後陶芸家の加藤唐九郎や陶磁器研究者の赤塚幹也が発掘調査や分布調査を行っており、主要な窯跡について広く知られていました。

昭和29年(1954)に瀬戸市史編纂事業が開始され、陶磁史、一般史のための調査が行われ、これにより、市内の古墳や原始・古代の遺跡が知られるようになり、愛知県の遺跡地図にも窯跡以外の遺跡が掲載されるようになりました。また、瀬戸窯業の近代化に伴い、伝統的な生産様式や用具類が失われつつあったため、昭和38年(1963)から有形民俗文化財として「瀬戸の陶磁器の生産道具及び製品」の調査・収集が行われます。昭和48年(1973)からは愛知県により瀬戸市と常滑市の窯業生産に関わる有形民俗資料の調査が行われ、「瀬戸の陶磁器の生産用具及び製品」は昭和49年(1974)に国の重要有形民俗文化財に指定されました。

昭和49年(1974)には瀬戸市歴史民俗資料館が開館し、国指定民俗文化財の保存・展示を中心に、民俗・歴史・考古などの郷土資料の収集が行われるようになります。また、昭和47年(1972)に瀬戸市文化財保護条例が制定され、文化財保護審議会による文化財調査が実施され、昭和49年(1974)に瀬戸市指定文化財第1号として「六角陶碑」が指定されています。開発に伴う発掘調査も増加し、窯跡を中心として、古墳や集落跡の発掘調査が多く行われるようになりました。

また愛知県では、県内の重要産業である陶磁器生産の歴史を把握するため、猿投窯をはじめとする窯跡群の分布調査を昭和42年(1967)から行っています。瀬戸市においても、平成4年(1992)から市内全域を対象とした遺跡分布調査が文化庁の補助を受けて行われ、新たな窯跡も発見されています。また、平成9年(1997)以降は、保存のための重要遺跡試掘調査や緊急発掘調査を市内遺跡発掘調査として継続的に実施しています。

平成4年(1992)には、市内及び周辺地区の埋蔵文化財調査に対応するため瀬戸市埋蔵文化財センターが設立され、緊急発掘調査とともに、国内を代表する陶磁器産地である瀬戸窯をテーマとした研究が進められ、全国から出土した瀬戸焼を集成する「瀬戸焼データベース」の構築を行っています。

建造物を中心に近代史に関わる文化財への関心が高まり、平成14年から、愛知県教育委員会が文化庁の補助を受けて「近代化遺産」「近代和風建築」の調査を実施し、瀬戸市内でも城嶺橋しろがねぼし(掛川地区)や瀬戸永泉教会えいせん(瀬戸地区)などが取り上げられました。また市街地を対象として、「窯垣調査」や「歴史的建造物実測調査」が行われ、平成21年(2009)に瀬戸永泉教会、平成27年(2015)に旧山繁商店やましげが国の登録文化財となりました。

天然記念物を対象とした調査は、昭和60年(1985)に瀬戸市史自然編のための植物、動物、地質調査が行われ、平成5年(1993)から瀬戸市の名木調査が行われています。また平成18年(2006)からは蛇ヶ洞川じゃがほらがわのオオサンショウウオの生息分布調査を文化庁の補助を受けて実施されました。

以上に示したように文化財把握の調査は、埋蔵文化財、歴史資料、民俗資料、自然、建築物など多種類の文化財を対象として実施されています。特に窯業関係の文化財についての資料は膨大なもので、陶磁史資料として全国的にみても貴重なものとなっています。

## ■瀬戸市史編纂調査 (47 ページを参照)

調査主体	瀬戸市・瀬戸市教育委員会	調査期間	昭和 29 年～平成 22 年度
調査の目的	瀬戸市史刊行のための史料調査として、歴史文書、民俗、考古資料等の収集調査を行った。		
概要	<p>陶磁史調査(昭和 29 年～平成 22 年)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・穴田 1・2 号窯跡発掘調査、赤津長根第 1・2 号窯発掘調査、昔田窯跡発掘調査などを実施。</li> <li>・近世窯屋文書などの調査を実施。</li> </ul> <p>自然編調査</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・市内の地質、鉱物、植物、動物の調査を実施。</li> </ul> <p>史料調査</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文書悉皆調査</li> </ul> <p>市役所・旧町村役場資料調査、自治会蔵資料調査、個人資料調査、寺社資料調査、諸機関蔵資料調査等を実施、目録を作成した。</p> <p>民俗調査</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地区ごとに話者を選定して聞き取り調査を実施。</li> </ul>		
刊行物	<p>「瀬戸市史 陶磁史篇 1」、「瀬戸市史 陶磁史篇 2」、「瀬戸市史 陶磁史篇 3」、「瀬戸市史 陶磁史篇 4」、「瀬戸市史 陶磁史篇 5」、「瀬戸市史 陶磁史篇 6」、「瀬戸市史 資料編 1 村絵図」、「瀬戸市史 資料編 2 自然」、「瀬戸市史 資料編 3 原始・古代・中世」、「瀬戸市史 資料編 4 近世」、「瀬戸市史 資料編 5 近現代 1」、「瀬戸市史 資料編 6 近現代 2」、「瀬戸市史 通史編上」、「瀬戸市史 通史編下」、「瀬戸市史 民俗編」</p> <p>「瀬戸市近世文書集第 1 集」、「瀬戸市近世文書集第 2 集」、「瀬戸市近世文書集第 3 集」、「瀬戸市近世文書集第 4 集」、「瀬戸市近世文書集第 5 集」、「瀬戸市近世文書集第 6 集」、「瀬戸市民俗調査報告書 品野」、「瀬戸市民俗調査報告書 水野・掛川」、「瀬戸市民俗調査報告書 瀬戸・赤津」、「瀬戸市民俗調査報告書 幡山・今村」</p> <p>「瀬戸市の古窯 第 1 集」、「瀬戸市の古窯 第 2 集」、「赤津長根第 1・2 号窯発掘調査概要」、「穴田 1・2 号窯発掘調査概要」</p> <p>「近世の瀬戸ーここで作り、ここで暮らしたー」</p>		
現状と課題	市史・文書集に未収録の文書については、目録のみを作成したのものがあ、近代史料を中心に未調査のものがある。個人所有の史料については調査後の確認は行われておらず、保存状況が未確認の史料がある。		

## ■瀬戸市文化財保護審議会文化財調査

調査主体	瀬戸市文化財保護審議会	調査期間	昭和 49 年～
調査の目的	瀬戸市文化財保護条例に基づき、文化財の保存及び活用に関し、教育委員会の諮問に答え、又は教育委員会に意見を具申し、また、このために必要な調査研究を行う。		
概要	<p>文化財調査</p> <p>所有者もしくは市からの申請に基づき、教育委員会から諮問された案件について調査を行い、文化財とする理由の真実性や適切性を検討する。実地調査として所有者・保持者からの聞き取りを行い、文化財としての保存状況、永続性を確認する。調査に基づき答申書を作成し教育委員会に提出する。</p> <p>これまでに、有形文化財として建造物 10 件、絵画 1 件、彫刻 2 件、工芸品 9 件、典籍 2 件、歴史資料 6 件、古文書 4 件、無形文化財として陶芸ほか 13 件、有形民俗文化財 2 件、無形民俗文化財 1 件、史跡 3 件、名勝 2 件、天然記念物 2 件の調査を実施している。</p>		
刊行物	「瀬戸市の文化財」		
現状と課題	調査資料は永年文書として保管。		

## ■石造物調査 (59 ページを参照)

調査主体	瀬戸市教育委員会	調査期間	昭和 53 年度～昭和 56 年度
調査の目的	瀬戸市内の石造物を収集し、「広報せと」に「郷土の文化財石造物」として紹介する。		
概要	瀬戸市内の石造物(石材を加工した、像、碑、道具等)の所在を確認し、写真撮影を行う。		
刊行物	「瀬戸の石造物」		
現状と課題	写真については歴史民俗資料館に保管。その後詳細な確認調査は行われていない。		

■窯業民俗調査

調査主体	愛知県教育委員会	調査期間	昭和48年度・昭和61年度
調査の目的	瀬戸市と常滑市における有形民俗資料の収集・記録、無形民俗資料の収集・記録		
概要	資料実地調査 ・陶磁器生産に関わる民俗資料について、本業焼の伝統を色濃く残す洞地区を重点とし、赤津・品野地区に残される資料の実地調査。		
刊行物	「窯業民俗資料調査報告書1 瀬戸市」、「国指定重要民俗文化財 瀬戸の陶磁器の生産用具及び製品 資料目録」		
現状と課題	民具は歴史民俗資料館(瀬戸蔵ミュージアム)に保管。		

■愛知県民俗資料緊急調査

調査主体	愛知県教育委員会	調査期間	昭和38年
調査の目的	愛知県内の民俗資料を調査し、現状を把握する。		
概要	「30箇所調査」 瀬戸市内では、沓掛地区で聞き取り調査が行われている。		
刊行物	「愛知の民俗」		
現状と課題	調査データは愛知県が保管。		

■愛知県民俗文化財緊急分布調査

調査主体	愛知県教育委員会	調査期間	昭和52～昭和53年
調査の目的	愛知県内の民俗資料を調査し、現状を把握する。		
概要	「150箇所調査」 瀬戸市内では、三沢町、中水野町、赤津町、上半田川町で調査が行われている。		
刊行物	「愛知県民俗地図」		
現状と課題	調査データは愛知県が保管。		

■愛知県史民俗調査

調査主体	愛知県史編纂委員会民俗部会	調査期間	平成12年
調査の目的	愛知県史・民俗編の構成・執筆に向けて、愛知の民俗の特徴を理解するため県内を6地区に区分して調査を行う。		
概要	瀬戸地区の調査 平成12年		
刊行物	『愛知県史 別編 民俗1 総説』CD-ROM「愛知県民俗調査資料集成」に掲載。		
現状と課題	民具は、地区集会所、個人、町内会役員持回り、地域の祠等で保管。調査資料は瀬戸市埋蔵文化財センターで保管。調査後の保管体制を検討する必要がある。		

■民俗調査(献馬行事)

調査主体	瀬戸市	調査期間	平成27年度～
調査の目的	瀬戸市の文化遺産を活かした地域活性化事業に伴い、市内の各地域に残る民俗資料を記録し、民俗資料の価値を明らかにすることにより伝統文化を後世に伝える。		
概要	馬道具の調査 ・山口地区・菱野地区・本地地区の各施設で保管される、警固祭り、馬の塔祭りに関連する馬道具類の現状把握(幔幕の製造年や大きさなどの調査など)。 古文書の解読 ・菱野郷倉文書について、原本のコピーから文字を判読してデジタル化(ワード入力)。		
刊行物	平成30年度事業完了時に報告書作成予定。		
現状と課題	民具は、地区集会所、個人、町内会役員持回り、地域の祠等で保管。調査資料は瀬戸市埋蔵文化財センターで保管。調査後の保管体制を検討する必要がある。		

## ■愛知県遺跡分布調査

調査主体	愛知県教育委員会	調査期間	昭和 42～45 年度・昭和 55 年度・昭和 58 年度・昭和 59 年度
調査の目的	愛知県の重要な産業の一つである陶磁器生産の歴史の根源である猿投窯について、古窯跡の分布状況や保存状況を把握することにより、大切な文化遺産を後世に伝える。		
概要	現地踏査 ・県内の埋蔵文化財及び国・県・市指定史跡、名勝・天然記念物の位置、範囲、現状を把握するため現地踏査・確認。		
刊行物	「愛知県遺跡分布図」、「愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(Ⅱ)」、「愛知県古窯跡分布調査報告(Ⅳ)瀬戸・藤岡(瀬戸古窯跡群)」、「愛知県遺跡地図(Ⅰ)尾張地区」		
現状と課題	調査後の状況については、市内遺跡分布調査で確認。瀬戸市調査分の調査カード・採集遺物は瀬戸市埋蔵文化財センターで保管。		

## ■遺跡分布調査・市内遺跡調査 (44-46 ページを参照)

調査主体	瀬戸市	調査期間	平成 4 年度～
調査の目的	開発行為に伴う事前協議資料としての詳細遺跡分布図の作成。 市内における重要窯跡の内容把握(学術調査)及び個人住宅・民間小規模開発に伴う範囲確認調査等。		
概要	遺跡分布調査(平成 4 年度～平成 8 年度) ・丘陵地における窯跡・古墳と沖積地(水田・畑)における遺物の散布状況による消費地遺跡を踏査。必要に応じて試掘調査を実施。 瀬戸市内重要遺跡試掘調査(平成 11 年度～平成 18 年度) ・椿窯跡や昔田窯跡、笠松東窯跡、鳥屋口北窯跡、サカイ窯跡など、瀬戸窯における重要窯跡について、将来的な史跡指定や保存方法の検討を行うため、窯跡全体の範囲や遺構の遺存状況などの確認を目的とした調査を実施。 個人住宅・民間小規模開発に伴う範囲確認調査等(平成 9 年度～) ・内田町遺跡や品野西遺跡、五葉窯跡、石田遺跡、今村城跡など、個人住宅建設や開発に伴う事前の確認調査、防災工事に伴う緊急発掘調査を実施。		
刊行物	「瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告」、「市内遺跡調査報告Ⅰ」、「市内遺跡調査報告Ⅱ 瓶子窯跡」、「市内遺跡調査報告Ⅲ 川合 K 窯跡」、「市内遺跡調査報告Ⅳ 五葉窯跡」、「市内遺跡調査報告Ⅴ 仙左衛門窯跡 七郎左窯跡」、「市内遺跡調査報告Ⅵ 品野中部遺跡 穴田古窯跡群 石田遺跡」、「市内遺跡調査報告Ⅶ 若宮遺跡(若宮町 3-84 地点)」、「市内遺跡調査報告Ⅷ 今村城」		
現状と課題	開発等による滅失や埋蔵文化財有無照会に伴う新規発見については遺跡地図に常時反映している。調査資料やデータは瀬戸市埋蔵文化財センターで保管。		

## ■愛知県中世城館跡分布調査(尾張地区)

調査主体	愛知県教育委員会	調査期間	昭和 63 年度～平成 2 年度
調査の目的	愛知県内の中世城館跡の現状を正確に把握し、それらの保存・活用の方策を探っていくための詳細な分布調査を実施した。		
概要	文献等で伝承された城館跡について、所在の確認できるものについては現地踏査をし、縄張り図を作成。所在の確認できないものについては字名等から推定を行った。また、地籍図・絵図等から所在が推定できるものについては、文献と合わせて推定地を示している。 瀬戸市内については、22 か所の城館跡の調査を行っている。		
刊行物	「中世城館跡分布調査(尾張地区)報告書」		
現状と課題	遺構が残る城館跡については、市内遺跡発掘調査の試掘調査で確認している。調査データは愛知県が保管。		

■瀬戸焼データベース

調査主体	公益財団法人瀬戸市文化振興財団	調査期間	平成9年度～
調査の目的	全国で出土する瀬戸焼の情報を収集・分析するといった基礎作業を行い、それにより得た情報を広く研究者及び一般市民に公開し、さらには中世から近代に至るまでの瀬戸焼の流通システムを解明する。		
概要	<p>報告書調査</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全国から送付される遺跡の発掘調査報告書等の中で、中世から近代に生産された瀬戸焼に関する情報が収録されているものについて、具体的な器種と帰属時期を「瀬戸焼カード」に記入。</li> </ul> <p>データ入力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「瀬戸焼カード」に記載された瀬戸焼の情報をコンピュータソフト「瀬戸焼データベース」に入力。</li> <li>・現在 3,573 件の瀬戸焼の情報が入力済。</li> </ul>		
刊行物	<p>「(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第12輯 別冊 中世瀬戸焼全国出土遺跡地名表1-近畿編-」、「瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第13輯 別冊 中世瀬戸焼全国出土遺跡地名表2-中国・四国・九州編-」、「瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第14輯 別冊 中世瀬戸焼全国出土遺跡地名表3-北海道・東北・北関東編-」、「瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第15輯 別冊 中世瀬戸焼全国出土遺跡地名表4-南関東編-」、「瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第16輯 別冊 中世瀬戸焼全国出土遺跡地名表5-北陸・信越編-」、「財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター研究紀要 第17輯 中世瀬戸焼全国出土遺跡地名表6-東海篇-」</p>		
現状と課題	データベース入力を継続中。未公開部分について公開する必要がある。		

■愛知県近代化遺産(建築物等)総合調査 (54・56ページを参照)

調査主体	愛知県教育委員会	調査期間	平成14年度～平成16年度
調査の目的	産業立県として歴史的遺産を後世に伝えていくための基礎資料を収集・整備し、本県における近代化遺産の現状を把握するとともに今後の文化財保護施策の推進の一助とする。		
概要	第1次調査は市町村が担当。第2次調査以降の建築と土木は、主として大学の研究者と民間の専門家が調査。瀬戸の窯業施設をはじめ、第3次調査物件となった愛知県を代表する約200件の近代化遺産の事例を紹介。		
刊行物	「愛知県の近代化遺産」		

■愛知県近代和風建築調査 (55・56ページを参照)

調査主体	愛知県教育委員会	調査期間	平成17年度・平成18年度
調査の目的	明治期以降に伝統的な技法や様式、意匠を用いて建てられた近代和風建築について、その歴史的遺産を後世に伝えるため、保存状況を把握し、今後の保護・活用のための基礎資料を収集・整備することで、文化財保護施策の推進の一助とする。		
概要	瀬戸市の瀬戸永泉教会礼拝堂や旧久米邸をはじめ、愛知県内の近代和風建築154件について、所在地や所有者、住宅・公共施設・商業施設・宗教施設といった分類、木造・レンガ造りなどの構造、屋根形式、屋根素材、建築年代、改修年代などを調査・整理。		
刊行物	「愛知県の近代和風建築」		
現状と課題	2・3次調査物件中2件10棟が登録文化財となった。1・2次調査の物件については滅失しているものもみられるが、未調査物件が数多くあり、近代建築物としてより広く調査を進めていく必要がある。		

## ■ 窯垣調査 (54 ページを参照)

調査主体	瀬戸市	調査期間	平成 21 年度～
調査の目的	瀬戸市域の中でも中心市街地付近や洞地区において、歴史的景観を特徴づける窯垣の分布状況・特性の把握を行い、特色ある町並み景観の保全と活用を検討する。		
概要	窯垣の分布 ・ 中心市街地及び洞地区における窯垣の分布調査を実施。 窯垣の分類 ・ 窯垣を構成する窯道具(「エンゴロ」・「タナイタ」・「ツク」)や築窯材(「ハコグレ」)の積み上げ方法について調査の調査を実施。 保存状況 ・ 窯垣の欠損状況などの保存状況の調査を実施。		
刊行物	「『窯垣』の研究 1—その成立の分布について(洞地区)—」『公益財団法人瀬戸市文化振興財団研究紀要 第 18 輯』		
現状と課題	旧瀬戸町域の窯垣の把握を行った。形式の年代比較等を行い、保存すべき窯垣を検討する必要がある。		

## ■ 愛知県近世社寺建築緊急調査 (48-51 ページを参照)

調査主体	愛知県教育委員会	調査期間	昭和 54 年度
調査の目的	近世の社寺建築については、遺構の数がきわめて多いため、その実態がほとんど把握されていないが、建立後かなりの年数を経過し、大修理を要する時期に達しており、それを機に消滅することが憂慮されている。早急に総括的な調査により実態を把握し、さらに重要な遺構については綿密な調査を行い、保存の基礎資料を収集する必要がある、その一段階として調査を実施。		
概要	一次調査の結果から 1,602 棟(990 社寺)が出され、選定の結果、重要な遺構として 862 棟(482 社寺)を決め、二次調査を実施し、調査票・図面・写真等を作成。		
刊行物	「愛知県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査報告書—」		
現状と課題	二次調査対象となった西光寺本堂は RC 造で建替えられた。		

## ■ 歴史的建造物調査

調査主体	瀬戸市文化遺産活用実行委員会	調査期間	平成 24 年度・平成 27 年度
調査の目的	瀬戸市中央部(旧瀬戸村・瀬戸町域)における窯業関連の歴史的建造物の実態を概観する。		
概要	洞地区窯業関連(生産)施設調査(平成 24 年) ・ 「王子窯モロ」、「加藤仲右衛門家」、「加藤仲右衛門家新屋」、「安立国守氏モロ」について調査を実施。 ・ 中心市街地窯業関連(流通)施設調査(平成 27 年)。 ・ 「旧山丈商店倉庫」、「山繁商店離れ」について建造物調査を実施。		
刊行物	「瀬戸市歴史的建造物実測調査報告書—旧瀬戸村・瀬戸町域における窯業関連施設—」		
現状と課題	洞地区及び中心市街地における特徴的な建築物を数か所把握できた。市内全域における状況を把握するため、さらに調査を進める必要がある。		

## ■ 建築装飾(タイル・陶壁)調査

調査主体	建築装飾としてのタイル・陶壁が生きる街を記録と記憶に残すプロジェクト実行委員会	調査期間	平成 26 年度・平成 27 年度
調査の目的	これまで共働することが少なかったやきもの分野と建築分野の専門機関、専門家の連携を進め、さらに地域住民・関係機関の協力を得てアーカイブの確立と情報発信・共有を図り、それを主として独自の文化の検証と継承に努めることである。		
概要	アーカイブ構築事業として、建築事例調査と制作現場調査、陶壁調査とそれに伴う関連資料調査を行い、関連資料についてはデジタル化を行い、そのいずれもの成果をアーカイブ化した。瀬戸市関連では、建築事例調査として「愛知県陶磁器工業協同組合」、陶器事例として「プリズム—窯垣」がとりあげられた。		
刊行物	「建築装飾としてのタイル・陶壁が生きる街を記録と記憶に残すプロジェクト事業報告書」		
現状と課題	調査物件はいずれも法人所有で現存。調査データは実行委員会が保管。		

■名木調査

調査主体	瀬戸市教育委員会	調査期間	平成5年度～平成8年度
調査の目的	瀬戸市内における名木及び社寺林を調査し、文化財指定や保存樹制度など将来的な保護対象とする。		
概要	瀬戸市内の名木・社寺林100件について、所在地・樹高・根周り・幹周り・枝張りなどについて調査を実施し、各々の特徴について記録。		
刊行物	「瀬戸の名木」		
現状と課題	一般に見ることができる名木については、銘板を設置。平成26年度に瀬戸市名木調査会が追跡調査を行い、平成8年度現在確認されていた100件の名木・社寺林のうち82件現存、16件の滅失が確認されている。調査データは瀬戸市埋蔵文化財センターで保管。		

■オオサンショウウオ調査

調査主体	瀬戸市	調査期間	平成18年度～平成20年度
調査の目的	蛇ヶ洞川に生息するオオサンショウウオの生息個体数・生息範囲の把握と生息状況と河川環境の関係把握及び将来的なオオサンショウウオの繁殖・生息のために必要な河川環境について検討するための基礎資料作成。		
概要	<p>個体確認調査</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・連続する3日を1単位とした夜間調査の実施→河川内を踏査し、オオサンショウウオを確認・捕獲し、体各部測定、マイクロチップ読み取りによる個体識別(新規発見の場合埋め込み)、個体写真撮影、捕獲地点の計測(捕獲位置・川幅・水深など)。</li> </ul> <p>繁殖環境調査</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・産卵及び幼生確認調査、産卵巣穴調査の実施。</li> </ul> <p>魚類調査</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個体確認調査でオオサンショウウオが多く確認された地点と確認されていない地点との河川環境の差を把握するため実施。</li> </ul> <p>※平成12年度～平成20年に、東山動物園が計42回の調査を実施。</p>		
刊行物	「特別天然記念物オオサンショウウオ生息分布調査報告」		
現状と課題	毎年7月～10月の産卵時期に生息調査を実施。新規発見個体は台帳に登録している。調査データについては瀬戸市埋葬文化財センターで保管。		

## (2) 文化財の指定等

## ア 指定・登録文化財の状況

市域には、国指定重要文化財が14件、国登録文化財が3件(11棟)、愛知県指定重要文化財が10件(無形文化財を含む)、瀬戸市指定文化財52件(無形文化財を含む)あります。時代としては、古代の灰釉陶器窯跡である「広久手第30号窯跡(史跡)」から近代の国登録文化財の「瀬戸永泉教会礼拝堂」「旧山繁商店」など各時代のものがあります。

また、国の特別天然記念物として指定されているオオサンショウウオ、ニホンカモシカの生息が確認されています。

## ■瀬戸市に所在する指定・登録文化財の数

文化財区分	建造物	絵画	彫刻	工芸品	典籍	古文書	考古資料	歴史資料	無形	有形民俗文化財	無形民俗文化財	史跡	名勝	天然記念物	合計
国指定	2			6						1		3		2	14
国登録	3														3
県指定			2	5			1		1	1					10
市指定	10	1	2	9	2	4		6	7	2	2	3	2	2	52
合計	15	1	4	20	2	4	1	6	8	4	2	6	2	4	79

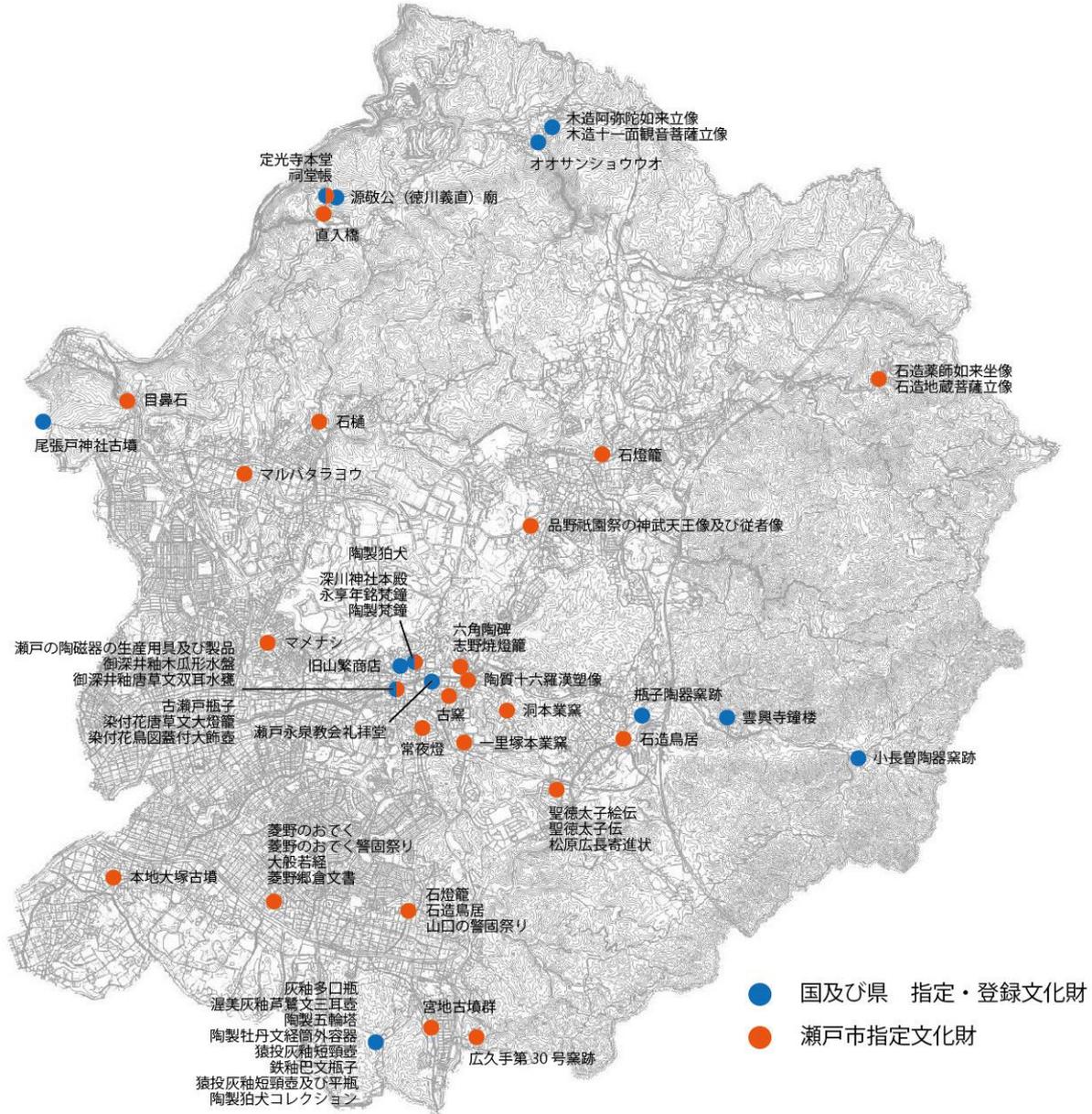
※平成29年2月1日現在

## ■国及び県 指定・登録文化財一覧

種別	指定名称	員数	時代	指定年月日	
国指定	建造物	定光寺本堂	1棟	室町後期	大正15年4月19日
国指定	建造物	源敬公(徳川義直)廟・焼香殿他	7棟	江戸前期	昭和12年8月25日
国指定	工芸品	陶製狛犬	1軀	鎌倉	大正元年9月3日
国指定	工芸品	太刀 銘助重	1口	鎌倉中期	大正8年4月12日
国指定	工芸品	太刀 銘守家	1口	鎌倉中期	大正8年4月12日
国指定	工芸品	灰釉多口瓶	1口	平安前期	昭和50年6月12日
国指定	工芸品	渥美灰釉芦鷺文三耳壺	1口	平安末期	昭和51年6月5日
国指定	工芸品	陶製五輪塔	1基	平安末期	平成7年6月15日
国指定	有形民俗	瀬戸の陶磁器の生産用具及び製品	3,943点	江戸以降	昭和49年2月18日
国指定	史跡	瀬戸窯跡(小長曾陶器窯跡)	2,496㎡	室町中期	昭和46年7月13日
国指定	史跡	瀬戸窯跡(瓶子陶器窯跡)	4,519.72㎡	江戸前期	平成27年10月7日
国指定	史跡	志段味古墳群(尾張戸神社古墳)	270.34㎡(瀬戸市域分)	古墳時代	平成26年10月6日
国指定	特別天然記念物	オオサンショウウオ	種指定		昭和27年3月29日
国指定	特別天然記念物	カモシカ(ニホンカモシカ)	種指定		昭和30年2月15日
国登録	建造物	雲興寺鐘楼	1棟	江戸中期	平成17年12月26日
国登録	建造物	瀬戸永泉教会礼拝堂	1棟	明治	平成22年4月28日
国登録	建造物	旧山繁商店・離れ他	9棟	明治～昭和	平成27年11月17日
県指定	彫刻	木造阿弥陀如来立像	1軀	平安末期	昭和34年1月16日
県指定	彫刻	木造十一面観音菩薩立像	1軀	平安末期	昭和34年1月16日
県指定	工芸品	御深井釉木瓜形水盤	1口	江戸前期	昭和57年3月31日
県指定	工芸品	陶製牡丹文経筒外容器	1口	平安末期	昭和59年2月27日
県指定	工芸品	猿投灰釉短頸壺	1口	平安中期	昭和59年2月27日
県指定	工芸品	鉄釉巴文瓶子	1口	鎌倉末期	昭和59年2月27日
県指定	工芸品	御深井釉唐草文双耳水甕	1口	江戸中期	平成4年2月28日
県指定	考古資料	猿投灰釉短頸壺及び平瓶	各1口	平安前期	昭和59年2月27日
県指定	無形	陶芸 織部・黄瀬戸	1件	現代	平成16年8月20日
県指定	有形民俗	陶製狛犬コレクション	210軀	室町・大正	昭和59年3月30日

■瀬戸市指定文化財一覧

種別	指定名称	員数	時代	指定年月日	
市指定	建造物	一里塚本業窯	1基	昭和	昭和50年7月21日
市指定	建造物	直入橋	1橋	江戸前期	昭和58年6月1日
市指定	建造物	石燈籠	1基	江戸前期	平成4年2月21日
市指定	建造物	石燈籠	1基	江戸前期	平成5年2月19日
市指定	建造物	石造鳥居	1基	江戸前期	平成5年2月19日
市指定	建造物	洞本業窯	1基	昭和	平成7年2月13日
市指定	建造物	石造鳥居	1基	江戸中期	平成8年2月9日
市指定	建造物	古窯	1基	昭和	平成9年2月14日
市指定	建造物	深川神社本殿	1棟	江戸後期	平成11年11月12日
市指定	建造物	常夜燈	1基	江戸後期	平成13年2月7日
市指定	絵画	聖徳太子絵伝	4幅	室町中期	平成18年2月10日
市指定	彫刻	石造薬師如来坐像	1躯	江戸中期	昭和60年5月1日
市指定	彫刻	石造地藏菩薩立像	1躯	江戸中期	昭和60年5月1日
市指定	工芸品	六角陶碑	1基	江戸末期	昭和49年4月1日
市指定	工芸品	永享年銘梵鐘	1口	室町中期	昭和57年3月1日
市指定	工芸品	陶質十六羅漢塑像	16躯	江戸末期	昭和57年3月1日
市指定	工芸品	志野焼燈籠	1対	明治	平成5年2月19日
市指定	工芸品	織部燈籠	1基	江戸後期	平成8年2月9日
市指定	工芸品	染付花唐草文大燈籠	1基	明治	平成9年2月14日
市指定	工芸品	染付花鳥図蓋付大飾壺	1口	明治	平成10年11月20日
市指定	工芸品	古瀬戸瓶子	1対	鎌倉	平成17年2月10日
市指定	工芸品	古瀬戸瓶子	1対	鎌倉	平成25年3月18日
市指定	典籍	聖徳太子伝	5冊	室町中期	平成18年2月10日
市指定	典籍	大般若経	155巻	鎌倉・室町	平成20年9月12日
市指定	古文書	加藤唐三郎家文書	481点	江戸	平成6年2月18日
市指定	古文書	加藤新右衛門家文書	140点	江戸	平成6年2月18日
市指定	古文書	松本茂助家文書	711点	江戸	平成13年2月7日
市指定	歴史資料	織田信長の制札	1通	室町末期	昭和53年11月1日
市指定	歴史資料	窯屋証文	1通	江戸初期	平成9年2月14日
市指定	歴史資料	陶製梵鐘	1口	昭和	平成9年2月14日
市指定	歴史資料	祠堂帳	1巻	室町	平成11年11月12日
市指定	歴史資料	笠原村・両半田川村国境争論絵図	1枚	江戸前期	平成16年2月6日
市指定	歴史資料	松原広長寄進状	1点	室町中期	平成18年2月10日
市指定	古文書	菱野郷倉文書	7,780点	江戸～現代	平成20年9月12日
市指定	無形	陶芸 黄瀬戸	1件	現代	平成18年2月10日
市指定	無形	陶芸 織部	1件	現代	平成18年2月10日
市指定	無形	陶芸 灰釉	1件	現代	平成19年5月18日
市指定	無形	陶芸 色絵磁器	1件	現代	平成19年5月18日
市指定	無形	陶芸 御深井	1件	現代	平成20年5月9日
市指定	無形	有線七宝	1件	現代	平成22年6月18日
市指定	無形	陶芸 練り込み	1件	現代	平成22年6月18日
市指定	有形民俗	菱野のおてく	1体	江戸～大正	平成17年2月10日
市指定	有形民俗	品野祇園祭の神武天皇像および従者像	3体	昭和	平成25年3月18日
市指定	無形民俗	山口の警固祭り	1件	江戸～現代	平成15年2月7日
市指定	無形民俗	菱野のおてく警固祭り	1件	江戸～現代	平成20年9月12日
市指定	史跡	本地大塚古墳	1基	古墳時代	昭和51年5月1日
市指定	史跡	宮地古墳群	1,542平米	古墳時代	平成5年2月19日
市指定	史跡	広久手第30号窯跡	15.7平米	平安中期	平成18年9月27日
市指定	名勝	石樋	約750平米	江戸	平成4年2月21日
市指定	名勝	目鼻石	約530平米	江戸	平成7年2月13日
市指定	天然記念物	マルバタラヨウ	1本	現代	平成9年11月18日
市指定	天然記念物	マメナシ	1本	現代	平成16年2月6日



- 国及び県 指定・登録文化財
- 瀬戸市指定文化財

指定・登録文化財位置図



一里塚本業窯



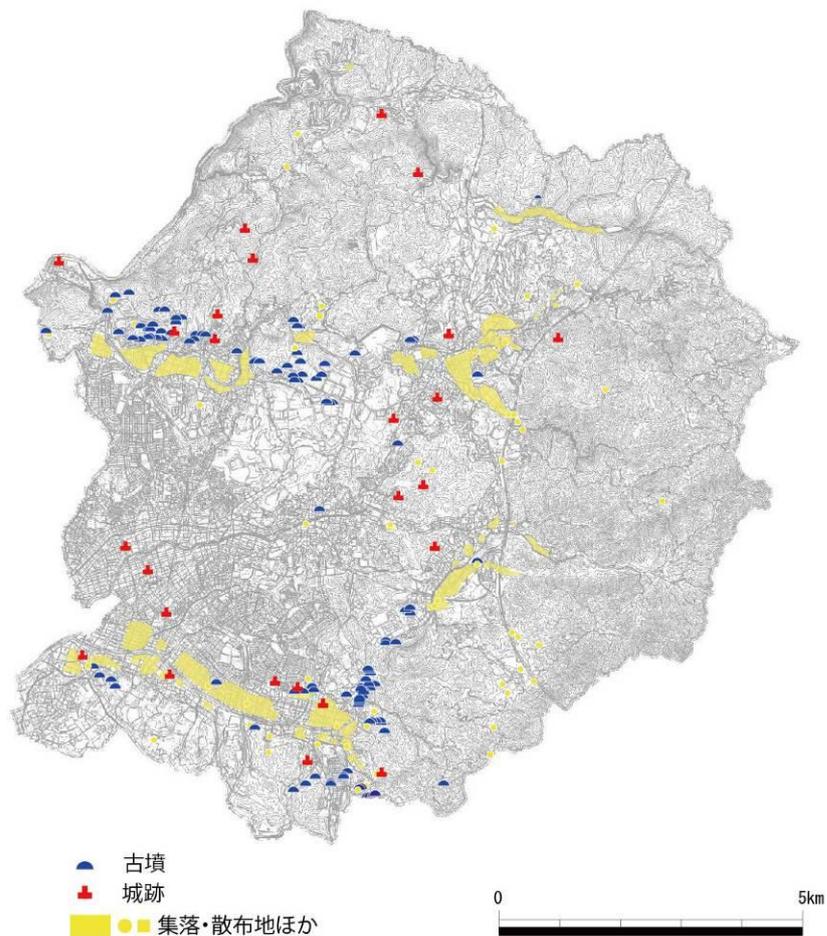
木造十一面観音菩薩立像

### イ 埋蔵文化財

瀬戸市では平成4年から平成9年にかけて実施された市内の詳細分布調査以降、1,077ヶ所で埋蔵文化財が確認されています。集落などの消費地遺跡は、赤津盆地や品野盆地のほか、水野川や矢田川流域に形成された沖積地に広く展開するのが特徴的で、その集落を見下ろすように、古墳が周辺の丘陵地に構築されています。

埋蔵文化財の大半を占める古代から近世の窯跡は、813ヶ所を数え、時期ごとに生産の中心が変わっていたことが明らかにされています。まず、瀬戸窯成立の黎明期を支えた灰釉陶器や、それに続く初期山茶碗と呼ばれる無釉の雑器を生産した窯は、市域南部の幡山地区と西部の水野地区で見られます。その後、古瀬戸生産が幡山地区で開始されると、13世紀代には瀬戸地区東部の馬ヶ城を中心に、赤津地区を除く市域全体に窯が構築されていき、13世紀後期以降15世紀にかけて、特に古瀬戸を生産した窯は赤津地区を中心に分布するようになります。戦国期を迎える15世紀後期になると、それまで丘陵地に造られた窯は、集落周辺の低位丘陵に築かれるようになり、その後近代まで続くことになります。これらの窯跡はこれまで100基以上の発掘調査によって、各時代の生産現場の様相が明らかにされています。

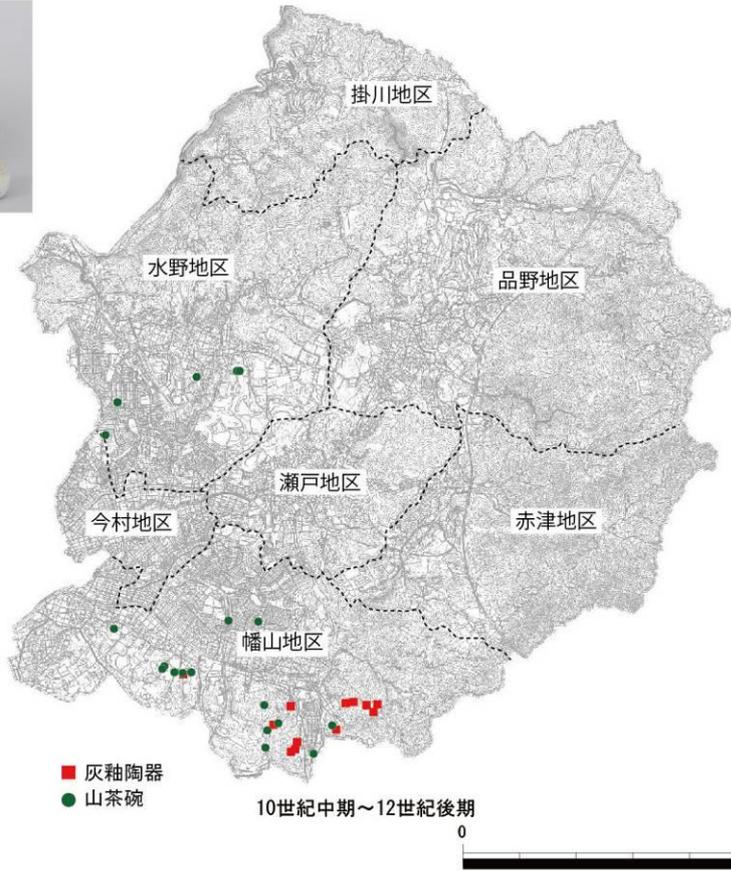
埋蔵文化財位置図(古墳・城跡・集落ほか)



埋蔵文化財位置図(窯跡の変遷 1)



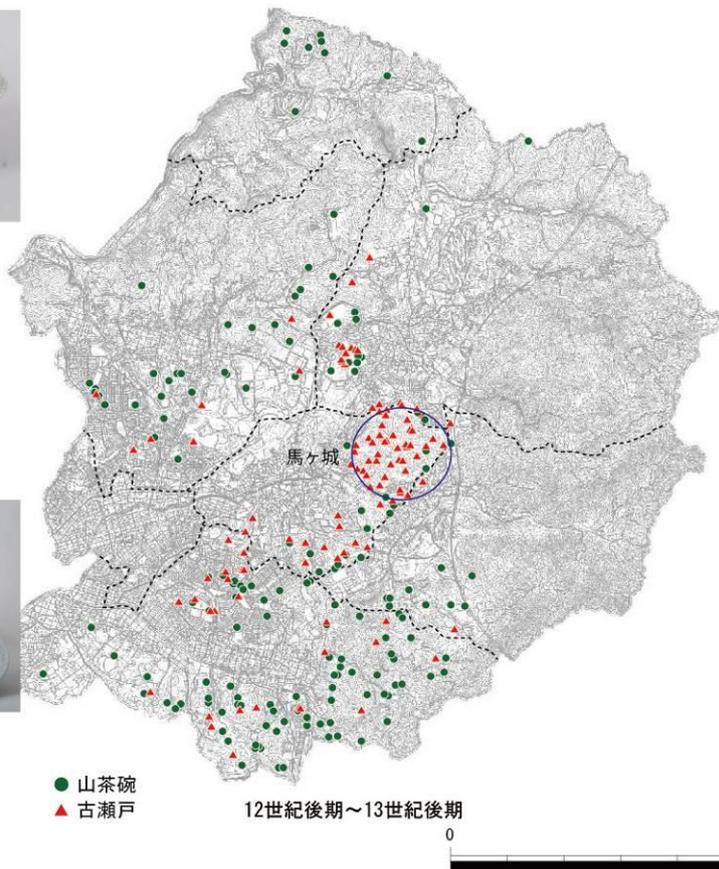
灰釉陶器



10世紀中期から11世紀後期にかけて、瀬戸市域では灰釉陶器が生産されました。この時期、窯は市域南部の幡山地区のみでみられ、その後生産される無釉の山茶碗は、幡山地区を中心に水野地区でも数か所みられます。



山茶碗



12世紀末に生産が開始された「古瀬戸」も、灰釉陶器と同様幡山地区で誕生します。その後、13世紀代に入ると、古瀬戸生産は赤津地区を除く市域全体に広がり、13世紀後期には瀬戸地区東部の馬ヶ城で集中的に生産されました。一方、山茶碗を生産した窯は、幡山地区と水野地区を中心に分布し、窯数がピークに達する13世紀中期以降、古瀬戸窯を取り囲むように広がります。

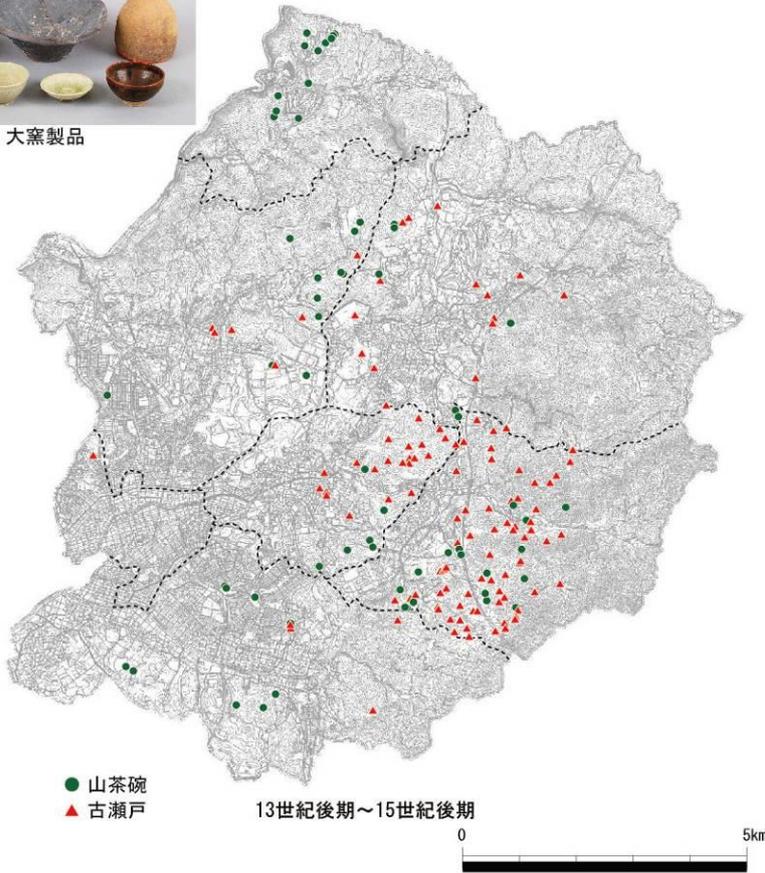


古瀬戸

埋蔵文化財位置図(窯跡の変遷 2)



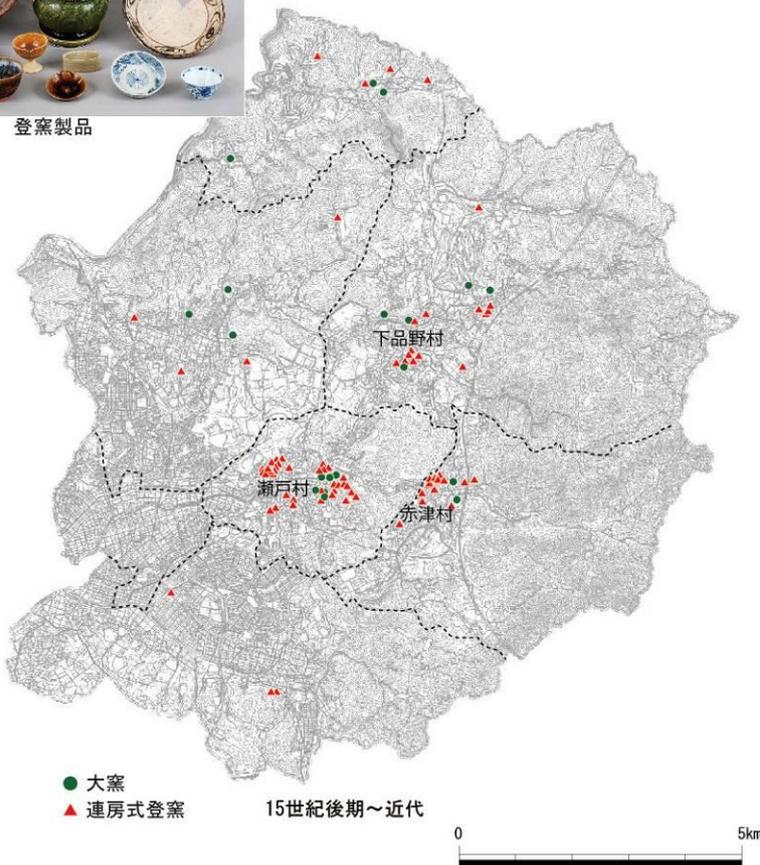
大窯製品



古瀬戸窯は、馬ヶ城に集中した前段階から市域東部の赤津地区へと分布の中心が移り、15世紀以降はさらに東部の標高の高い丘陵地に集中する傾向があります。山茶碗窯は13世紀後期以降徐々に減少しますが、14世紀中期には赤津地区から瀬戸地区東部、水野地区と品野地区の境でまとまりが見られます。瀬戸市域での山茶碗生産は15世紀代まで続きました。



登窯製品



15世紀後期から採用された大窯は、これまでの古瀬戸窯の分布とは異なり、集落周辺の低位丘陵に造られるようになるのが特徴です。この分布傾向は17世紀以降の連房式登窯でも変わらず、特に瀬戸村、赤津村、下品野村集落周辺で多くの窯が築かれました。

## ウ 古文書類

古文書類は、165 群、57,242 点が市史調査で確認されており、一部は瀬戸市に寄託されています。市指定となっている歴史資料・古文書は 10 点あり、織田信長の制札のぶながや窯屋証文せいさつなど窯業史的に重要なものも含まれます。また未指定ながら、市内の窯屋に伝わる文書類は、近世から近代に至る膨大なものがあり、史料の中には未整理のものも多く含まれています。

## ■文書(資料群)一覧

大分類	資料群名
旧町村役場資料	瀬戸市役所所蔵資料、幡山支所所蔵資料、水野支所資料、品野支所資料、東明小学校所蔵資料
自治会所蔵資料	今村郷倉文書、本地郷倉文書、菱野郷倉文書、片草自治会所蔵資料、白岩町自治会所蔵資料 上半田川自治会所蔵資料、下半田川自治会所蔵資料、定光寺町自治会所蔵資料 美濃之池区有資料、春日井郡上水野村資料、海上弘法堂資料、品野町四丁目自治会所蔵資料
組合資料	赤津焼会館文書、愛知県陶磁器工業協同組合所蔵資料 岐阜県陶磁器工業協同組合連合会所蔵資料
社寺資料	定光寺資料、雲興寺資料、万徳寺資料、感応寺資料、浄源寺資料、東福寺旧蔵大般若経 深川神社資料、本地八幡社資料、菱野熊野社所蔵棟札、山口八幡社所蔵棟札、菩提寺資料 大目神社所蔵棟札、市内寺社所蔵棟札
個人資料	伊藤哲夫家資料、高島富郎家資料、河村新三郎家資料、伊藤良晴家資料、桜井正吾家資料 白岩村資料、横山正子家資料、岡本熊次寄贈写真、加藤喜三家資料、永田春雄家資料 新葉園文書、安藤政二郎氏寄贈資料、加藤弘三家資料、山田医療器製陶所資料 赤塚幹也関係資料、比良秀夫家資料、岡本健一家資料、加藤やゑ家資料、寺田兼之丞家資料 柴田昇昭家資料、湯之根薫文書、加藤紋右衛門家資料、日比野正明寄贈資料 堀谷幸敏寄贈資料、伊里写真館寄贈アルバム、伊藤伊平家資料、柴田晃尾家所蔵資料 小島茂子寄贈資料、加藤藤雄関係資料、水野賢治家資料、麻屋吉田家資料 春日井郡水野村加藤家文書、水野家文書、加藤新右衛門家文書、加藤唐三郎家文書 松本茂助家文書、加藤流慈家資料、応夢亭文書、太田鉄男家文書、柿野村林家文書 加藤糸美家文書、加藤円六家文書、加藤数右衛門家文書、加藤一満家文書、加藤鎌之助家文書 加藤儀兵衛家文書、加藤三右衛門家文書、加藤春二家文書、加藤伸也家文書 加藤仙左衛門家文書、加藤唐九郎家文書、加藤増夫家文書、加藤祐右衛門家文書、沓掛文書 柴田善右衛門家文書、下方康史家資料、長江満家文書、中尾勲家文書、中島康宏家資料 山口幸一家文書、山田甲家資料、市橋昇家資料、松本成行家資料、柴田家資料、開発芳男家資料 小島繁徳家資料、伊藤貴美枝家資料、深見多満夫家資料、鈴木弘一家資料、加藤征子家資料 鈴木真人家資料、永田全平家資料、加藤明頭家資料、鈴木敏明家資料、菊田家文書 青山さぬ江家資料、相良知子家資料、長江惣吉家資料、加藤庄平家資料、富田正夫家資料 加藤治右衛門家資料、加藤徹家資料、山田泰司家資料、柴田喜美子家資料、林春治家資料 加藤中哉家資料、鈴木保親家資料、加藤連三郎家資料、加藤正左衛門家文書、相原邦雄家資料 戸田修二氏所蔵文書
諸機関所蔵資料	瀬戸窯業高等学校所蔵資料、瀬戸高等学校所蔵資料、陶生病院所蔵資料 名古屋大学経済学図書室収集資料、愛知県図書館所蔵資料 愛知県公文書館所蔵資料(愛知県庁文書)、治山文庫所蔵資料 産業技術総合研究所中部センター瀬戸サイト所蔵資料、名古屋市鶴舞中央図書館所蔵資料 名古屋市蓬左文庫所蔵資料、徳川林政史研究所所蔵資料、徳川美術館所蔵資料 尾張旭市所蔵古文書、多治見市所蔵資料、土岐市所蔵文書、東京大学経済学部図書館所蔵資料 東京大学農学部図書館所蔵資料、東京大学史料編纂所所蔵資料、国立国会図書館所蔵資料 国立公文書館所蔵資料、防衛庁防衛研究所所蔵資料、外務省外交史料館所蔵資料 国立公衆衛生院所蔵資料、東京都立中央図書館、東京市政調査会所蔵資料 東京商工会議所所蔵資料、横浜開港資料館所蔵資料、交通博物館所蔵資料 法政大学大原社会問題研究所所蔵資料、日本青年館所蔵資料、立教大学所蔵小牧税務署地図
その他	近代新聞資料、瀬戸市歴史民俗資料館収集資料 旧瀬戸市史編さん室資料、絵葉書類、地図類、瀬戸市古代・中世資料 瀬戸市史民俗調査データベース、地域別文献一覧、コピー目録、愛知県史編さん室収集資料

エ 仏閣・神社

現在市域にみられる仏閣は 40 寺院あり、そのうち本寺は掛川地区の定光寺と赤津地区の雲興寺の2つです。近世以前の仏閣は、定光寺の末寺が2寺、雲興寺の末寺が8寺あるほか、専修寺の末寺が2寺、龍泉寺の末寺が1寺、大本山聖護院の末寺が1寺、善修院の末寺が1寺あります。

神社は郷社が3社、村社が17社、無格社が9社、合計29社あります。

■仏閣一覧

整理番号	名称	旧名称	宗派	(本・末寺)	旧宗派	開基・開山	所在地	旧所在地	在住・無住・廃寺
1	薬王山 東光寺	—	臨済宗妙心寺派	定光寺末	—	永正元年9月	三沢町1-429	水野村大字(中)水野字寺屋敷593	在住
2	小金山 感応寺	—	臨済宗妙心寺派	定光寺末	天台宗	天平年中	水北町1950	水野村大字(上)水野字小金1616	在住
3	応夢山 定光寺	—	臨済宗妙心寺派	本寺	—	建武3年	定光寺町373	品野村大字沓掛字応夢山イ373	在住
4	瑞応山 祥雲寺	—	曹洞宗	雲興寺末	—	天文10年	上品野町665	品野村大字上品野字金地665	在住
5	寂場山 菩提寺	—	天台宗山門派	龍泉寺末	—	天平年中	上品野町1020	品野村大字上品野字秋之洞1020	無住
6	多聞山 吉祥寺	吉祥庵	曹洞宗	雲興寺末	—	正保元年	上半田川町846	品野村大字上半田川字早稲川846	在住
7	洞谷山 浄源寺	—	曹洞宗	雲興寺末	天台宗	不詳	岩屋町27	品野村大字中品野字鳥原44	在住
8	岩屋山 薬師堂	—	曹洞宗	浄源寺受持	—	不詳	岩屋町67	品野村大字中品野字東山1	無住
9	庚申堂	—	曹洞宗	浄源寺受持	—	長祿元年	—	品野村大字中品野字前田928	無住
10	龍洞山 久雲寺	—	曹洞宗	雲興寺末	天台宗	神龜2年	落合町47	品野村大字下品野字山崎908	在住
11	大松山 全宝寺	阿弥陀堂	曹洞宗	久雲寺受持	天台宗	天平6年	品野町2-40	品野村大字下品野字大松戸1	無住
12	大昌山 宝泉寺	神宮寺	曹洞宗	雲興寺末	天台宗	建長4年	寺本町30	瀬戸町字東郷1849	在住
13	—	常福院	—	天台宗寺門派	—	元和元年	藤四郎町62	瀬戸町字別田1167	在住
14	太平山 栄国寺	—	曹洞宗	静岡県田方郡網代村善修院末	—	天正元年8月	西本町1-8	瀬戸町西犬塚3131	在住
15	大龍山 雲興寺	勝光寺	曹洞宗	本寺	真言宗	不詳	白坂町131	赤津村字白坂2779	在住
16	太子山 万徳寺	—	真宗高田派	専修寺末	—	正応元年	塩草町93	赤津村字塩草20	在住
17	匡王山 慶昌院	八王子	曹洞宗	雲興寺末	天台宗	文明年間	城屋敷町34	旭村大字今寺山713	在住
18	佛法山 宝生寺	—	曹洞宗	雲興寺末	—	宝暦2年	駒前町171	幡山村	在住
19	瑞雲山 東福寺	—	天台宗	野田密蔵院末	—	不詳	—	幡山村	廃寺
20	福祿山 仙寿寺	—	曹洞宗	雲興寺末	臨済宗	享保3年	東菱野町31	幡山村	在住
21	大澤山 西光寺	—	真宗大谷派	不明	—	不詳	西脇町182	幡山村	在住
22	教香山 本泉寺	—	真宗高田派	専修寺末	—	弘安6年	矢形町165	幡山村大字山口字大坂	在住
23	大成山 興福寺	—	曹洞宗	不明	—	享和3年	八幡町358	幡山村	在住
24	弘徳山 榮昌寺	—	曹洞宗	宝泉寺末	—	大正年間	一里塚町108	—	在住
25	不動山 覚城寺	—	真言宗醍醐派	総本山醍醐寺末	天台宗	大正14年	追分町73	—	在住
26	壺坂山 弘誓寺	弘誓教会所	曹洞宗	慶昌院末	—	昭和12年	東吉田町44	—	在住
27	東照山 光國寺	—	真宗大谷派	東本願寺末	—	昭和3年	西吉田町15	—	在住
28	城見山 興龍寺	熊谷寺出張所春日井教会	高野山真言宗	高野山末	—	大正年間	仲郷町76	—	在住
29	日本世界山 金剛院	弘法堂	高野山真言宗	高野山末	—	大正末	東拝戸町5	—	在住
30	春日山 順慶寺	権現説教所	真宗大谷派	東本願寺末	—	昭和7年	熊野町20	—	在住
31	—	如々庵	—	如来教	—	不詳	穴田町524	—	無住
32	雲龍山 藏春寺	政松寺	臨済宗南禅寺派	永保寺別院	—	昭和34年(平成6年転出)	岐阜県多治見市山吹町3-46-25	上水野町884	在住(転出)
33	陶泉山 泉秋寺	—	真宗大谷派	東本願寺末	—	昭和24年	宮里町105	—	在住
34	称名山 善光寺	—	浄土宗	総本山知恩院末	—	昭和3年	西吉田町9	—	在住
35	妙延山 宗林寺	—	日蓮宗	久遠寺末	—	大正末(平成3年移転)	門前町6-14	進陶町108	在住
36	柳生山 長慶寺	—	曹洞宗	雲興寺末	—	不詳	駒前町157	—	在住
37	地明山 天晴寺	天晴山地明閣	日蓮正宗	日蓮正宗末寺	—	大正7年(昭和45年現在地へ移転)	東長根町205	品野村中品野	在住
38	安土山 道泉寺	—	曹洞宗	宝泉寺末	—	昭和5年	安戸町73	—	在住
39	平等庵	—	如来教	—	—	不詳	東町40	—	無住
40	紫雲山 法雲寺	瀬戸説教所	真宗大谷派	東本願寺末	—	明治16年	深川町30	—	在住
41	解脱山 放光寺	放光庵	浄土宗鎮西派	総本山知恩院末	浄土宗知恩院派	明治(昭和17年市域へ転入)	泉町33-6	丹羽郡大口村下小口字寺田	在住
42	—	宝珠寺	—	天台寺門宗	—	不詳	岩屋町67	—	無住

(瀬戸市仏教会2003『せとのお寺の手びきⅡ』ほかより作成)  
※1～10・12・15～22は『寛文村々覚書』記載の近世初期からの仏閣



雲興寺本堂



雲興寺鐘楼

■ 神社一覧

整理番号	名称	祭神	創建	所在地	旧所在地
(郷社)					
1	尾張戸神社	天火明命・天香語山命・建稲種命		十軒町	水野村大字下水野志段味村大字上志段味 字東谷番外
2	深川神社・陶彦社	天忍穂耳尊・天菩日命・天津彦根命・熊野樟杼毘命・活津彦根命・田霧姫命・市杵島姫命・活津毘売命・(建御名方命)[摂社の陶彦社は加藤四郎左衛門景正]	宝亀2年(伝承)、陶彦社は文政7年	深川町12	瀬戸町字池田680
3	八幡社	神功皇后・田寸津比売命・品陀和気命・多紀理比売命・市杵島比売命・天照大御神・木花咲耶姫命		八幡町3	幡山村大字山口字大坂
(村社)					
4	八王子神社	多紀理毘売命・市寸島比売命・多岐都比売命・正膳吾勝々速日天忍耳命・天穂日命・天津日子根命・活津日子根命・熊野久須毘命	応永年中	美濃池町127	旭村大字美濃之池字森腰150
5	三社大明神社	天香語山命・天火明命・建稲種命		中水野町1丁目	水野村大字中水野字森之脇825
6	八幡神社	成務天皇・応神天皇・神功皇后・(大山祇命(三柱))		水北町	水野村大字上水野字東山畑201
7	金神社	尾治金ノ連		小金町	水野村大字上水野字小金1594
8	神明神社	伊弉諾尊・伊弉册尊・菊理姫尊		定光寺町	品野村大字沓掛字杖ヶ洞1313
9	八剣社	天照皇御神・素戔鳴男尊・日本武尊・宮酢姫命・健稲種命・(高皇産靈命・神皇産靈命・伊邪那美命・大己貴命・迦具土命・水速女命・天照大御神・大山祇命)		下半田川町	品野村大字下半田川字宮前746
10	稲荷神社	豊受姫命	寛永2年12月	上品野町	品野村大字上品野字北島578
11	八幡神社	応神天皇		片草町	品野村大字片草村字前田403
12	八王子社	八柱御子		白岩町	品野村大字白岩字裏山385
13	金峯社	安閑天皇(伊弉諾尊・伊弉册尊)		上半田川町	品野村大字上半田川字曲里ヶ根1363
14	八剣神社	天照大神・素戔鳴男尊・日本武尊・宮酢姫命・武稲種命		中品野町	品野村大字中品野字森屋敷596
15	八幡神社	応神天皇		鳥原町	品野村大字中品野字庄洞224
16	神明社	瓊々杵命・国常立命・豊秋津姫		落合町	品野村大字下品野字山崎885
17	大目神社	八柱御子		巡間町	赤津村字巡間1824
18	熊野社	伊弉諾尊・伊弉册命・事解男命		東菱野町	幡山村大字菱野字米泉
19	八幡社	応神天皇		西本地町2丁目	幡山村大字本地字中切
20	八王子社 神明社 八剣神社	天忍穂耳尊・天津彦根命・熊野樟杼日命・湍津日売命・天穂日命・活津彦根命・田心比売命・市杵島姫命・天照大御神・素戔鳴尊・(大山祇命(二柱))・建御名方命・市杵島姫命・倉稲魂命・猿田彦命・安閑天皇・天細女命)	文明5年	城屋敷町16	旭村大字今字後田550
(無格社)					
21	八幡社	応神天皇		内田町1丁目	水野村大字下水野字荏坪43
22	岩割瀬神社	須佐之男命		鹿乗町	水野村大字下水野字岩割瀬1396
23	八王子社	多氣理媛命・市寸島媛命・多紀津媛命・正膳吾勝々速日天忍穂耳命・天菩日命・天津彦根命・活津彦根命・熊野杼日命・(大山祇命(二柱))		曾野町	水野村大字上水野字曾野1796
24	八剣神社	武内宿禰・(大山祇命)		余床町	水野村大字上水野字西余床2758
25	石神社	猿田彦命		西郷町	瀬戸町字郷2285
26	熊野社	伊邪那美命		熊野町	瀬戸町字西犬塚3171
27	窯神社	火具土神・菅原道真・加藤民吉	文化11年	窯神町	瀬戸町字安戸182
28	山神社	大山祇命		東郷町	瀬戸町字東郷1885
29	曾野稲荷神社			曾野町740	水野村大字上水野字曾野

(『東春日井郡誌』ほかより)

■ 『愛知県の近世社寺建築』(昭和54年度)の調査対象一覧 (39ページを参照)

		名称	創立	二次調査	備考
寺院建築	禅宗寺院	雲興寺本堂	宝暦10(1760)	○	曹洞宗
	浄土真宗寺院	西光寺本堂	元禄4(1691)頃	○	RC造に建替
		本泉寺本堂	宝暦10(1760)		
		万徳寺本堂	江戸期末	○	
神社建築	深川神社本殿	文政6(1823)	○		

(『愛知県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査』より)

オ 祭礼

瀬戸で現在確認される祭りには、戦前からの伝統的な祭礼・年中行事と、戦後の地域おこし・商工観光推進を目的として始められたものがあります。伝統的な祭礼等は各ムラ・寺社周辺で行われるものがほとんどですが、神社等への献馬行事である警固祭りはムラが合同で猿投神社や龍泉寺の祭礼へ合宿と称して献馬するなど広域にわたるものがかつてみられ、今日残されている山口八幡社へ複数の旧村々から献馬奉納される郷社祭りが往時を偲ばせる祭礼となっています。

■主な祭礼一覧(個人宅等で行われる祭礼・年中行事は除く)

時期	伝統的な年中行事・祭礼
春	五日えびす(1月)(品野菩提寺・本地尾張えびす社) 左義長(サギッチョ・ドンド)(1月)市内各所 初午(2月)(下品野島田稻荷・曾野稻荷ほか) 十六善神春大祭(3月)(菱野仙寿寺) 妻神社春祭り(3月)(下半田川妻神社) 弘法セツタイ(4月)市内各弘法堂ほか 喜平治祭り(4月)(上半田川吉祥寺) 灌仏会(花祭り)(4月)市内各寺院 お五輪さん(4月)(山口塔山城跡) せと陶祖まつり(4月)(瀬戸陶彦社) 陶祖祭(4月)(上品野稻荷神社ほか) 性空祭(4月)(赤津雲興寺) 松原祭(5月)(今村八王子社)
夏	大祓・茅の輪くぐり(7月)(瀬戸深川神社ほか) 雨乞い(7月)(下水野目鼻石ほか) 品野祇園祭(7月)(下品野) 天王祭り(7月)(市内各天王社・津島社ほか) 虫送り(7月)(山口八幡社・今村八王子社(大鍬さま)ほか) 地藏盆・施餓鬼会(7・7月)市内各寺院 観音祭(8月)(上品野菩提寺・赤津長谷山観音堂ほか) 太子祭り(8月)(赤津万徳寺)
秋	御鍬祭り(9月)(菱野熊野社・山口御鍬社ほか) 窯神祭(9月)(瀬戸窯神社) 秋季例大祭(10月)市内各氏神 (献馬行事 山口の警固祭り・菱野のおでく警固祭り・本地の警固祭り・今村の飾り馬ほか)
冬	薬師さん(11月)(瀬戸宝泉寺・山口本泉寺山口観音ほか) 秋葉まつり(11月)(今村慶昌院ほか)

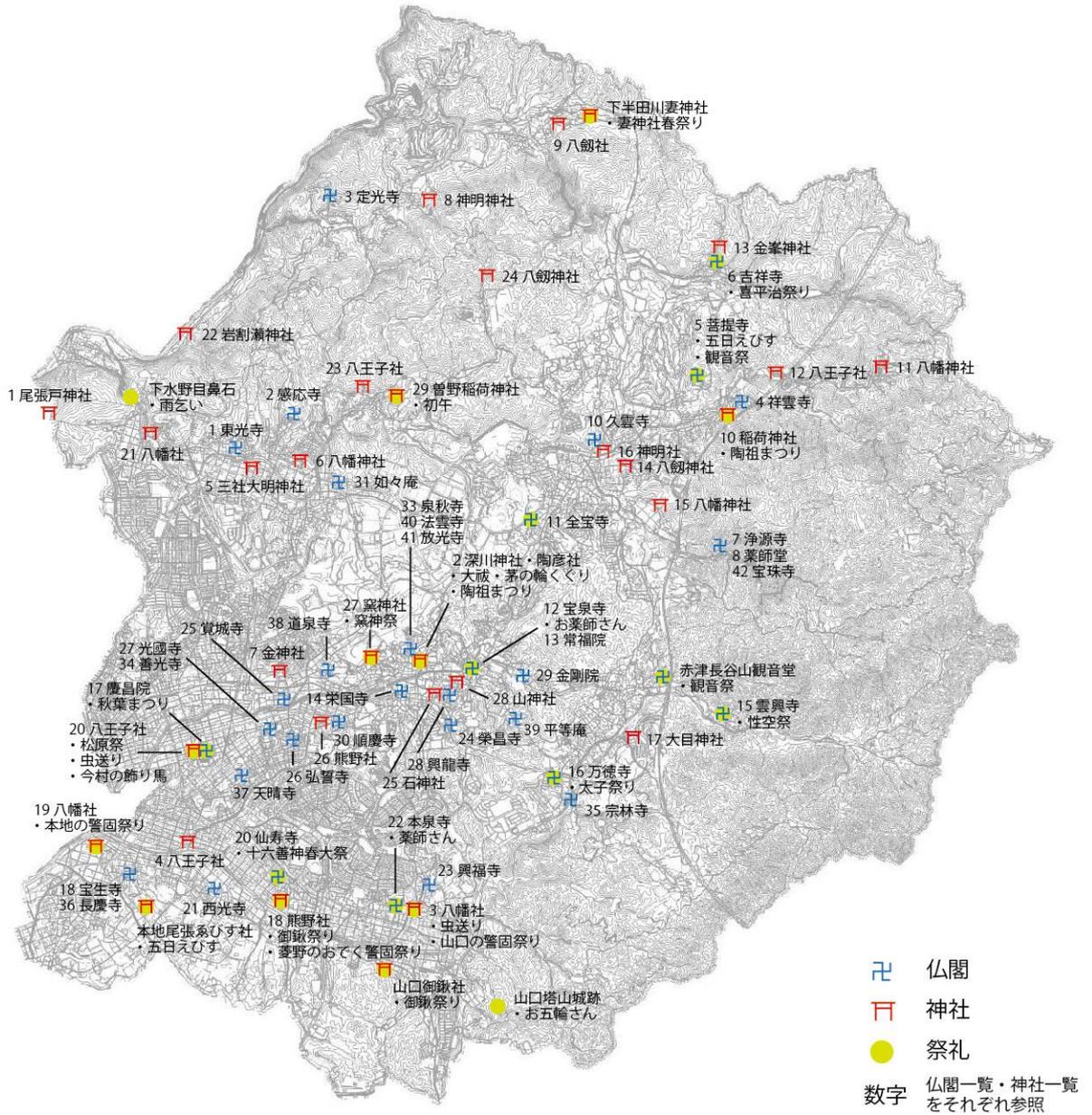
(『瀬戸市史 民俗編』ほかより)



菱野のおでく警固祭り



品野祇園祭



仏閣・神社・祭礼位置図



本地の警固祭り  
(本地八幡社秋季例大祭(棒の手奉納))



お薬師さん  
(宝泉寺八日薬師)

カ 美術工芸品

陶磁器関係を中心に多くの美術工芸品があります。

伝統工芸品としては、赤津焼と瀬戸染付焼が指定を受けています。

■美術工芸品一覧

○陶磁器関係

作品名	時代	製作者
灰釉四耳壺	鎌倉前期	
灰釉瓶子	鎌倉前期	
灰釉四耳壺	鎌倉前期	
灰釉瓶子	鎌倉中期	
灰釉水瓶	鎌倉中期	
灰釉瓶子	鎌倉中期	
灰釉四耳壺	鎌倉末期～室町前期	
灰釉天目茶碗	室町中期	
鉄釉茶壺	桃山期	
伯麿茶碗	桃山期	
黒釉茶壺	江戸初期	
絵瀬戸香合	江戸前期	
織部茶入	江戸前期	伝瀬戸六作 新兵衛作
鉄釉茶入	江戸前期	
鉄釉茶入	江戸前期	
呉須唐草文水指	江戸前期	
絵瀬戸砧形花入	江戸前期	
黄瀬戸広口花入	江戸前期	
織部扇面皿	江戸前期	伊東小平太
赤織部沓茶碗	江戸前期	伝瀬戸六作 新兵衛作
黒織部沓茶碗	江戸前期	
黒織部沓茶碗	江戸前期	
織部深向付	江戸前期	
鉄釉茶入	江戸前期	
青織部菖蒲文向付	江戸前期	
志野草花文香合	江戸中期	
緑釉獅子付台鉢	江戸中期	春暁
青織部菊形燭台	江戸中期	伝春丹
上野流し水指	江戸中期	春丹
鉄釉水指	江戸中期	
柿瓢型徳利	江戸中期	
織部手付香合	江戸後期	御深井窯
鉄釉耳付茶入	江戸後期	
鉄釉茶入	江戸後期	
鉄釉茶碗	江戸後期	
御深井釉井戸覗き蓋置	江戸後期	
織部糸巻花入	江戸後期	
鉄釉水指	江戸後期	
鶯形徳利	江戸後期	
陶硯	江戸後期	
志野狛犬	江戸後期	
織部薄図平鉢	江戸後期	平澤九郎
染付花鳥唐草文平鉢	江戸後期	伝 加藤新七
染付山水図角水指	江戸後期	
染付山水図植木鉢	江戸後期	
染付五宝文鉢	江戸後期	
御深井釉平水指	江戸後期	春龍
青磁硯	江戸後期	加藤吉右衛門
無釉猿面硯	江戸後期	加藤吉右衛門
染付唐児図筆筒	江戸後期	伝 加藤民吉
染付山水図振出	江戸後期	伝 加藤民吉
染付山水図芋頭水指	江戸後期	伝 加藤民吉
染付山水図大花瓶	江戸後期	伝 加藤民吉
青磁染付龍濤文大花瓶	江戸後期	伝 加藤民吉
染付山水図筒花入	江戸後期	伝 加藤忠治
染付山水図重箱	江戸後期	伝 加藤忠治

作品名	時代	製作者
染付五経文煎茶碗	江戸後期	伝 三代川本治兵衛
瑠璃釉瓢形蓋付壺	江戸後期	伝 三代川本治兵衛
染付山水図筒形水指	江戸後期	
染付山水図水指	江戸後期	
染付鳥刺図片口	江戸後期	
染付祥瑞文皿	江戸後期	二代加藤民吉
寿老置物	江戸後期	渡辺幸平
蕪図長角鉢	江戸後期	春岱
織部黒茶碗	江戸後期	春岱
志野松絵徳利	江戸後期	春岱
志野松に千鳥図大皿	江戸後期	春岱
染付松竹梅図徳利	江戸後期	加藤源吉
白磁多角鉢	江戸後期	加藤源吉
染付神酒徳利	江戸後期	加藤庄右衛門
青磁唐獅子置物	江戸後期	加藤勘六
染付牛図香合	江戸後期	
染付草花文角型盃洗	江戸後期	
染付瑠璃釉植木鉢	江戸後期	
鉄釉茶入	江戸後期	楽々園焼
掛分大徳利	江戸後期	
黒釉菊文大皿	江戸後期	
赤染鯛形鉢	江戸後期	
馬の目皿	江戸後期	
染付祥瑞文茶碗	江戸後期	
染付山海図水指	江戸後期	
織部大皿	江戸後期	
染付山水図植木鉢	江戸後期	伝 加藤新七
染付花鳥図大丸卓	明治前期	二代加藤李左衛門
染付花鳥図蓋付大飾壺	明治前期	二代加藤李左衛門
染付耳付飾壺	明治前期	初代加藤周兵衛
磁製鳳凰鬼瓦	明治中期	六代川本半助
鳳凰耳付粉彩菱形大瓶	明治中期	六代川本半助
染付菊垣図膳	明治中期	三代加藤善治
染付鳳凰文花瓶	明治中期	二代加藤周兵衛
藤浮文耳付花瓶	明治中期	二代川本樹吉
耳付山桜図花瓶	明治中期	二代川本樹吉
染付桐文香炉	明治中期	二代川本樹吉
青磁人形文皿	明治中期	四代加藤五助
染付鳳凰唐草文脚付鉢	明治中期	四代加藤五助
染付耳付富士図飾壺	明治中期	六代加藤紋右衛門
薄手磁器カップ	明治中期	初代高島徳松
染付骨灰磁器	明治中期	加藤鑑太郎
染付盃洗	明治中期	伊藤四郎左衛門
黒地鶏図花瓶	明治中期	加藤友太郎
陶額	明治中期	前田正名書
狛犬	明治中期	寺内半月
白磁観音像	明治中期	寺田半月
染付松鶴図大重箱	明治中期	
染付山水図大重箱	明治中期	
染付高砂図大皿	明治後期	加藤辰兵衛
猿置物	明治末期	小川
染付牡丹文長角水盤	明治末期	加藤鋤太郎
染付花鳥文壺	大正期	加藤松次郎
釉彩文花瓶	大正期	二代高島徳松
マット釉鳳凰文花瓶	大正期	二代高島徳松

(重要有形民俗文化財「瀬戸の陶磁器の生産用具及び製品」より)



春岱作 蕪図長角鉢



覚源禅師坐像  
(定光寺蔵)

○社寺関係

種別	作品名	時代	所在
彫刻	木造 智光禅師坐像	江戸前期(17世紀)	定光寺
彫刻	木造 覚源禅師坐像	室町中期(15世紀)	定光寺
絵画	絹本着色 覚源禅師頂相	室町中期(15世紀)	定光寺
絵画	絹本着色 智光本性禅師頂相	江戸前期(17世紀)	定光寺
絵画	絹本着色 要門和尚頂相	江戸前期(17世紀)	定光寺
絵画	絹本着色 大覚禅師頂相	桃山か江戸前期(16~17世紀)	定光寺
絵画	絹本着色 覚照禅師頂相	桃山か江戸前期(16~17世紀)	定光寺
絵画	絹本着色 釈迦十六善神像	室町中期~後期(15~16世紀)	定光寺
絵画	紙本墨画 龍之図	江戸前期(17世紀)	定光寺
絵画	絹本着色 十三仏図	江戸前期(17世紀)	定光寺
絵画	紙本着色 四季草花図衝立	江戸中期(18世紀)	定光寺
絵画	紙本着色 名所遊楽図	江戸前期~中期(17~18世紀)	定光寺
絵画	紙本着色 渡唐天神像	室町後期(16世紀)	定光寺
墨蹟	寺号「定光寺」	南北朝(14世紀)	定光寺
墨蹟	覚源禅師墨蹟	南北朝(14世紀)	定光寺
墨蹟	智光禅師墨蹟(「夏末偈」)	江戸前期(17世紀)	定光寺
墨蹟	後西天皇綸旨(勅諭智光本性禅師号)	江戸前期(17世紀)	定光寺
墨蹟	聖一国師墨蹟(「甘露」)	鎌倉後期(13世紀)	定光寺
墨蹟	関山恵玄墨蹟(「万法不侶之語」)	南北朝(14世紀)	定光寺
漆器	堆朱香合	江戸(17~19世紀)	定光寺
漆器	唐彫堆朱重箱	江戸(17~19世紀)	定光寺
漆器	唐彫堆朱重箱	江戸(17~19世紀)	定光寺
青銅器	獅子型香炉	江戸(17~19世紀)	定光寺
陶器	内黒志野陰陽葵 紋茶碗	江戸(17~19世紀)	定光寺
木製品	舍利厨子	江戸(17~19世紀)	定光寺
彫刻	木像薬師如来像(秘仏)	不明	東光寺
彫刻	衝立1基(横井金谷画)	江戸(17~21世紀)	久雲寺
彫刻	薬師如来坐像	不明	宝泉寺
彫刻	石造地藏菩薩立像	不明	栄国寺
絵画	十六善神像	江戸(17~24世紀)	雲興寺
絵画	涅槃図	江戸(17~25世紀)	雲興寺
絵画	阿弥陀来迎図	江戸(17~26世紀)	雲興寺
絵画	多宝塔図	江戸(17~27世紀)	雲興寺
鏡	秋葉大権現神鏡	不明	慶昌院
絵画	釈迦十六善神像	不明	仙寿寺
彫刻	本尊胎内仏		仙寿寺
彫刻	阿弥陀如来立像	室町期	西光寺
彫刻	聖徳太子像	不明	本泉寺
彫刻	観音菩薩像	不明	本泉寺
陶器	陶製狛犬	江戸期~	深川神社



渡唐天神像(定光寺蔵)

■伝統的工芸品

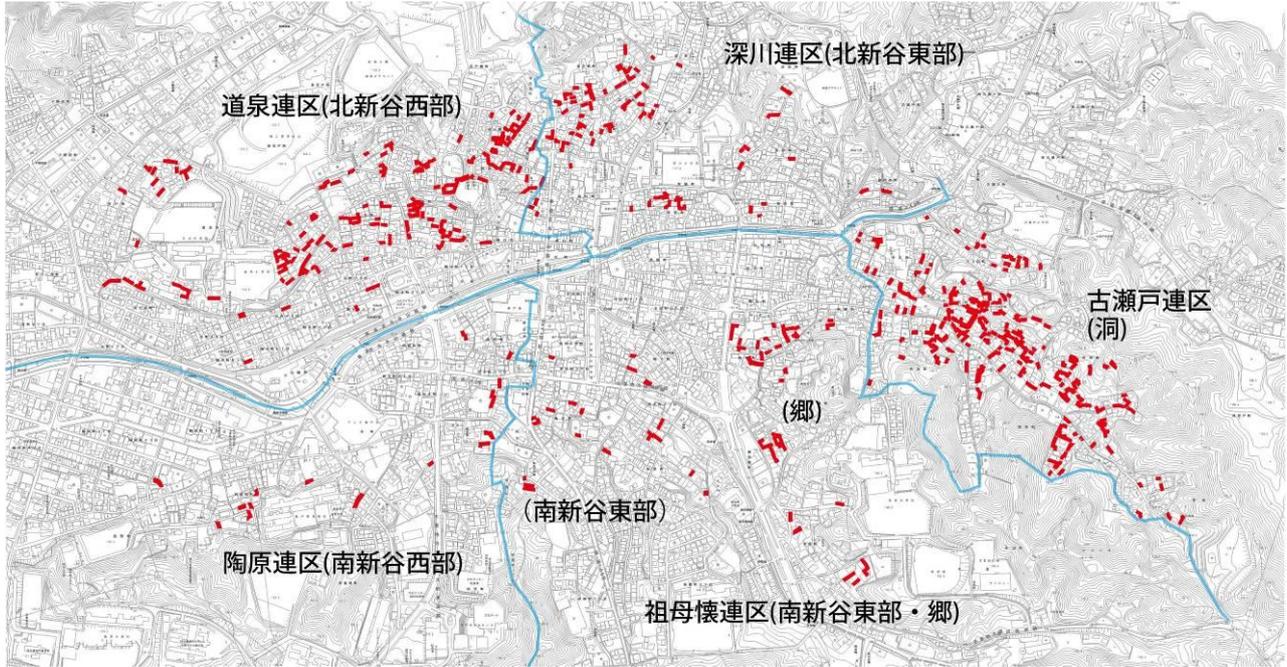
	赤津焼	瀬戸染付焼
概要	赤津地区を中心につくられているやきもので、灰釉、鉄釉、古瀬戸釉、黄瀬戸釉、志野釉、織部釉、御深井釉の7種類の釉薬とヘラ彫り、印花、櫛目、三島手などの12種の技法を使って、茶道具から家庭用品まで幅広い製品が作られている。	江戸後期から瀬戸で作られた白地の素地に呉須と呼ばれる青く発色するコバルト顔料で絵付をしたやきものの総称。
主な製品	茶器、花器、酒器、飲食器など	茶器、花器、室内装飾品、食卓用品
指定日	昭和52年3月30日	平成9年5月14日
関連団体	赤津焼工業協同組合	瀬戸染付焼工業協同組合

キ 建造物・構造物など

歴史的町並み、景観は「窯垣のかまがき小径こみち」など市街地における保存・整備が進んでいます。また「旧山繁商店」「久米邸」など窯業に関わる古建築も保存・整備が行われつつあります。また、水野の殿様街道や品野の信州飯田街道(中馬街道)など一部に往時の景観が残っています。

そのほか、公共施設などに多くの陶壁が設置されていたり、瀬戸川に架かる橋の装飾にやきものが利用されているのも瀬戸市の特徴です。また、まちなかにはパブリックアートも設置されています。

■窯垣分布図



(大学コンソーシアムせと(名古屋産業大学和泉潤ゼミ・瀬戸市文化課協働)2011~2016調査による)

■近代化遺産一覧

	物件名称	分類	所在地	竣工年	構造
第3次調査物件	瀬戸陶磁器会館(旧瀬戸陶磁器工業組合総合共同販売所見本陳列場)	工業・窯業	陶原町1-8	昭和10年(1935)	RC造3階建
	古窯	工業・窯業	西郷町	昭和22年(1947)移築	煉瓦・粘土
	洞本業窯	工業・窯業	東洞町17	昭和24年(1949)移築	煉瓦・粘土
	一里塚本業窯	工業・窯業	一里町27	昭和24年(1949)移築	煉瓦・粘土
	一里塚本業窯作業場	工業・窯業	-	明治40年代(1907)	木造1階建
	陶磁器の生産用具及び製品	工業・窯業	歴史民俗資料館	平安以降	道具・製品
	丸一国府商店	商業	栄町41	明治44年(1911)	木造2階建(一部4階建)
	ホフマン砂防遺構	河川	東印所町	明治38年(1905)	土堰堤5基、柳編柵45箇所
	蔵所橋	河川	栄町	昭和2年(1927)	単純RCT桁3連
	森橋	河川	京町	昭和2年(1927)	単純RCT桁2連
	馬ヶ城浄水場堰堤	上下水道	馬ヶ城町1-2	昭和8年(1933)	自然流下式配水
	馬ヶ城浄水場緩速濾過池	上下水道	馬ヶ城町1-2	昭和8年(1933)	自然流下式配水
	馬ヶ城浄水場事務所	上下水道	馬ヶ城町1-2	昭和8年(1933)	木造平屋建
第2次調査物件	記念橋	河川	末広町1	-	RC単純T桁
	名鉄モ760型電車	鉄道	上松山町2-466	-	-
	デキ200型電気機関車	鉄道	上松山町2-466	-	-
	※JR東海バス瀬戸記念橋駅	鉄道	末広町1-1	-	木造・瓦葺
	※瀬戸警察署蔵所交番	行政	南仲之切町	昭和14年(1939)	木造・瓦葺
第1次調査物件	丸八製陶所	窯業	窯神町86	-	木造・瓦葺
	※名鉄尾張瀬戸駅旧駅舎	鉄道			
	※名鉄尾張瀬戸駅旧ホーム上屋	鉄道			
※名鉄瀬戸市役所前駅プラットフォーム	鉄道				

※は滅失

(『愛知県の近代化遺産-愛知県近代化遺産(建築物等)総合調査報告書-』より)

■近代和風建築一覧

	物件名称	分類	所在地	竣工年	構造
第3次調査物件	瀬戸永泉教会礼拝堂	教会	杉塚町5番地	明治33年(1900) 昭和5年(1930)改修	木造平屋建(一部2階建)・切妻造・棧瓦葺
	久米邸	一般	朝日町49-3	明治41年(1908) 昭和23年(1948)改修	木造2階建・寄棟造・棧瓦葺
第2次調査物件	大脇廣一家住宅	農家	三沢町1	明治35年	木造ツシ2階・入母屋造
	長江惣吉家住宅	一般	上品野町5丁目128	昭和2年	木造2階・入母屋造
	服部共生医院	その他(医院)	品野町6	昭和3年	木造2階・入母屋造
	加藤繁太郎家住宅母屋	一般	西追分町	昭和16年	木造2階・入母屋造
	※加藤繁太郎家住宅土蔵	屋敷蔵	西追分町	昭和16年	土蔵造2階・切妻造
	村上義宏家住宅	一般	西谷町	大正9年	木造2階・入母屋造
	加藤禎紀家住宅主屋	一般	西谷町	明治	木造2階・入母屋造
	加藤禎紀家住宅長屋門	その他(長屋門)	西谷町	明治	木造1階・寄棟造
	加藤禎紀家住宅離れ・土蔵	離れ・屋敷蔵	西谷町	明治	木造ツシ2階・木造2階・切妻造
	伊藤伊平家住宅	一般	西郷町	明治22年	木造ツシ2階・切妻造
	窯垣の小径資料館主屋・離れ	一般・離れ	仲洞町	明治3年	木造1階・木造2階・入母屋造
	窯垣の小径ギャラリー	一般	仲洞町	昭和16年	木造2階・切妻造
	加藤朋也家住宅	一般	西洞町	明治	木造1階・切妻造
	伊藤弘道家住宅	農家	羽根町	昭和13年	木造2階・入母屋造
	清谷太一家住宅	一般	薬師町	大正	木造2階・切妻造
	蛭子湯	公衆浴場	蛭子町	昭和8年	木造2階・切妻造
	加藤繁太郎家住宅	一般	仲切町	明治22年	木造1階・切妻造
	加藤繁太郎家住宅2	一般	仲切町	明治22年	木造2階・入母屋造
	加藤繁太郎家住宅工場	工場	仲切町	昭和25年	木造1階・切妻造
	加藤繁太郎家住宅土蔵	蔵	仲切町	明治36年	土蔵造2階・切妻造
	神武館	その他(剣道場)	深川町	昭和31年	木造1階・切妻造
窯垣の小径の町並み	町並み	仲洞町	明治期から昭和前期	-	
第1次調査物件	尾張戸神社本殿・拝殿	神社	十軒町913	明治17(本殿・拝殿)	本殿:木造平屋建、切妻造、鉄板葺 拝殿:木造平屋建、切妻造、棧瓦葺
	山口八幡社本殿	神社	八幡町3	昭和10	木造平屋建、切妻造、銅板葺
	山口八幡社拝殿	神社	八幡町3	1794(寛政6)	木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺
	美濃池八王子神社本殿・神門	神社	美濃池町127	大正6(本殿・拝殿)	木造平屋建、切妻造、銅板葺
	上水野八幡社本殿	神社	水北町1341	昭和11	木造平屋建、切妻造、銅板葺
	上水野八幡社拝殿	神社	水北町1341	昭和元	
	上品野稻荷神社本殿	神社	上品野町578	明治22	木造平屋建、切妻造、銅板葺
	上品野稻荷神社拝殿	神社	上品野町578		
	下半田川八剱社本殿	神社	下半田川町746	明治40	木造平屋建、切妻造、銅板葺
	片草八幡神社本殿・拝殿	神社	片草町403	不明	本殿:木造平屋建、切妻造、銅板葺 拝殿:木造平屋建、切妻造、棧瓦葺
	金峯神社本殿・拝殿	神社	上半田川町1363	大正7年頃か	本殿:木造平屋建、切妻造、銅板葺 拝殿:木造平屋建、切妻造、棧瓦葺
	東光寺本堂	寺院	三沢町1-429	不明	木造平屋建、寄棟造、棧瓦葺
	宝生寺本堂	寺院	駒前町171	宝暦2	木造平屋建、宝形造、棧瓦葺
	雲興寺書院	寺院	白坂町131	昭和5	木造平屋建、切妻造、本瓦葺
	万徳寺太子堂	寺院	塩草町93	昭和10	木造平屋建、寄棟造、本瓦葺
	宝泉寺本堂	寺院	寺本町30	昭和9	木造平屋建、入母屋造、本瓦葺
	宝泉寺庫裏	寺院	寺本町30	昭和9	木造平屋建、入母屋造、本瓦葺
	法雲寺本堂	寺院	深川町30	明治35	木造平屋建、入母屋造、本瓦葺
	富田恒家住宅	一般	下半田川町1058	昭和	木造2階建、切妻造、棧瓦葺
	長江初吉家住宅	一般	上半田川町885	大正3	木造2階建、入母屋造、棧瓦葺
	丸田商店	商店	品野町6丁目154	昭和15	木造2階建、入母屋造、棧瓦葺
	博雲陶器研修所	一般	小金町50	昭和17	木造2階建、入母屋造、棧瓦葺
	※梅村商店	商店	元町1丁目4	明治35	木造2階建、切妻造、棧瓦葺
	加藤裕久家住宅	一般	元町1丁目9	昭和	木造2階建、切妻造、棧瓦葺
	桜井長平家住宅	町家	前田町16	大正3	木造2階建、切妻造、棧瓦葺
	阿部一猛家住宅	農家	羽根町143	昭和14	木造2階建、入母屋造、棧瓦葺
	米実商店	商店	仲切町	昭和6	木造2階建、切妻造、棧瓦葺
清谷正夫家住宅	一般	薬師町63	大正7	木造平屋建、切妻造、棧瓦葺	
足立商店	商店	薬師町60	大正7	木造平屋建、切妻造、棧瓦葺	
秋田勝利家住宅	一般	陶生町8	昭和4	木造平屋建、切妻造、棧瓦葺	
丹羽商店土蔵	商店	背戸側町5	大正15	木造平屋建、切妻造、棧瓦葺	
陶彦社拝殿	神社	深川町12	大正13	木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺	

※は滅失

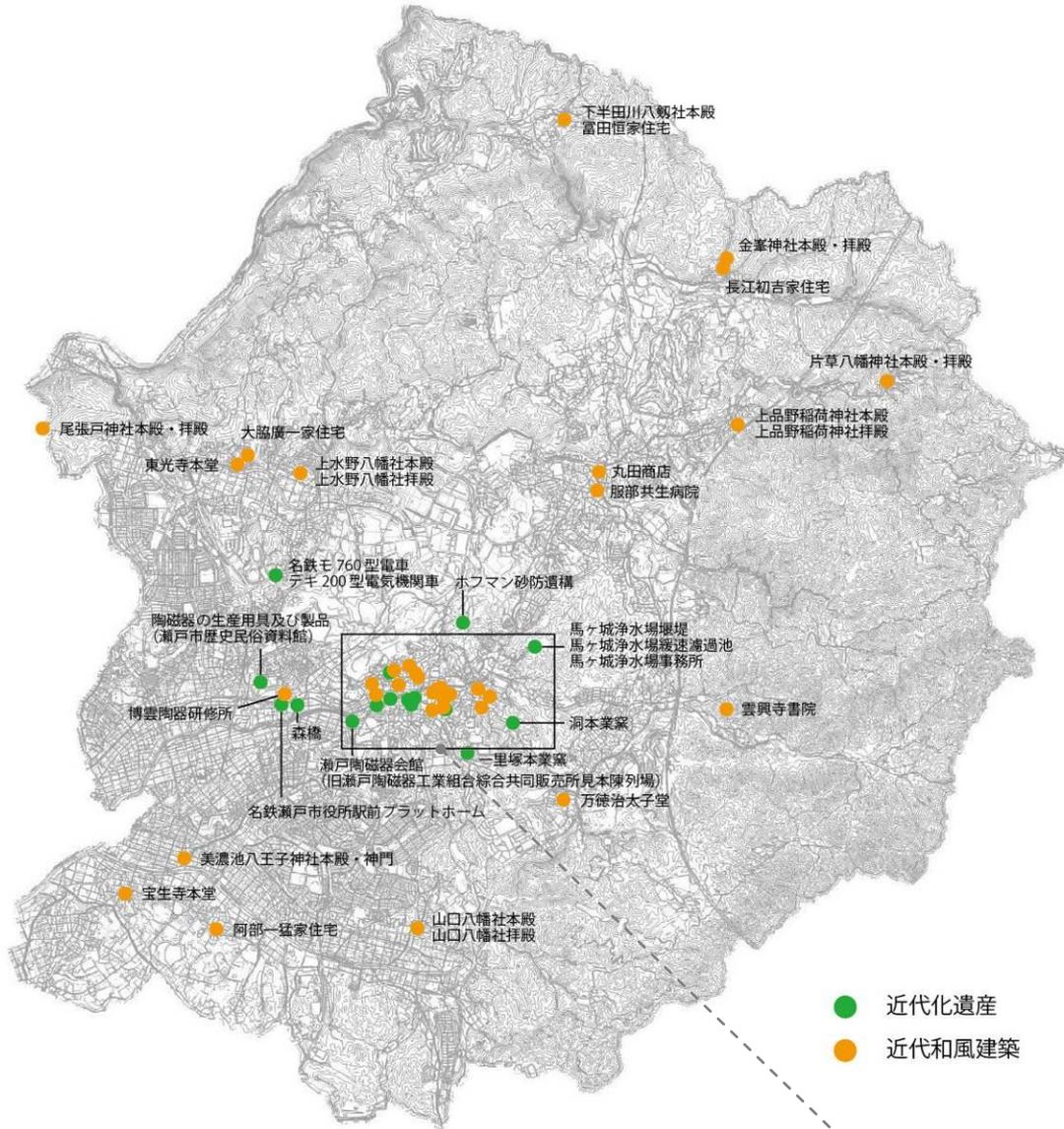
(『愛知県の近代和風建築—愛知県近代和風建築総合調査報告書—』より)



瀬戸陶磁器会館



馬ヶ城浄水場事務所



近代化遺産・近代和風建築位置図



瀬戸永泉教会礼拝堂

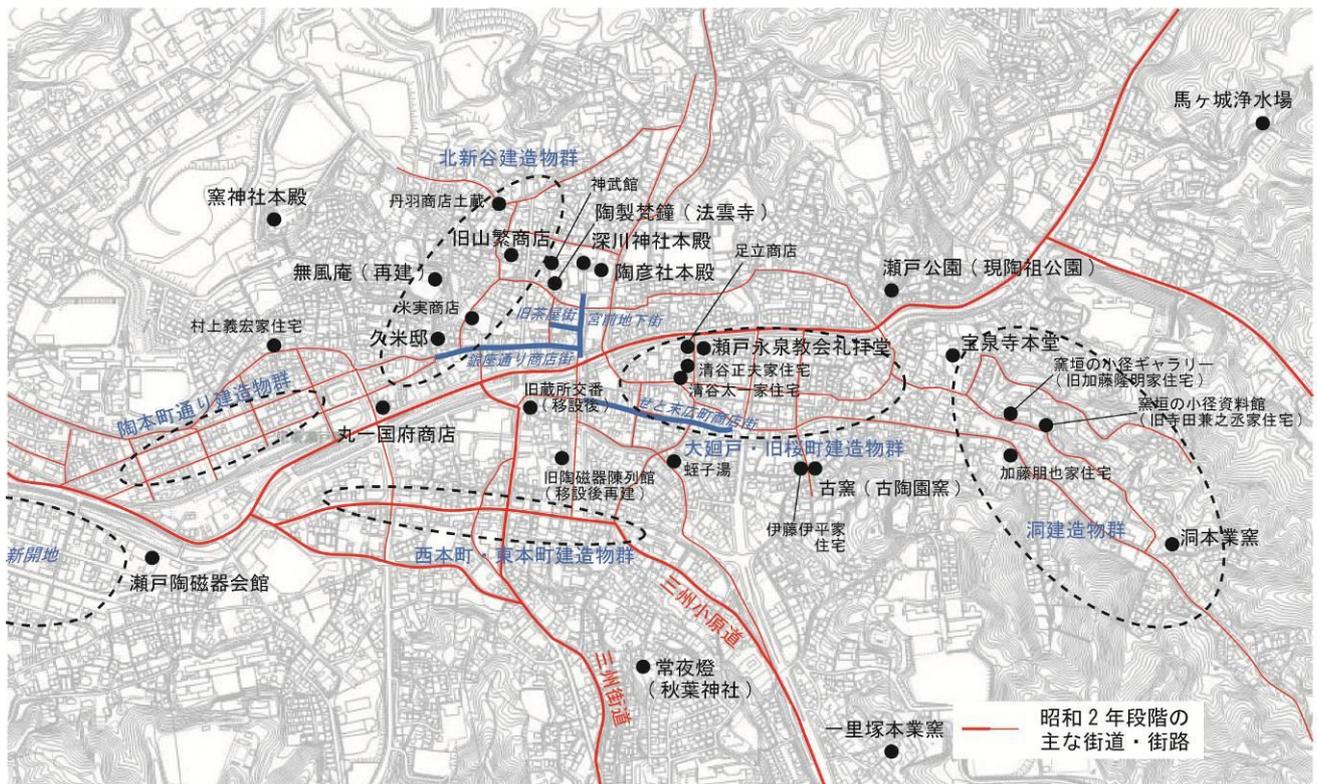


窯垣の小径ギャラリー

■歴史的建造物群(瀬戸市中心部)

名称	所在町名	建造物群形成の契機と特徴	指定・登録文化財等	その他特記事項
洞	寺本町・仲洞町・東洞町・東町ほか	近世瀬戸村の洞嶋が元で、寺本川の谷を望む丘陵斜面に陶器(本業焼)生産の連房式登窯と工場・工房(モロ等)、窯屋屋敷が集中し、近代以降も窯屋のまちとして沢筋・丘陵尾根・中腹に細い路地がみられ、傾斜地には擁壁として窯垣を用いた小規模な平坦地と建造物が今日も多く残る。	洞本業窯(市指定)	瀬戸市景観重点地区 一部街路を窯垣の小径・洞街道として整備
大廻戸・旧桜町	薬師町・前田町・杉塚町・陶生町ほか	近代明治期半ばまでは瀬戸川沿いの水田地であったが、洪水による砂入りを契機に明治20年に大廻戸の水田が埋め立てられ街路ができた。宝泉寺門前の町場は、明治終わりころからこの限界まで拡がり、アウトレットの陶磁器店(ペケ屋)や花街が形成され、瀬戸川南岸にはいわゆる「汽車長屋」が連なり、一部にその往時の建造物・景観が残る。	瀬戸永泉教会礼拝堂(国登録)	一部街路を暮らしくストリートとして整備
北新谷	窯神町・仲切町・深川町・宮里町ほか	近世瀬戸村の北嶋が元で、大型の磁器生産を行った窯屋や登窯等を含む工場・工房が集中するエリア。北側傾斜地には窯垣も多くみられる。明治期後半に開業した瀬戸電気鉄道にも近く、陶磁器卸問屋などもみられる。近代は瀬戸川北岸に形成された官庁街・金融街、銀座通り商店街・宮前商店街に隣接しており、窯屋出身の資本家の屋敷も集中している。	旧山繁商店(国登録)	一部街路を小狭間坂・炎護路として整備
陶本町通り	陶本町3丁目・同4丁目・元町1丁目・同2丁目ほか	明治38(1905)年に開業した瀬戸電気鉄道の瀬戸駅に隣接し、瀬戸へ運ばれた燃料(松割木・石炭)、瀬戸から国内外に運ばれる陶磁器製品等の集積地として栄えた。陶磁器卸問屋や荷卸倉庫等が立ち並び、今日これらの建造物は滅失し建て変わっているものが多いが、往時の建造物・景観が残る部分もある。		
西本町・東本町	西本町1丁目・東本町1丁目・同2丁目ほか	瀬戸から三河の小原・藤岡とを結ぶ三州小原道である近世瀬戸村の南嶋の本町筋にあたり、江戸期から町場が形成され、近代には芝居小屋「栄座」ができた中心的市街地の一つとなった。旧街道に面し、近代の商店や蔵が立ち並ぶ町並みは、今日一部にその面影を残している。		

近世から深川神社門前の繁華街として栄え、一部半地下の商店街「宮前地下街」や、演芸場「陶元座」・映画館「深川館」表通りであった旧茶屋町、明治10年代から池田の水田を埋め立てて形成された銀座通り商店街、明治20年からのせと末広町商店街、昭和初期から戦後にかけて歓楽街として栄えた新開地の西部については、長きにわたる市街地の歴史を物語る町場であるが、構成する歴史的建造物は世代交代によりほとんど失われている。



■陶壁(主なもの)

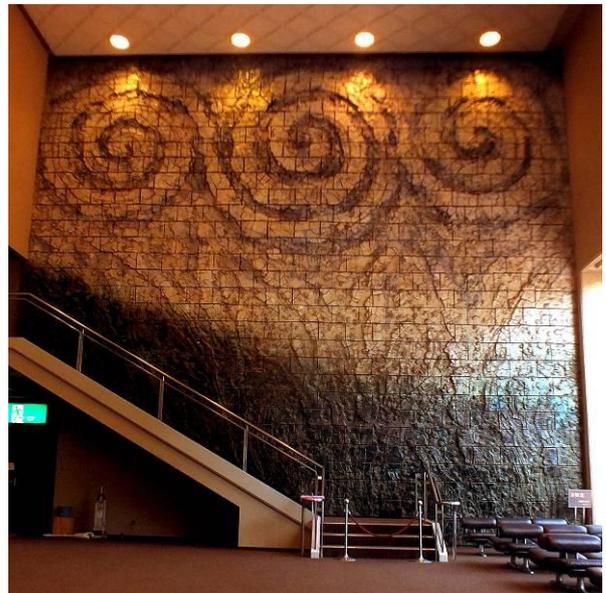
場所	作品名	作家名
愛知県珪砂鋳業協同組合	結晶	加藤元男
愛知県赤十字血液センター	環(わ)	加藤伸也
愛知県陶磁器工業協同組合	陶の春	加藤 鈞
	雲・末・土・海	鈴木青々
	瀬戸八景	加藤五山、瀬戸染付研究会
	絲網之路(シルクロード)	瀬戸陶磁器青年研修会水野支部
	獅子	八井孝二
愛知県陶磁美術館	作品93	加藤清之
尾張瀬戸税務署	瀬戸の山々	鈴木青々
尾張東地方卸売市場	かたらい	石田武至
	鳥と花	加藤 鈞
クリーンセンター	猿投連山	加藤舜陶
品野支所	遊蝶賦	加藤孝一
消防署東分署	江戸火消集行式	加藤健太郎
	江戸のまとい	職員
消防本部	炎とのたたかい	職員
	炎	職員
消防南分署	古窯	大津豊泉
瀬戸旭医師会館	宙舞悠々	鈴木五郎
瀬戸川護岸	作品'88瀬戸	加藤清之
瀬戸簡易裁判所	層	加藤伸也
瀬戸蔵	採土、製陶、焼成	(原画)北川民次
瀬戸警察署	古城の護	鈴木青々
斎苑	永遠ノ旅路	加藤 鈞
瀬戸商工会議所	炎の輝	鈴木青々
瀬戸少年院	希望	加藤 鈞
	心に太陽を	院生(指導:大津範生)
せとっこファミリー交流館(旧中央公民館)	火と土	瀬戸陶芸協会
	未来	瀬戸陶芸協会
	群	瀬戸クラフト協会
瀬戸陶磁器卸商業協同組合	黎明	加藤 鈞
瀬戸年金事務所	和	加藤 鈞
瀬戸保健所	楽園	鈴木青々
瀬戸窯業技術センター	断層	瀬戸陶芸協会
	青春の喜び	鈴木義美
体育館	飛翔	加藤 鈞
	北山杉	瀬戸市陶磁器青年研修会水野支部
中小企業大学校瀬戸校	層	加藤伸也
陶生病院	春舞	加藤 鈞
	希望・朝	加藤 鈞
	瀬戸の四季	加藤舜陶
	絆	河本太郎
	SETO宙(おおぞら)	加藤伸也
東明公民館	飛翔	加藤伸也 他11名
図書館	無知と英知	(原画)北川民次
	知識と勝利	(原画)北川民次
	勤勉	(原画)北川民次
ノベルティ・こども創造館	飛翔	加藤伸也
晴丘センター	華	加藤敬也
文化センター	炎舞Ⅰ	加藤唐九郎
	炎舞Ⅱ	加藤唐九郎
	炎舞Ⅲ	加藤唐九郎
	陶の火祭り	河本五郎

■瀬戸川にかかる橋の装飾

名称	装飾
公園橋	ノベルティをテーマとした雀・草模様と空き窓のある陶板
東橋	志野釉・鼠志野釉が掛かる陶筒状の欄干
宮脇橋	十二支の浮彫の陶板
神明橋	染付のモザイクタイル
宮前橋	やきものの製作過程が描かれた染付磁器板
瀬戸記念橋	御深井釉の陶板・ショーケースに作品展示
窯神橋	タミによる染付グラデーションほか
南橋	四代加藤作助作の織部陶板(40枚)

■パブリックアート

場所	作品名	作者名
下品野小学校	月になく白熊	長江録彌
品野台小学校	叱られて	長江録彌
	希望	長江録彌
陶生病院	慈愛	長江録彌
やすらぎ会館	歩く	長江録彌
瀬戸蔵	ロードスの印象	長江録彌
	ダフネ	亀谷政代司
新世紀工芸館	大きく浚えて	長江録彌
デジタルリサーチパークセンター	読書	長江録彌
パルティセと リモージュ広場	芽	長江録彌
	乾漆彫刻その一	長江録彌
	希望	長江録彌
	思考	長江録彌
瀬戸市役所	砂丘	長江録彌
	恥じらうにんじん	長江録彌
文化センター	月に翔ぶ	加藤昭男
	緑の風	加藤昭男
	月から舞い降りた兎	加藤昭男
	仔犬と天使	加藤昭男
瀬戸市駅	鳩を放つ	加藤昭男
陶祖公園	狛犬を愛でる陶祖之像	加藤昭男
窯神神社	狛犬	加藤昭男
	磁祖 加藤民吉の像	加藤顕清
瀬戸窯業高等学校	何処へ	加藤昭男
瀬戸商工会議所	祥風	亀谷政代司



加藤唐九郎陶壁(文化センター)

名称	装飾
陶原歩道橋	陶製タイルで橋梁全体を装飾
山脇橋	欄干部分にコバルト色の陶器
新京橋	ワインレッドの磁器板
吉田橋	二代加藤春鼎作の織部陶柱(307本)
追分橋	「瀬戸八景」を描いた磁器板
川端歩道橋	河本太郎作のモニュメント
新共栄橋	橋をモチーフにした染付陶板
今村橋	瀬戸風景の染付磁器板ほか

■石造物

	名称	種別	所在地	紀年銘	備考
1	刻経塔	石塔	定光寺町定光寺	元禄9丙子歳良日(1696年)	宝篋印塔
2	五輪塔	石塔	吉野町	年代不詳	
3	五輪塔	石塔	水北町	年代不詳	
4	念仏供養塔	石塔	上水野町	文化10癸酉7月21日(1813年)	
5	宝篋印塔	石塔	水北町	年代不詳	
6	虎神様	石祠	窪町	年代不詳	
7	岩屋堂	石祠	鳥原町	年代不詳	
8	庚申塚	石祠	下品野町久雲寺	文政10丁亥年(1827年)	
9	廻国塔	石祠	八王子町	安政4丁巳年4月8日(1867年)	
10	金毘羅大権現	石祠	八幡町八幡社	文政10亥11月吉日(1827年)	
11	金毘羅大権現	石祠	太子町	安政2卯2月10日(1855年)	
12	庚申	石祠	東洞町	文政5年?	
13	荒神	石祠	上半田川町金峯神社	明治42年9月18日(1909年)	
14	山神	石祠	海上町	年代不詳	
15	山神	石祠	須原町	文化14丑2月7日(1817年)	
16	山神	石祠	赤津町	年代不詳	
17	水神	石祠	北脇町	明和4丁亥年(1767年)	
18	大国神大己貴命	石祠	鳥原町八幡社	年代不詳	子待塔
19	石灯籠	石灯	八幡町八幡社	延宝7未9月15日(1679年)	
20	石灯籠	石灯	十軒町	天保14癸卯11月吉日(1843年)	
21	石灯籠	石灯	城屋敷町八王子神社	明和6己丑8月吉日(1769年)	
22	石灯籠	石灯	定光寺町	正徳5年7月(1715年)	
23	石灯籠	石灯	下半田川町八幡社	貞享2年9月	
24	常夜灯	石灯	市場町	寛政12歳8月(1800年)	
25	常夜灯	石灯	大坂町本泉寺	享和3癸亥歳9月吉日(1803年)	
26	常夜灯	石灯	駒前町	文化甲子11月吉日(1804年)	
27	常夜灯	石灯	秋葉町	文化11甲戌9月吉日(1814年)	
28	常夜灯	石灯	十軒町	享和4甲子歳(文化元年1804年)	
29	常夜灯	石灯	深川町	文政7年申九月吉日(1824年)	
30	常夜灯	石灯	深川町深川神社	天保6乙未9月(1835年)	
31	常夜灯	石灯	八王子町	享和3癸亥12月吉日(1803年)	
32	常夜灯	石灯	平町3丁目	天保14卯11月吉日(1843年)	
33	石灯籠	石灯	片草町八幡神社	享保9辰年8月吉日(1724年)	
34	弘法大師像	石仏	品野町全宝寺	文政7申申年(1824年)	願主戸田原四郎
35	歌碑	石碑	藤四郎町陶祖公園	明治25年壬辰11月(1892年)	
36	結界石	石碑	寺本町宝泉寺	寛政第5次癸丑霜月(1793年)	
37	武田信玄碑	石碑	矢形町	年代不詳	
38	治水碑	石碑	平町	明治27年8月(1894年)	
39	道標	石碑	東本地町	慶応4年2月(1868年)	
40	河伯(かはく)碑	石碑	鹿乗町八幡社	明治10年12月(1877年)	
41	供養塔	石碑	南山口町	寛政6申寅年11月15日(1794年)	
42	結界石	石碑	白坂町雲興寺	明和6年(1769年)	
43	山神	石碑	鳥原町八幡社	年代不詳	
44	道標	石碑	背戸側町	昭和8年1月(1933年)	
45	道標	石碑	坂上町	年代不詳	地藏菩薩立像
46	棒の手祈願碑	石碑	東寺山町	明和3年(1766年)	
47	名号塔	石碑	塩草町万徳寺	元禄4年3月15日(1691年)	
48	名号塔	石碑	東洞町	文政5壬午年10月吉日(1822年)	
49	名号塔	石碑	落合町久雲寺	文化8尾倉辛未春閏8月吉祥旦(1812年)	
50	雨乞い地藏	石仏	駒前町宝生寺	年代不詳	
51	役行者	石仏	白岩町	明和7(1770年)	
52	子育て地藏	石仏	小空町	嘉永7甲寅年2月吉日(1854年)	
53	准提観音	石仏	寺本町宝泉寺	年代不詳	
54	聖観音	石仏	寺本町宝泉寺	安永3甲午7月吉日(1774年)	
55	千手観音	石仏	上品野町菩提寺	享保3戌年(1718年)11月18日	他石仏40体
56	大日如来	石仏	中水野町	安永7年8月吉日(1778年)	
57	道標	石仏	品野町全宝寺	年代不詳	馬頭観音
58	馬頭観音	石仏	寺本町	明治44年9月(1911年)	瀬戸馬車組合
59	阿弥陀如来	石仏	本郷町	享保5庚子2月8日(1720年)	
60	観世音菩薩	石仏	上水野町	安政6歳己未4月吉日(1859年)	
61	虚空蔵菩薩	石仏	水北町感応寺	文化10癸酉年二月十七日(1813年)	
62	庚申神	石仏	中品野町	年代不詳	青面金剛
63	庚申神	石仏	落合町久雲寺	文化5辰閏6月(1808年)	
64	合掌観音	石仏	水北町	寛政3年6月16日(1791年)	
65	佐吾八地藏	石仏	西郷町	文政9丙戌歳2月吉日(1826年)	
66	三十三所観音	石仏	城屋敷町慶昌院	年代不詳	
67	十一面観音	石仏	駒前町宝生寺	延享元子11月18日(1744年)	
68	十一面観音	石仏	水北町感応寺	文化10年2月17日(1813年)	
69	重軽地藏	石仏	今池町	江戸時代(推定)	
70	青面金剛	石仏	下品野町全宝寺	文化13年丙子8月吉日(1816年)	
71	青面金剛	石仏	曾野町	年代不詳	
72	青面金剛	石仏	定光寺町	年代不詳	
73	青面金剛	石仏	定光寺町	宝暦3年7月7日(1753年)	
74	千手観音	石仏	駒前町	宝暦7丁丑歳8月吉日	
75	地藏菩薩	石仏	東印所町	万延元年3月29日(1860年)	
76	地藏菩薩	石仏	下半田川町	元禄16歳末10月(1703年)	
77	地藏菩薩	石仏	下半田川町	元禄16癸未正月(1703年)	
78	地藏菩薩	石仏	中品野町	年代不詳	
79	地藏菩薩	石仏	片草町	元禄17甲4月24日(1704年)	
80	道標	石仏	下品野町全宝寺	年代不詳	馬頭観音
81	道標	石仏	中品野町	明和6年(1769年)	馬頭観音
82	道標	石仏	菱野町	安政4日年(1857年)	地藏菩薩立像
83	如意輪観音	石仏	余床町	安永3年(1774年)	
84	如意輪観音	石仏	水北町感応寺	明和3丙戌年3月18日(1766年)	
85	如意輪観音	石仏	赤津町	明和4年丁亥7月12日(1767年)	
86	如意輪観音	石仏	本郷町	天明4甲辰11月18日(1784年)	
87	不動明王	石仏	坂上町	年代不詳	
88	普賢菩薩	石仏	鳥原町	文政13寅正月日(1830年)	
89	弥蔵観音	石仏	東洞町	天保4年己4月吉日(1833年)	
90	曾野の礎石	その他	曾野町	年代不詳	
91	道祖神(陽石)	その他	鹿乗町	年代不詳	
92	御手洗石	御手洗	仲郷町	文化10癸酉歳8月吉日(1813年)	
93	手水石	御手洗	熊野町熊野神社	文政7甲申年8月吉日(1824年)	
94	漱水	御手洗	塩草町万徳寺	嘉永6丑年2月(1853年)	
95	漱水	御手洗	深川町深川神社	文政2己卯年9月(1819年)	
96	盥漱(かんそう)	御手洗	陶祖公園	慶応4年8月吉日(1868年)	
97	板碑	板碑	弁天町	年代不詳	

(『瀬戸の石造物』より)

### (3) 今後の課題

#### ア 継続的な調査の実施

これまで多種類の文化財・文化遺産を対象として調査が実施されてきましたが、未調査のものも多く、継続的な調査の実施が必要です。

特に、瀬戸市の文化遺産の最大の特徴である窯跡群についての調査は、主に開発に伴う緊急調査として実施され、詳細分布調査から始まる市内遺跡調査において、史跡指定目的の試掘調査が実施されてきましたが、瀬戸窯業の歴史からみれば必ずしも十分なものではありません。今後は、各時代や地区を代表する窯跡群について試掘調査を実施し、遺跡の内容や保存状況を把握する必要があります。特に瀬戸地区馬ヶ城や赤津地区東部丘陵は、瀬戸窯業の直接的なルーツとなる古瀬戸の生産地であり、その実態の把握は今後の窯業遺跡保存整備にとって重要となります。

#### イ 住民参加の調査

これまでは、地域外から調査者が訪れ、調査を実施してきましたが、これを住民自身が調査者となって記録し、地域内で共有できる仕組みを構築する必要があります。これにより地域への関心が深まり、地域としてのまとまりを将来へつないでいく意識が高まることが期待されます。

特に、各地区に伝わる祭りや民俗行事は、その担い手の高齢化や少子化によって失われつつあり、市民の地域への誇りや愛着を高めるためにも、伝統的な行事へ市民が積極的に参加できる方策が必要です。しかし、すでに行われなくなってしまったものや地域の一部でのみ残っているものがあり、実態の調査が必要となっています。こうした民俗行事は地域住民の参加とともに、住民の意識が高まることで復元し、地域の文化遺産として地域外に発信することも可能になっていきます。

#### ウ 調査・研究成果のアーカイブ化

瀬戸市の文化財・文化遺産に関する様々な情報や調査・研究成果を共有化し、後続の研究や教育の場で活かすため、調査・研究成果のアーカイブ化が重要となっています。

特に、市史編纂調査で確認された歴史文書の内、個人所蔵の資料については調査時点から時間が経過しており、所有者の代替りもあります。貴重な資料が散逸する可能性もあり、状況の確認と公的な機関による保存の方法を検討する必要があります。また、これまでに収集されたデータも、市史資料編や文書集で公開されているものもありますが、大部分は未公開となっています。公的機関が保管している資料と調査データをアーカイブ化して公開するための整備が求められます。

#### エ 景観調査の推進

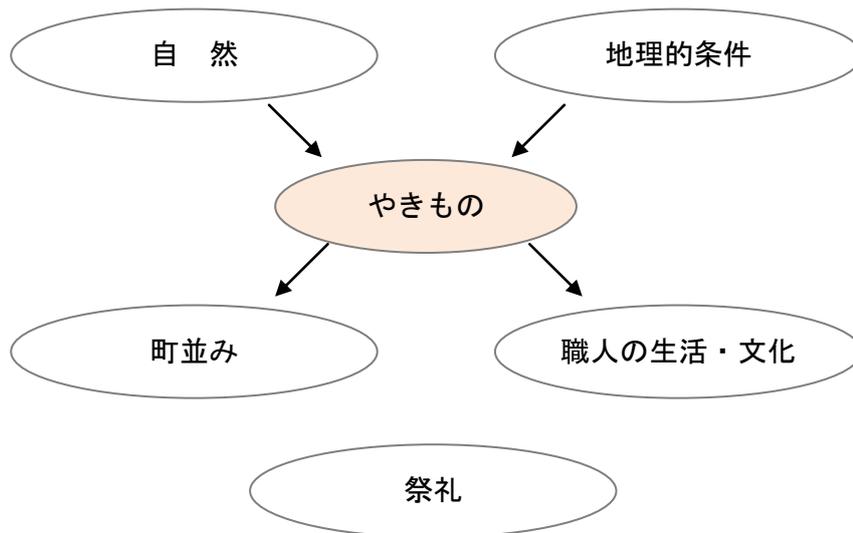
自然や歴史的建造物や構築物は文化遺産としての価値化が図られていますが、それらによって構成される景観については、保存すべきものとしての調査が行われていません。市内に所在している文化遺産として価値がある景観を選定し、その景観を維持するための構成要素を抽出する必要があります。これは市街地だけでなく、郊外の風景や山林、河川なども対象となります。街道や山村風景など、文化財としての保存手法が難しいものについては、景観の文化遺産として保存手法を検討する必要があります。

## 4 歴史文化の特性

瀬戸市は、市域の大半が山地及び丘陵地に占められており、豊かな自然に恵まれています。また、尾張、三河、美濃の三国の接点に位置するという地理的条件が様々な人や物の交流を生み出しました。やきものに必要な土、木、水に恵まれていたこと、様々な人や物の交流が生み出されたことが、瀬戸においてやきものが誕生し、千年以上も連綿とやきものをつくり続けてきた要因といえます。

やきものづくりを根幹として、瀬戸市のまちは形成され、そこにはやきものに関わる様々な職人が住み、職人氣質が瀬戸独自の文化を生み出しました。やきものとともに瀬戸市のまちは発展してきたといえますが、一方でそれぞれの地域では、この地の風土に根差した特徴的な年間行事・祭礼も多くみられ、地域ごとに多様な特色ある祭りが受け継がれています。

ここでは、瀬戸市の歴史文化の特性として、まちの根幹ともいえるやきものを生み出した背景である「自然」と「地理的条件」をとりあげたうえで「やきもの」の千年以上続く歴史を整理します。さらに、やきものとともに発展していた「町並み」と「職人の生活・文化」をとりあげ、最後に風土に根差した特徴的な「祭礼」をとりあげることとします。



### (1) 瀬戸の自然

瀬戸市の自然は、市域の大半を占める丘陵とそこから流れる河川によって育まれてきました。陶祖加藤四郎左衛門景正を顕彰した六角陶碑には、瀬戸の地を指して「日に向かって、山は高く、水は清く」とあり、まさに瀬戸市の特徴を表しています。丘陵と河川によって育まれた植物・動物、地形や地質によって形成される景観、これらはすべて人々の営みとしての歴史文化を支える基盤となっています。

#### ア 里山が守るオオサンショウウオ

山と川が織りなす景観は、人との関わりによって、里山としての文化的意味合いを持ちます。狭い沖積地しか持たない瀬戸では、山は単なる後背地ではなく生業の場所でした。材木や薪材の伐採、木の実やキノコ、山菜などの採集、また山から来て耕作地を荒らす猪や鹿を防ぐ猪垣など、生活の中で山はさまざまな役割がありました。そのため瀬戸には「山の神」や「ヤマイキ」など山に関わる習俗がみられ、里山文化を形成しています。

瀬戸市の北部、蛇ヶ洞川に生息する国の特別天然記念物オオサンショウウオは、生きた化石ともよばれる世界最大の両生類です。日本では西日本に生息しており、瀬戸はその東限地域にあたります。深い山の中ではなく、里に近い川に生息するのが一般的で、蛇ヶ洞川でも下半田川町の集落内を流れる川で多くみられます。これは、里の方が水田やため池など餌となる生物が多く生息することや、隠れ家となる葦原や石が川の中に多く存在するためです。蛇ヶ洞川でも、老朽化した石積の川岸や中洲の草叢の陰を隠れ家としています。

かつては、本流である庄内川にも生息していたと思われませんが、現在はその一支流である蛇ヶ洞川でのみ生息が確認されています。下半田川町に残る里山の風景がオオサンショウウオを守ってきたのです。

#### イ 多様な植生と瀬戸特有の樹木

瀬戸は日本列島の中央に位置し、西日本と東日本の要素がともにみられ、本州の最狭部にあることから、太平洋岸でありながら日本海岸的要素が含まれています。また、標高 100m 前後から標高 700m までの高度差により、暖地系と寒地系の要素が複合的にみられます。こうした多様性が瀬戸市の自然を特徴づけています。

瀬戸市天然記念物であるマメナシは、東海丘陵要素植物と呼ばれ、名古屋東部から尾張丘陵にかけて生息している樹木です。瀬戸では東松山町一帯の丘陵内に自生していましたが、現在は水南小学校を中心にわずかに生息しているだけです。

ヒトツバタゴは岐阜県東濃地方や長野県西南部、愛知県犬山市などに隔離分布している樹木です。ナンジャモンジャの木とも呼ばれます。瀬戸市でも下半田川町と内田町で発見されており、愛知県では犬山市のヒトツバタゴ(天然記念物)に次ぐ自生地となっています。内田町の木は道路工事のため定光寺野外活動センターに移植して、保護されています。

シデコブシは山間の日当たりのよい湿地に生育する樹木で、葉に先立ち早春に白や薄紅色の花をつけ、瀬戸市の山に春を告げる花となっています。市域の丘陵内に広く分布していましたが、里山から人の手が離れ日当たりが悪くなるにつれ減少しています。

ウ 『尾張名所図会』に見る自然景観

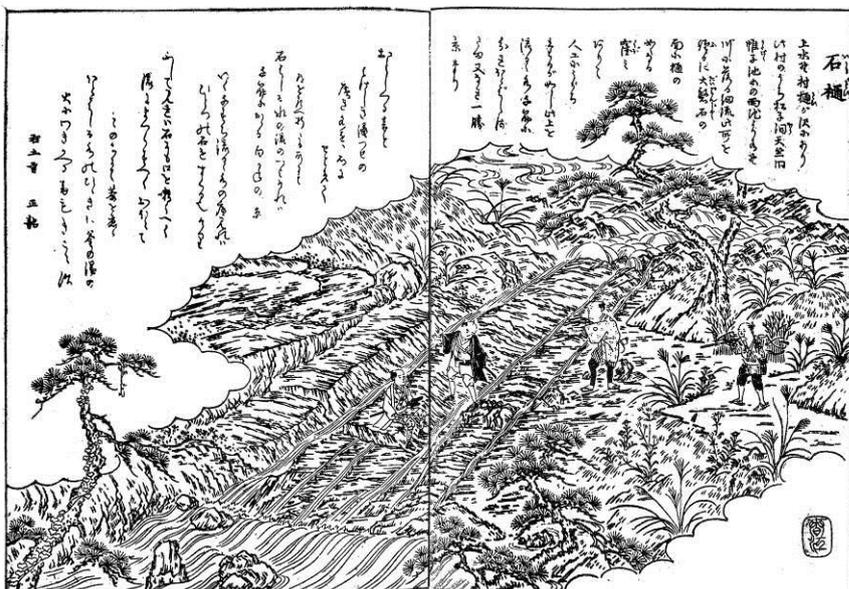
自然による景観は、景勝地あるいは奇観として多くの人々が訪れます。江戸期末から明治期初めに編纂された、尾張の名所・旧跡を巡る『尾張名所図会』には瀬戸市域の自然景観がいくつかとりあげられており、そのうちの水野地区の「目鼻石」、「石樋」は瀬戸市指定名勝となっています。

瀬戸は地質的に北部にチャートを主体とする中生層、東部に花崗岩が広がり、河川は北東から南西に延びる断層に沿って形成されたことから、硬い地層を穿って川が流れる部分があります。こうした場所では、硬い河床を穿つ急流や、河川内に残された巨石に刻された錨穴により、不思議な景観が形成されます。人々はそうした景観に心惹かれ、そこにまつわる物語を語り継いできました。

『尾張名所図会』には、ほかに水野川沿いの「鹿乗淵」「岩屋堂」、蛇ヶ洞川沿いの「児岩」「蛇ヶ淵」、三国山の「乗鞍石」、赤津川沿いの「葛籠岩」「龍淵」「屏風の滝」などが紹介されています。現在はなくなってしまったものや場所が不明なものもありますが、蛇ヶ洞川や水野川・赤津川の支流には一枚岩の河岸や小滝が連続する風景など、図会で描かれた風景が残っています。



尾張名所図会「目鼻石」



尾張名所図会「石樋」

## (2) 尾張・三河・美濃の三国の接点—交流

瀬戸は尾張の北東部に位置し、東に三河、北東に美濃(東濃)に接する三国の境にあたります。このため、古今の街道などを通じて様々な人物・文物の交流がなされた地でもあります。瀬戸でやきものが誕生し、多くの職人が集住し、まちが発展した背景には、このような立地条件が優位に働きました。

古墳時代後期には、三河系の<sup>たてあなけいよこくちしきせきしつ</sup>竪穴系横口式石室が、瀬戸市南部の吉田2号墳等にみられ、同じく三河に多くみられる<sup>ぎじりょうそでしきよこあなしきせきしつ</sup>擬似両袖式横穴式石室が瀬戸市域の古墳では主流となっています。品野地区の品野西遺跡・品野中部遺跡では、古代寺院の存在を示唆する7世紀の瓦が出土したり、<sup>かにかわ</sup>上品野蟹川遺跡では「<sup>ふんやのもん</sup>文室門」<sup>ぼくしよ</sup>墨書のみられる<sup>かいゆう</sup>平安期灰釉陶器が出土するなど、早くから開けた地区であったことがわかり、同遺跡では10世紀には主に美濃で生産された灰釉陶器が出土するなど、信州飯田街道に先立つ古代・中世街道の存在がうかがわれます。尾張・三河・美濃の文化が交じり合っていた状況がうかがわれ、現在の瀬戸市域を含みこむ山田郡という括りが形成されます。

室町期に至り、29・30ページに示すような動向の中で、三河に隣接する赤津では、三河から武士である松原氏が入り込むとともに、浄土真宗高田派<sup>まんたくじ</sup>万徳寺を庇護し、鎌倉・室町期に瀬戸市域に広まっていた臨済宗・曹洞宗寺院等と対峙する瀬戸市域南部の仏教宗派となります。松原氏は、瀬戸市西部の今村城に本拠を移し、品野の品野城等を本拠とする永井(長江)氏と、



桑下城跡・品野城跡(愛知県埋蔵文化財センター提供)

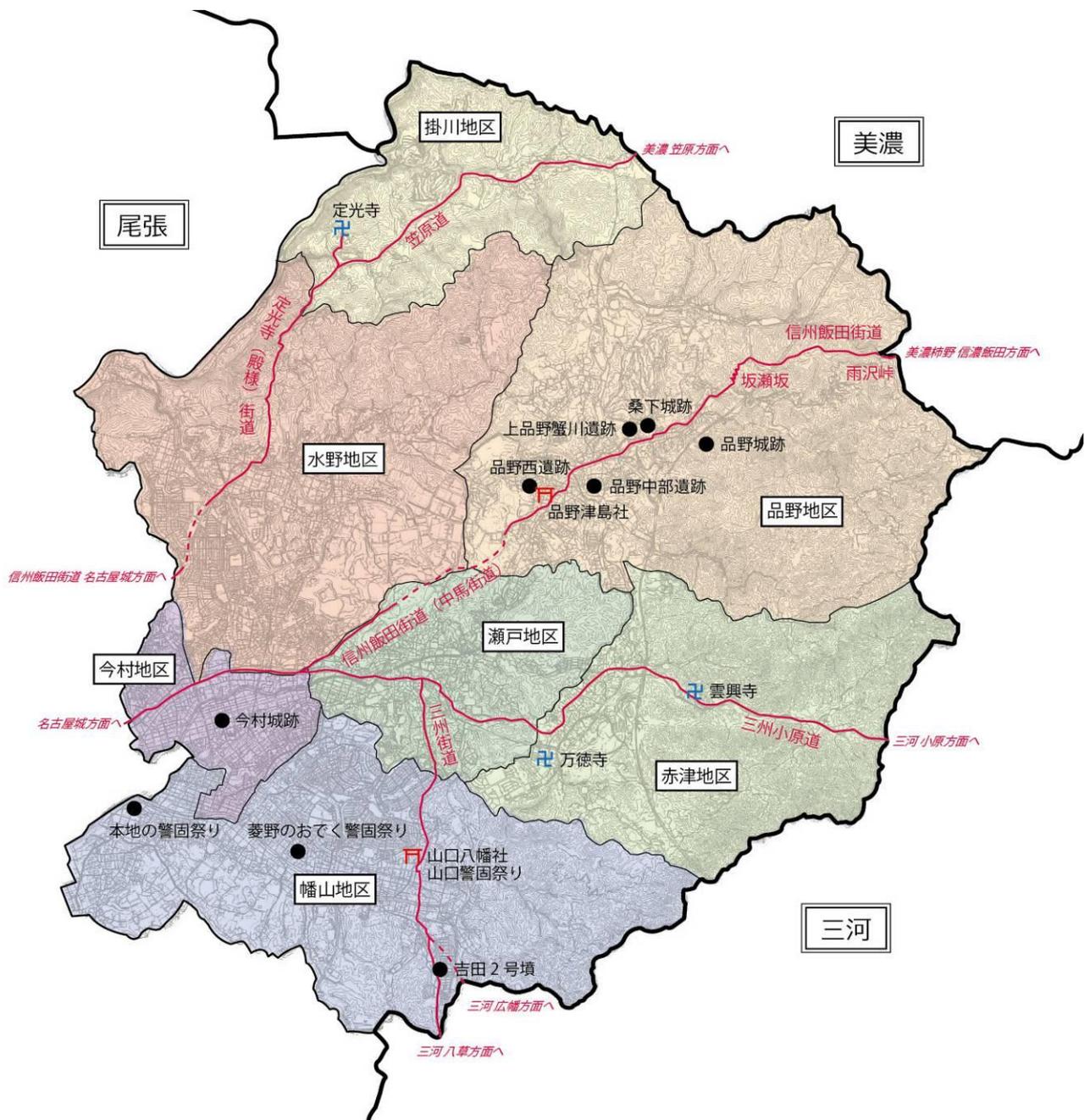
南北で勢力を争うようになり、文明14年(1482)の<sup>おおまきやま</sup>大槇山・<sup>やすどぎか</sup>安戸坂の合戦での松原広長敗死で幕を閉じました。今村と品野とは、近世に名古屋から東濃を抜けて信州飯田まで通じる信州飯田街道沿いにあり、品野は、尾張から北東へ抜ける街道の要所であったことから、16世紀には織田氏と松平氏・今川氏が桑下城・品野城の攻防を繰り返した地でもありました。このように中世の室町・戦国期に至り、旧山田郡の北部は春日井郡・南部は愛知郡にわかれるなど、各地区で個性的な村々が形成されていきました。

江戸期の信州飯田街道は、中山道や下街道に次いで利用された名古屋と信濃を往来する街道でした。近在の農民等が中馬と呼ばれる陸送稼ぎを行い、名古屋から塩・味噌・木綿・乾物、信濃・東濃から薪炭・木工製品・生糸などが運ばれました。大きな中継地であった下品野では町場が形成され、江戸期末から近代にかけて津島神社祭礼に山車を繰出す品野<sup>ぎおん</sup>祇園祭が開催されるようになりました。名古屋から、新居(現尾張旭市)で信州飯田街道と分岐して瀬戸市の水野を抜け尾張徳川家初代藩主廟のある定光寺に至る道は、歴代の当主が墓参する街道として特に整備され、別名「殿様街道」とも呼ばれ、その先の笠原道とつないで尾張・美濃(東濃)を結ぶ脇街道となっていました。瀬戸市北部の石造物の特徴は伊那谷のものに近いものが多く、品

野地区(上半田川)、掛川地区(下半田川)にみられる妻神・道祖神信仰は尾張にはなく信州等との関わりで考えられるもので、瀬戸のことは多くの面で東濃や三河とのつながりが強いといわれています。

江戸期の瀬戸市南部の幡山地区や今村地区などは、ムラ毎に飾り馬を出して山口(北尾張)合宿と称してグループを形成して、三州街道を通過して長久手や日進、豊田のグループとともに現豊田市にある猿投神社祭礼に奉納していました。今日においても、旧村の各地区で氏神に標具を付けた飾り馬を献馬する警固祭りが山口・菱野・本地などでみられ、大きな慶事のある際には、これら山口合宿の村々が山口八幡社に集結する郷社祭りも行われています。水野・品野などの村々は、吉根合宿と称するグループを形成して、尾張旭や春日井の村々のグループとともに現名古屋市守山区の龍泉寺へ献馬奉納していたようです。

江戸期の各村々は中世以降に形成された個性を保ちつつ、街道の往来や祭礼の合宿などを通じて連携の輪をひろげています。ともに張り合いながらも隣村として協調していく気質は、今日まで各地区の意識の高さとして受け継がれています。



### (3) やきもの

日本では陶磁器一般のことを「せともの」と呼んでいます。瀬戸では千年以上もの間、休むことなく連綿とやきものをつくり続けていますが、このような産地は世界的にみても瀬戸だけといえます。この長い歴史の中で生み出されたやきものは多種多様であり、日本国内のみならず海外まで流通していきました。常に日本のやきものづくりをリードしてきたからこそ、日本の中でやきものといえば「瀬戸でつくられたやきもの」すなわち「せともの」となったのです。

これを可能にしたのが自然の恵みである優秀な粘土を多く産したことでした。この粘土は耐火性が高く、可塑性に富むという特性に加え、粘土中には鉄分がほとんど含まれていないことから、白いやきものをつくり出すことができました。そのため、白い素地に様々な絵を描いたり、色とりどりの釉薬を施すなどして、様々なやきものをつくることができました。この粘土がなければ瀬戸のやきものは成立しなかったといえます。また、森の木や水なども利用し、まさに自然との共生の中でやきものは生み出されてきました。

やきもの発展とともに瀬戸市のまちは発展してきたことから、やきものが瀬戸市のまちの根幹を占めているといっても過言ではありません。ここでは瀬戸市のアイデンティティ(独自性)であるやきもの歴史を整理します。



陶土・珪砂採掘場

#### ア 瀬戸窯のはじまり

瀬戸窯の起源は、猿投窯さなげにおける平安期の灰釉陶器生産に求めることができます。猿投窯の灰釉陶器生産は9世紀以降に始まりますが、その後生産拠点を移動しつつ継続し、10世紀には東海地方一円で行われるようになります。そうした流れの中、ここ瀬戸でも10世紀後半から灰釉陶器を生産する窯が登場し、これが瀬戸窯の黎明となりました。

現在のところ瀬戸市域で確認されている最も古い窯跡は、「あいち海上の森センター」内に所在する広久手第30号窯跡ひろくてです。窯体は丘陵斜面をトンネル状に掘りぬいた単純構造の窖窯あなで、後の古瀬戸生産まで引き継がれました。そして、11世紀後葉になると、猿投窯をはじめとした各窯業地では、灰釉技法を放棄して一斉に日常雑器である山茶碗生産やまぢやわんへと移行します。瀬戸窯も例外ではなく、その後約100年間、東海地方では釉薬の施されたやきものは生産されることがありませんでした。そうした中、灰釉技法を再興させたのが瀬戸窯だったのです。

#### イ 古瀬戸生産のはじまり

12世紀末、瀬戸市域南部の幡山区で山茶碗生産を行っていた工人集団により、灰釉を施したやきもの生産が開始されます。これが「古瀬戸」の誕生です。古瀬戸は国内では中世唯一の施釉陶器であり、いわば瀬戸の特産品といえるものでした。まさにこの古瀬戸の開発こそ、今日における「陶都瀬戸」の礎を築いたといえるでしょう。

古瀬戸の生産は12世紀末から15世紀後葉にかけての約300年で、その間、生産内容に変化がみられることから、前期(12世紀末～13世紀後葉)、中期(13世紀末～14世紀中葉)、後期(14世紀後葉～15世紀後葉)の3つの時期に区分されています。

古瀬戸前期、特に成立当初に生産されたのは、四耳壺・瓶子・水注といった大形製品が主流で、これらのほとんどが当時日本に流通していた高級輸入陶磁器をモデルとしたものでした。当時の日本では、中国「宋」の陶磁器などの高級輸入陶磁器を所有することがステイタス(社会的地位の高さ)とされ、広く上流階級に受け入れられたという社会的背景があり、そうした中で、古瀬戸も国産高級施釉陶器としての地位を確立していきます。

中期になると、新たに黒褐色に発色する鉄釉製品が登場します。また、天目茶碗や茶入といった茶道具や仏花瓶や香炉などの宗教用具も新たに生産され、さらに器表面には印花、画花などの文様が多用されるようになるなど、古瀬戸の歴史の中で最も華やかな時代を迎えました。

しかし、中期の終わりごろから後期にかけて、こうした状況は一変します。生産される製品に文様が施されることはほとんどなく、碗・皿や播鉢・鍋・釜などの日用品が量産されるようになりました。そこに、かつての高級施釉陶器の姿はほとんどみられず、むしろ一般集落向けの生産へと転換したことがうかがえます。逆にいえば、瀬戸窯が高級なやきものよりも、鋳物や漆器などを模倣する必要が生じた社会情勢に敏感に反応した結果と思われる。



鉄釉仏花瓶  
伝百目窯出土／鎌倉後期

ところで現在、瀬戸市内には中世の窖窯跡が約 500 基確認されており、そのうち約 360 基が古瀬戸を生産した窯であったことが明らかにされています。また、各窯跡の生産年代から、古瀬戸生産がその生産拠点を変えていったことがわかっています。

なお、瀬戸のやきものの誕生には、中国でやきものの技法を学んで帰国した加藤四郎左衛門景正(藤四郎)が、製陶に適した土を求めて全国を回る中で、瀬戸でよい土を発見し、窯を開き、それが瀬戸焼の開祖となったという伝説が残っており、陶祖と呼ばれています。

■ 主な窯跡と生産地区

時 代	主な窯跡(地区)	
古瀬戸前期	12 世紀末～ 13 世紀初頭	釜ヶ洞 1 号窯跡・井林 1 号窯跡・水無瀬中学校窯跡など(幡山地区)
	13 世紀前葉	紺屋田 A 窯跡など(瀬戸地区)、水南中窯跡など(水野地区)、八床古窯跡群など(品野地区)
	13 世紀中葉～ 後葉	椿窯跡・大柘窯跡など(瀬戸地区馬ヶ城)
古瀬戸中期	13 世紀末～ 14 世紀前葉	針原窯跡・赤津長根窯跡・五葉窯跡など(赤津地区西部)
	14 世紀中葉	孫右衛門窯跡など(赤津地区東部)・暁窯跡など(水野地区)
古瀬戸後期	14 世紀後葉～ 15 世紀初頭	小長首陶器窯跡・城ヶ根窯跡など(赤津地区東部)、大柘窯跡など(瀬戸地区馬ヶ城)
	15 世紀前葉～ 後葉	椿窯跡など(瀬戸地区馬ヶ城)、音玄窯跡(赤津地区東部)

## ウ おおがま 大窯の時代

15世紀末以降、戦国期に入ると瀬戸窯にも大きな画期が訪れます。まず、これまで長きにわたって使われ続けた地下式の窖窯が姿を消し、地上式の大窯による生産が開始されます。大窯の採用により、窯内の容積は拡大し、生産量が格段に上がると同時に、窯内の燃焼効率を上げるための工夫もされています。また、古瀬戸生産の終わりごろからは、これまで標高の高い丘陵部に築かれた窯体も、集落にほど近い低位丘陵に築かれるようになり、窯の立地環境も大きく変わりました。さらに、古瀬戸で生産された多種多様な器種は一変し、天目茶碗をはじめとした碗類や端反皿などの小皿類、そして播鉢の基本3器種の生産になっていきました。このうち、碗類や皿類は、ほとんどが当時日本に流通した中国産陶磁器を模倣しており、やはり瀬戸窯が国内の流通状況に即応した生産へと転換したことを物語っています。

16世紀後葉以降、瀬戸市域で大窯によるやきもの生産を行った窯跡は現段階では確認されておらず、その代わりに生産の中心が美濃窯へと移ります。かつてはその時代を「瀬戸山離散」として、相次ぐ戦乱などにより瀬戸から工人が美濃へと流出した暗黒時代とされていました。その一方で、永禄6年(1563)の今村の市に立てられたとされる織田信長制札や天正2年(1574)の陶工加藤市左衛門宛織田信長朱印状では、瀬戸における「せともの」そのほかの円滑な取引を保証し、新たな諸税をかけないこと、他所で窯を立てることを禁じ、窯屋を自らの保護と統制下に置いたことがうかがえます。こうしたことから近年では、瀬戸窯の工人が織田信長の美濃進出に伴い国境を越えて窯業生産を展開した、まさに大発展の時代であったという説も唱えられています。

## エ 尾張藩政下の瀬戸窯業

江戸期の瀬戸窯は、慶長15年(1610)に徳川家康の意向を受けた尾張徳川家が、美濃国郷ノ木村(今の土岐市曾木町)から利右衛門・仁兵衛兄弟を赤津村に、同国水上村(今の瑞浪市陶町)から新右衛門・三右衛門兄弟を下品野村に呼び戻したのがその始まりといわれ、同様な記録の無い瀬戸村の窯業生産もこの頃に再開したと考えられます。

また17世紀初頭に美濃の元屋敷窯で、九州の唐津窯からの技術導入により連房式登窯が採用されると、短期間に瀬戸や美濃の窯場に広まっていきました。連房式登窯は、大窯に比して熱効率が良く、量産に適した窯体構造でした。また、房により仕切られており、房ごとに区分して用いることができたため、複数の窯屋による共同での焼成が行われていくようになります。

そして、各村における生産器種の分業化がより明確になっていき、瀬戸村では供膳具・灯火具、赤津村・下品野村では播鉢・片口ほかの調理具・貯蔵具、下半田川村では香炉・仏餉具ほかの神仏具がそれぞれ生産されていき、様々なやきものを生み出していきます。

このような日用品を量産する一方で、名工達による一品物の制作も盛んに行われるようになっていき、瀬戸村の春琳・春暁・春宇・春丹・善治、赤津村では春岱・寿斎・春悦、下品野



織部手鉢  
加藤春岱／江戸後期

村では定蔵・品吉・春花らの名工が江戸期末にかけて活躍し、彼らの手によって名品が数多く制作されていきました。

## オ 磁器生産の始まり

瀬戸窯においては、九州肥前で磁器生産が始まった約200年後の、19世紀初頭から本格的な磁器生産が開始されます。それまで主流であった陶器生産は「本業焼」、新たに導入された磁器生産は「染付焼」あるいは「新製焼」と呼ばれました。そして、陶業を営むことができたのは長男戸主に限られていたものが、新製焼に関しては二男・三男でも開業できたことや、のちに磁祖となる加藤民吉が九州肥前より磁器の生産技術を瀬戸に伝えたことにより、磁器生産技術は飛躍的に向上し、磁器生産は陶器生産をしのぐようになりました。その一方で、本業焼は本業焼独自の世界をつくり出していき、その代表的なものが石皿や馬の目皿などの絵皿や、播鉢・甕などの大形製品でした。

瀬戸の染付磁器は透けるような白い素地と、地元産の呉須や中国産の呉須による際立った発色、横井金谷・伊豆原麻谷・亀井半二等、南画系などの本画師・文人の指導による絵画的な絵付などの特徴を有しています。中でも、ワリガキ(輪郭線描き)をして濃み(塗りつぶし)をする絵付方法ではなく、付立筆一本であたかも水墨画のごとく写實的にそして繊細な濃淡で描く方法は、大きな特徴となっています。これら華麗な絵付技法は、文化・文政年間(1804～30)には確立し、加藤吉右衛門・民吉兄弟をはじめ、加藤忠治、川本治兵衛(二代・三代)、川本半助(四代)などの名工を輩出していきます。そして、一品制作的なものから、煎茶具や食器に至るまで、多種多様な染付磁器が数多く生産されていきました。

## カ 世界に羽ばたいた瀬戸焼

安政5年(1858)、日米修好通商条約が締結されたことによって、日本はそれまでの鎖国政策が転換されていきます。その同年早くも瀬戸では、三井組が加藤兼助に舶来見本70～80点を託し、その製造に当たらせ、アメリカに輸出したといわれています。江戸期末から陶磁器輸出の模索が行われていたのです。

そして明治期に入ると、明治政府の殖産興業・輸出振興政策により、一層輸出陶磁器の開発・生産がすすんでいくこととなります。この輸出進展に大きく貢献したのが、江戸期末以降、欧米で盛んに開催されていた万国博覧会への出品でした。日本が国をあげて参加した明治6年(1873)にオーストリアのウィーンで開催された万国博覧会、同9年(1876)のフィラデルフィア万国博覧会、同11年(1878)のパリ万国博覧会に

瀬戸から積極的な出品がなされ、初代川本榊吉・加藤勘四郎・四代加藤五助・二代加藤奎左衛門、六代加藤紋右衛門、六代川本半助等多くの者が受賞するなど高い評価を得て、瀬戸の名を世界に知らしめていきます。



瀬戸市指定文化財  
染付花鳥図獅子鈕蓋付大節壺  
初代川本榊吉/明治9年頃

また、これら万国博覧会への参加によって、染付の顔料となる酸化コバルトや石膏型による成形法など多くの西洋技術が、日本そして瀬戸に伝わったことで新しいやきものづくりが可能となったとともに、新たな海外市場が開拓されていきました。そして、国内市場よりも海外市場を優先した製品づくりがなされていくようになり、明治10年代には瀬戸における総生産額の約7割が輸出用の陶磁器生産額となっていきます。当時の製品は、海外の好みを反映した、形や絵に技巧を駆使した絢爛豪華なものが特徴です。

### キ 「陶都瀬戸」の確立

明治中期から後期にかけて、後の瀬戸窯業の基盤となっていく組織やインフラが確立していきます。明治18年(1885)には、同16年(1883)に設立されていた「瀬戸村陶工組合」と「瀬戸村磁工組合」が統合して「瀬戸陶磁工組」(現:愛知県陶磁器工業協同組合)が設立されています。これは、日本最初の同業組合でした。また、同28年(1895)には、「瀬戸陶器学校」(現:愛知県立瀬戸窯業高等学校)が開校しており、多くの優秀な人材を輩出していくことになります。続いて、同38年(1905)には、「瀬戸自動鉄道」(後に電化され「瀬戸電気鉄道」、現:名古屋鉄道瀬戸線)が開業しており、輸送量が飛躍的に増加していきました。こうして瀬戸は飛躍的に発展を遂げていき、「陶都瀬戸」として確立していきます。

そしてやきものづくりは、動力機械の導入や電気の使用開始等を受けて、手づくりから機械ロクロの使用、手描きから転写技術の導入、薪の窯から石炭・重油の窯へと変化していきます。まさに大量生産を行うための構図が確立されていきました。そしてそれまでの飲食器や装飾具にとどまらず、新たな技術・製品の研究・開発が積極的に行われていき、衛生陶器、碍子、理化学用品、建築用陶器、ノベルティなどの新しいやきものも生産されていくようになります。

### ク 陶芸のはじまり

こうして瀬戸窯業の産業化が進んでいったことにより、その一方では、やきものの芸術性を高めるといふ陶芸分野が成立していきました。大正3年(1914)には、瀬戸における最初の創作者集団である「瀬戸図案研究会」が日野厚・加藤土師萌等によって設立されています。これを契機として、同13年(1924)には「陶均会」が、昭和4年(1929)には「土の風景社」(後の「瀬戸作陶会」)が、同5年(1930)には「春陶会」が、というように続々と陶芸家集団が設立されていきます。そして最終的には同11年(1936)、「瀬戸作陶会」と「春陶会」などを統合して「瀬戸陶芸協会」が設立さ



昭和10年頃の瀬戸風景  
(フォトスタジオ伊里提供)



牡丹文碧瓷鉢  
加藤華仙/昭和21年

れました。瀬戸在住の陶芸家が会派を越え、一致団結して結集したことは大変画期的であったといえます。以後、瀬戸市は陶芸のまちとしても発展していくこととなります。

## ケ 戦争と代用品生産

昭和12年(1937)に勃発した日中戦争の長期化によって、瀬戸窯業も、軍需優先による影響を真っ先に受け、石炭燃料の不足、兵役・徴用による人員不足など苦難の時代を迎えていました。加えて同17年(1942)には、企業整備令により、1,200あった企業が約120の企業に統合・整備されていきました。まさしく瀬戸窯業の危機でした。

しかし、このような厳しい状況の中においても瀬戸では、石炭の代替燃料である<sup>あたん かわき</sup>亜炭(皮木)を使用し、軍需優先により、いち早く供出させられた金属製品の代わりとなる代用品や、国民食器など国策に応じたやきものを中心とする生産へと移行することによって、この困難な時代を乗り越えていこうとしていました。特に代用品は、鍋・釜などの生活用品から、手りゅう弾などの軍用品、そして<sup>ぼんしょう とうか</sup>梵鐘や陶貨まで多種多様なものが生産されていきます。この代用品生産によって、割れにくいやきもの開発や、型による成形技術の進歩など、後の瀬戸窯業に欠かせない技術が生み出されていきました。

## コ 戦後の瀬戸

戦後の瀬戸窯業は、戦災をほとんど受けていなかったことや、戦後の物資不足による生活用品の需要が高かったことなどから、戦時中から続いていた原料・燃料の不足などの試練を越える、復興への道を実に、そして急速に歩んでいきました。また、昭和20年(1945)末には、制限付きながら輸出も再開され、占領下の日本を意味する「Occupied Japan(オキュパイド・ジャパン)」の銘を入れたノベルティや洋食器などが盛んに輸出されていくようになります。同22年(1947)の記録によると、瀬戸の工場は500以上にも達しており、この数字はほかの窯業地と比較すると驚くべきものでした。そして昭和30年代には、ノベルティを中心とした輸出陶磁器生産の好調もさることながら、飲食器・タイル・衛生陶器・碍子・理化学用品などの生産が大幅に伸びていったため、各メーカーでは、設備の拡充などを積極的に行い、瀬戸窯業は更に発展していきます。また、焼成燃料も石炭・重油からガス・電気に転換され、一層安定した生産ができるようになっていき、同40年代半ば、瀬戸窯業は最盛期を迎えました。

しかし、戦後の激動期や高度経済成長期を通して発展してきた瀬戸でしたが、変動相場制の導入やオイルショックなどによって、徐々に低迷の時代を迎えていくようになります。特に、円高や東アジアを中心とする新たな陶磁器産地の台頭は、輸出陶磁器に多大な影響を与えていきました。また、後継者不足なども深刻な問題となってきています。このような中で、千年余の歴史と伝統によって培われた文化性・芸術性豊かなやきものをつくり出す一方で、現代の先端化学技術を最大限に駆使したファインセラミックスなどのやきものも生産され、陶都瀬戸の歴史を未来に向けてつないでいきます。



パーティの前(ペア)  
丸山陶器株式会社/昭和35年

#### (4) 瀬戸の町並み

昭和4年(1929)10月に愛知県内において5番目に市制施行した瀬戸市の中心市街地における都市景観の形成は、ほかの多くの都市が近世城下町・宿場町等を母体とするのに比べ、瀬戸市の近代の窯業生産の隆盛に伴う有力窯屋等の経済力の拡大と、明治期後半から顕著となった周囲からの集住人口の増加によって急速になされました。

古代・中世の瀬戸窯では、陶土・燃料木材等の窯業資源を求めて工人たちが瀬戸の丘陵・山間地を移動しながら窯場を築く「山の窯」でしたが、室町後期には沖積地周辺の村落や城館付近に窯場が集中する「里の窯」となります(44~46ページを参照)。江戸期以降瀬戸村・赤津村・下品野村等で大規模な連房式登窯生産が行われるようになって、窯炉とその周辺に工房・窯屋建物がみられるのみで、明治期前半には依然として瀬戸川河畔には水田も多くみられる「里の窯」でした。

中でも、瀬戸川支流の寺本川流域の谷地は洞嶋と呼ばれ、西側の丘陵地である郷嶋と並んで近世瀬戸村域の窯業生産初期から窯場が集中しており、寺本川・瀬戸川合流点の宝泉寺門前にかけて、江戸期末には家並が続いていたようです。近世瀬戸村の御蔵会所の所在した瀬戸川南岸は、信州飯田街道の追分から東に延びる三州小原道の街道筋で、窯場の集中する南嶋(南新谷)と一体となり、瀬戸川北岸の窯場集中区である北嶋(北新谷)とともに、町場形成の核となり、近代には瀬戸の窯場は「街の窯」へと変わっていきます。

近代に至り、これらの瀬戸村域は国内外へ向けた陶磁器生産・流通によりさらなる繁栄を遂げます。御蔵会所は瀬戸村役場となり、近接して郵便局・勝川警察署瀬戸分署が建てられ、南北の町場がつながってくる中、瀬戸川北岸が乗合馬車等の往来がなされ、加藤左衛門をはじめとする瀬戸の窯業界の多額の出資により明治38年(1905)に矢田~瀬戸間で瀬戸自動鉄道が開通するなどを契機に商業・金融の中心地へと発展していきます。

明治期後半から大正期にかけて、瀬戸川の南の宝泉寺の門前から西側の低地へ町場が広がった大廻戸・旧桜町には、廉価陶磁器の販売店や歓楽街・商店街ができ、キリスト教布教の拠点としてプロテスタント教会の瀬戸永泉教会もこの地に礼拝堂を建造しています。瀬戸川の北の北新谷は南向き丘陵裾の窯屋居宅や陶磁器卸問屋が建ち並び、氏神である深川神社門前ほかの低地には商店街をはじめ劇場もみられるようになります。今日においても、大廻戸・旧桜町には格子のある家が残っています。また、北新谷の山裾付近には、明治期以前からの街路とともに近代の町並み景観が残されており、旧山繁商店はこれらの歴史的景観の



蔵所町周辺(昭和4年頃)  
(フォトスタジオ伊里提供)



立ち並ぶ石炭窯の煙突(昭和初期)  
(フォトスタジオ伊里提供)

核となっています。大正期に普及した石炭窯は、燃料である石炭が瀬戸駅(大正10年から尾張瀬戸駅)を經由して供給されるため、その近くに多く築かれ、町場もより西側に拡大していきます。

また、江戸期末から今日まで、窯業に用いたエンゴロやタナイタなどの「窯道具」の廃材を石垣のように積み上げて擁壁や塀などを造る「窯垣」は、瀬戸特有の町並み景観をなし、北新谷・洞・南新谷・郷の各エリアで合計578件の存在が確認されています。このような窯垣が特に多くみられる洞地区・北新谷地区では、陶磁器生産に直接関連するものが多く、洞地区では工場であるモロや窯炉、居宅が建ち並び、北新谷地区では有力窯屋から資本家・卸問屋となった諸家の商店・居宅・工場が現在の住宅とともに残されています。明治38年(1905)の瀬戸自動鉄道開業に合わせ瀬戸駅(現尾張瀬戸駅)周辺では陶本町通り等ができ、出荷する陶磁器と入荷する燃料材等の集積場として問屋・倉庫が建ち並び、それらの名残の建造物が今日まで残されています。



窯垣(窯神町)



町並み(陶本町通り)

瀬戸市中心部を流れる瀬戸川には、昭和50年代から欄干や親柱に様々なやきものを使用した橋が架けられ、市内の公共建築等には陶壁が数多くみられ、やきもののまちらしい景観を形成しています。

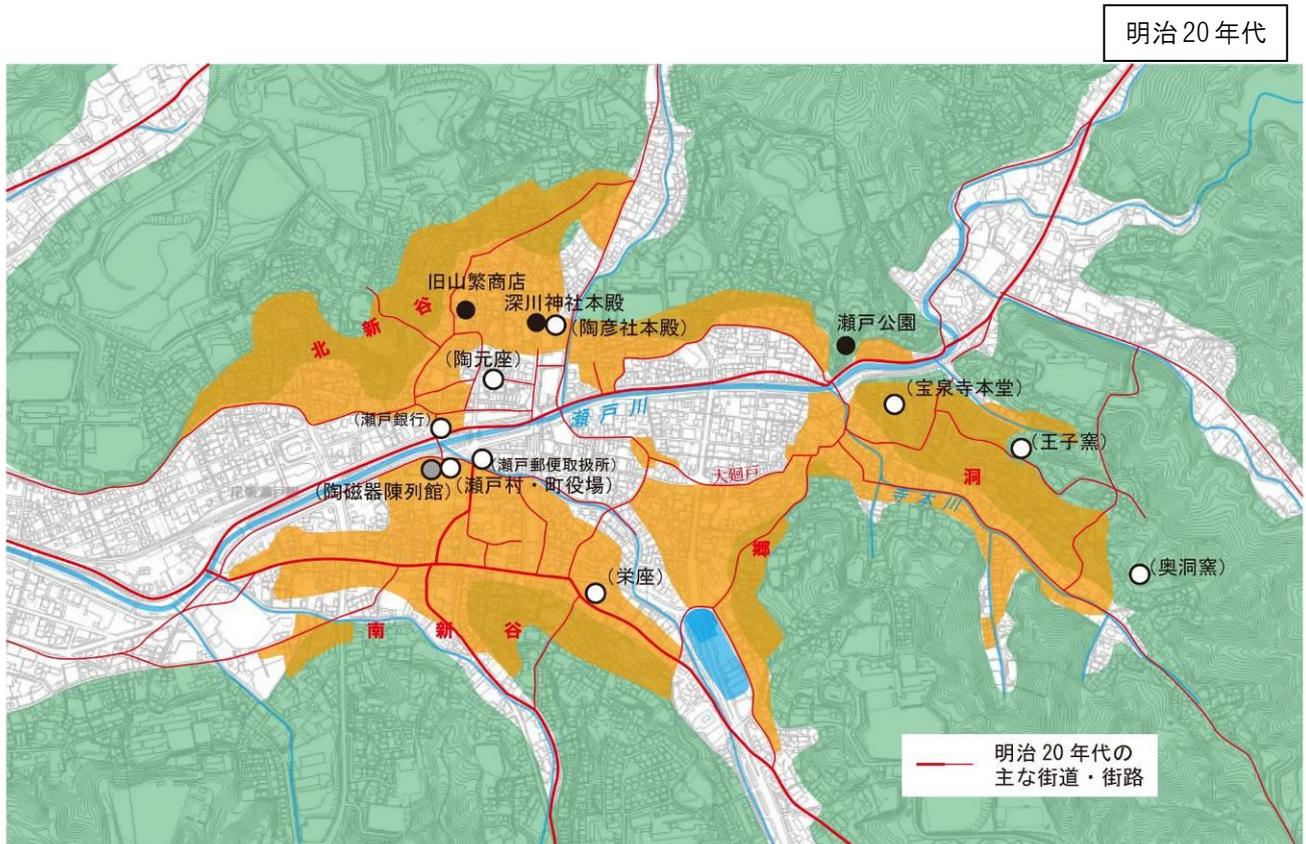
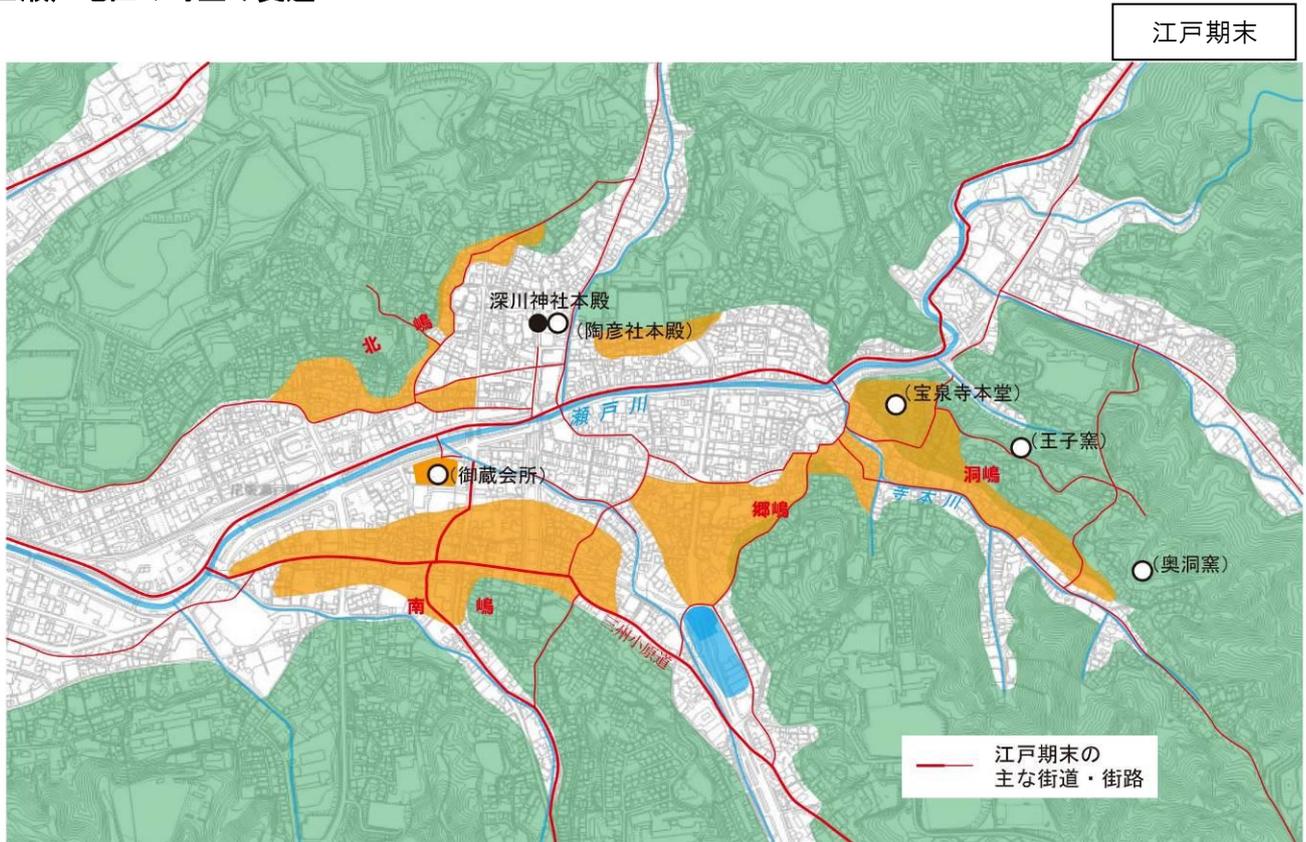


やきものを使用した橋(吉田橋)



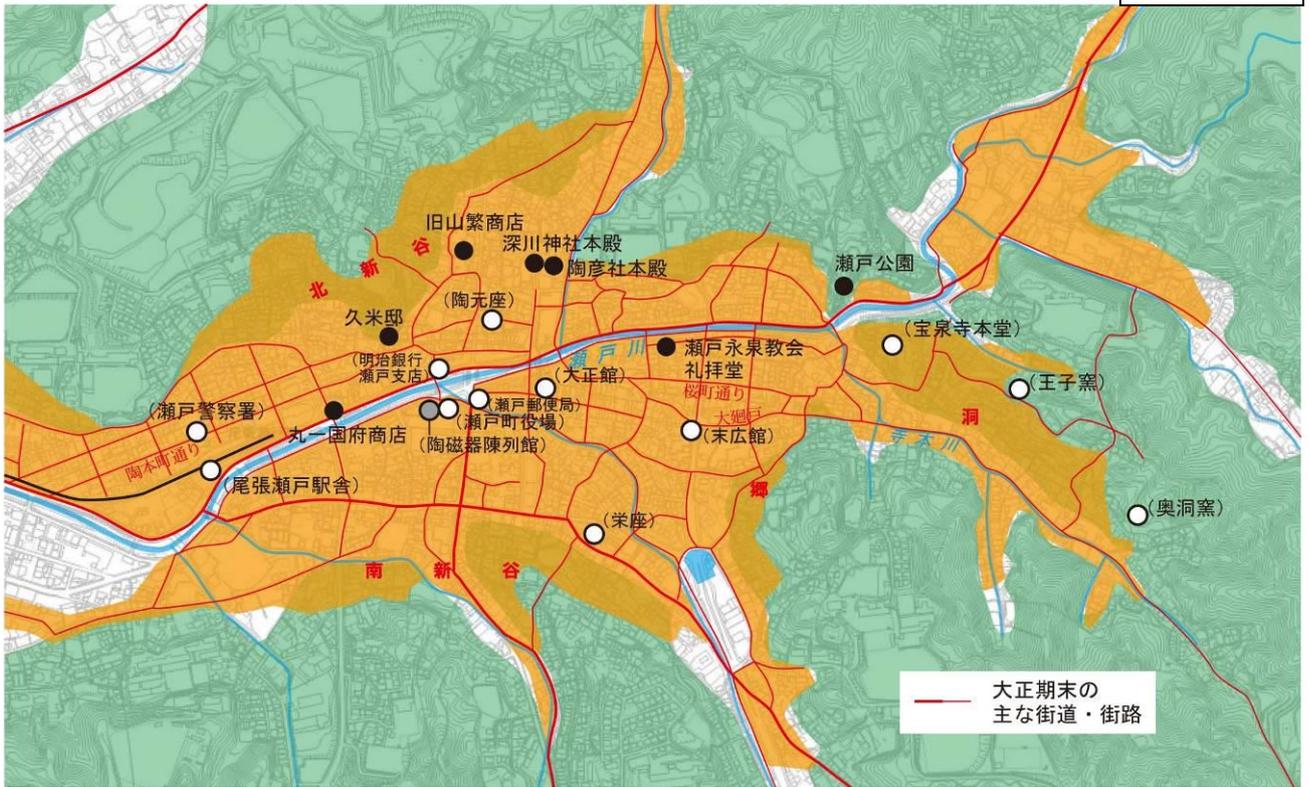
加藤唐九郎陶壁(文化センター)

■瀬戸地区の町並み変遷

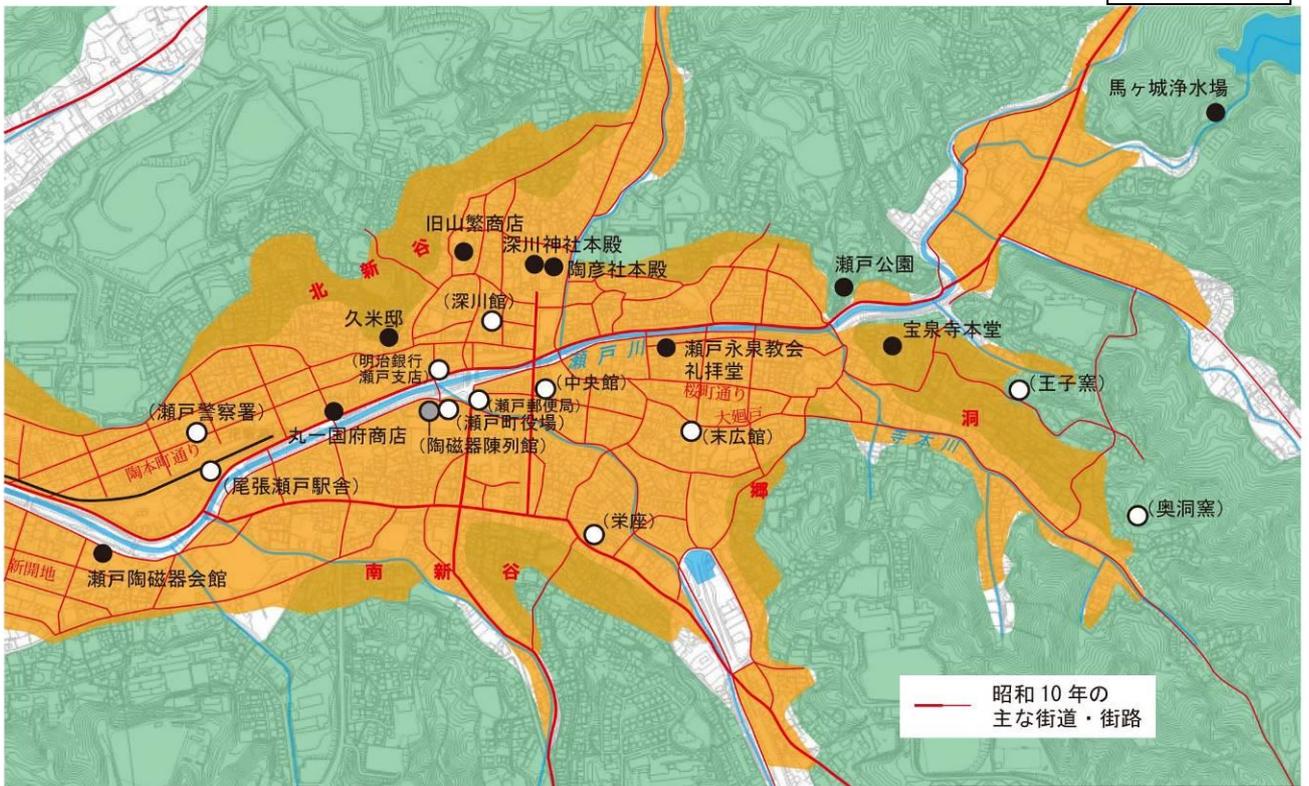


- 凡 例
- 現存する文化財
  - 滅失している文化財
  - 移築・再建された文化財
  - 宅地

大正期末



昭和10年



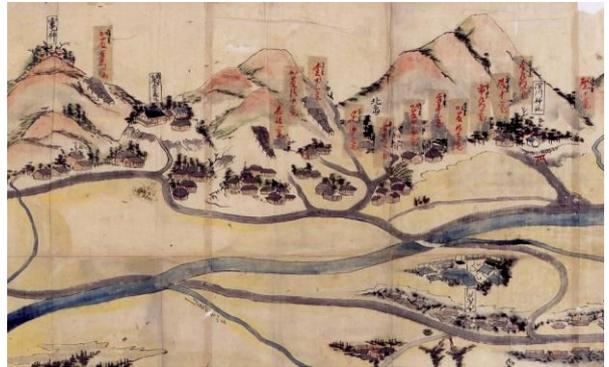
凡例

- 現存する文化財
- 滅失している文化財
- ◎ 移築・再建された文化財
- 宅地

## (5) 瀬戸の職人の生活と文化

千年以上のやきものづくりを支えたのは、各時代の名工ばかりではなく、あまたの陶磁器生産に関わる職人であり、職人たちに代々伝えられたロクロ等の成形技法や様々な施釉技法、窯炉構築技法等々は今日の瀬戸の窯業技術の基礎となっています。

既に江戸期末の瀬戸村には 30 基以上もの連房式登窯やその周辺に工房であるモロが存在していたことが遺跡調査等で明らかにされています。近代に入り、愛知県・岐阜県など周囲から多くの人々が集住し、明治 30 年代に人口 1 万人を超えた瀬戸町では、その後も急速に町場が拡大していきます。大正期には、アメリカをはじめとした海外向け陶磁器の輸出好調を背景に陶磁器生産が隆盛で人口増も進展し、昭和 4



「瀬戸村窯之図」(文政年間 1818~1830)

年には瀬戸市制が施行されました。第二次大戦前後の混乱があったものの、昭和 28 年には瀬戸は、初めて県外からの集団就職を受け入れました。当時の新聞には「陶姫来たる」とも報じられ、慢性的な労働力不足に悩む産業界から若い戦力として期待され、多くの女性を迎え入れた様子を伝えています。以降、昭和 30~40 年代には、西は九州、北は東北から多くの集団就職者が瀬戸に移り住んだことにより、新たな人々が瀬戸の窯業を支えるようになりました。

陶磁器産業と一口に言っても、その生産には、採土・製土の鉦業者、成形のロクロ師、染付などの絵を描く絵付師、焼成を担うヤキテ(焼き手)、窯を築くカマツキ(窯築き)、ノベルティ生産の鑄込成形に欠かせない原型師・製型師、製品の搬送のためのニヅクリ(荷造り)等の専門化された各職人の共同作業である場合が多く、それぞれに長年の修練を経て一人前の職人となります。瀬戸では、職人はカマグレ(窯ぐれ)と自称します。本来は主人を持たない渡り職人が自嘲していったものようですが、やがて陶磁器



深川神社付近の賑わい(昭和初期)  
(フォトスタジオ伊里提供)

のつくり手であるモロ衆や窯元自身もそう表現するようになったようです。各職人は、個々の技量に応じた仕事がそれぞれに存在し、賃金を稼ぐことが可能でした。職人としての自負を持っていることが「カマグレ」という呼び名からもうかがわれます。そして、これら職人気質からくる多くの人々の金離れの良さ、気前の良さが、「尾張の小江戸」と呼ばれた近代の瀬戸を特徴づけています。昭和期には、画家の北川民次は「虚飾を捨てた街、働く者の誇りに満ちた街」と評し当時の瀬戸の風景と人々を描き続けました。

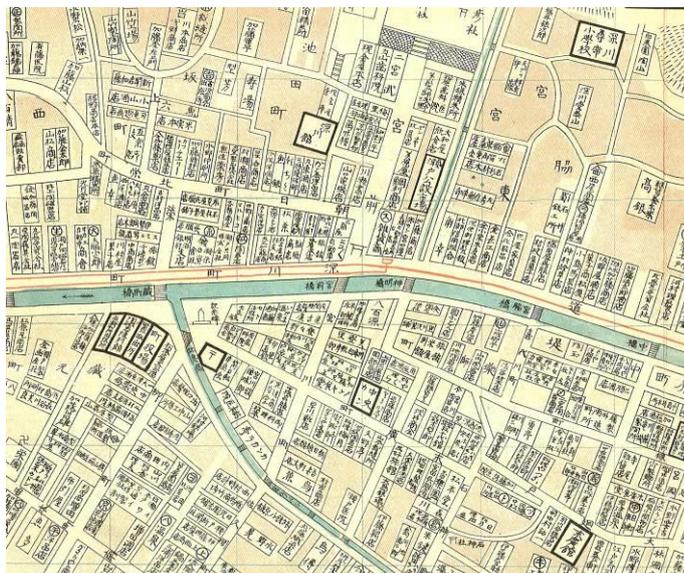
また、陶磁器の直接的な生産にとどまらず、燃料の供給・輸送業者、生産用具を製作する職人、流通等に関連する仲卸商・小売店も需要に応じて伸張し、陶磁器生産・流通のため国内外の商人やバイヤーが瀬戸およびその周辺に宿泊し商談を行い、接待も受けることから旅館や料亭も集中することとなり、窯屋職人をはじめ集住する都市民の暮らしを支える様々な商店や施設が軒を連ねることとなりました。かつて「瀬戸に行かんでどこへ行く」といわれたように、

瀬戸は繁華なまちであるとともに、瀬戸に行けば何かしらの稼ぎ口があるという職人のまちとして知られていました。昭和54年に瀬戸市が初めて実施した「市民意向調査」でも、瀬戸は「住みやすい」「どちらかといえば住みやすい」との回答が全体の7割近くを占めていました。

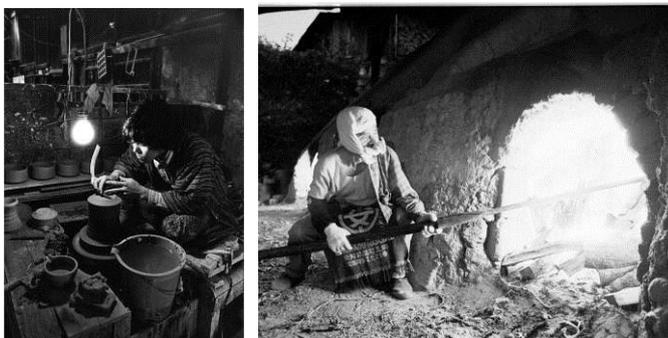
ところで、窯屋の職人の給料は月末と15日の半月勘定であり、その翌日の1日・16日も含めた日が「紋日」と呼ばれる休日でした。深川神社の門前には夜店が並び、多くの人出で賑わいました。これらの多くの人出を背景として、昭和初期には5館の演芸場・映画館が建ち並び、瀬戸川北の深川神社門前の朝日町界隈(今日の銀座通り商店街・旧深川館前の茶屋町や「宮前地下街」と称される宮前商店街)、川南の南本町や末広町界隈には商店街、朝日町界隈や旧桜町界隈には芸者置屋、料亭・洋食屋が集まる遊興街(昭和初期に陶華園等多くの置屋・料亭が移転して新開地を形成)が生まれ、今日の歴史的町並みを形成する基となっています。かつては200人ももの芸妓が瀬戸にいたといわれ、深川町の市杵島神社には彼女らが寄進し名を刻んだ数多くの石柵も残されています。

また、窯入れ仕舞や窯出し仕舞などの窯屋行事の折目には、窯元がモロ衆にシコと呼ばれる宴会を催して労をねぎらいました。シコや慰安旅行であるヤマイキには、手早く多彩な食材を取る事ができる五目飯(ゴモ・アジメシ)が定番のごちそうでした。春や秋の祭りの際は、ゴモに加えて餅や団子、塩抜きしたサバに酢飯を入れ藁縄で固く巻き軒下に吊るしたり、柱に括り付けるなどしたサバ寿司(棒寿司)やあげ寿司(稲荷寿司)なども振る舞われ、節供の際には米粉を押し型で成形して蒸して色を付けたオコシモンも欠かせないものでした。山間地も近い瀬戸では、自然薯芋のトロロ、蜂の幼虫「へボ」を用いたへボメシなどがみられます。火に携わる瀬戸の職人は重労働が多く、へボメシやトリ(野鳥)メシなどのスタミナ食も好まれました。食べるのが目的で出かける特別感のある食である鰻や焼肉の店が多く、深川神社門前の賑わいからはじまり、門前に遊びに来るついでに食し、持ち帰りも多い「瀬戸焼そば」など、今日の瀬戸市の外食の特徴にも通じるものともいえます。

このように近代の瀬戸は、気取らず活気に満ちた職人たちが溢れるまちでした。当時の瀬戸では、鉄道や銀行をはじめとして他地域に先駆けたインフラ等の整備が、国内外へ向けた陶磁器生産で富を蓄えた多くの窯元や卸問屋たちによってなされ、その商談などに使われた料亭や旅館が栄え、皇族も逗留された旧山繁商店離れなどの上質な建造物も建てられました。このような窯元たちの下で職人たちのまち瀬戸が急成長を遂げたわけです。



昭和2年の瀬戸市中心部  
(『大日本職業別明細図』より)



窯場の職人(左：ロクロ師、右：ヤキテ)

## (6) 瀬戸の祭礼

瀬戸の民俗は、尾張東部丘陵の犬山・小牧・春日井・長久手・日進の山地・丘陵地部と共通点が多いといわれています。瀬戸の年間行事・祭礼も、この地の風土に根差した特徴的なものが数多くみられます。

例えば、正月準備に門松を立てる風習は、尾張東部丘陵以外にも広くみられるものですが、門松を立てる際もしくは門松立てとは独立して、新しいきれいな砂を玄関先に撒いて日の出形や松の形を描く撒き砂行事「オコズナマキ」は、犬山から長久手に至るこの地域の丘陵部に特徴的にみられ、正月の若水汲みなどとともこれら地域に特徴的にみられるものです。

四季折々の風土、神社仏閣の由緒来歴によってさまざまな祭礼が行われています。1月の五日えびす(品野菩提寺・本地尾張えびす社)、4月の性空祭(赤津雲興寺)、7月の品野祇園祭、8月の十六善神大祭(仙寿寺)、太子祭り(赤津万徳寺)、秋季例大祭の警固祭り・標具祭り(市内各氏神)、11月のお薬師さん(瀬戸宝泉寺(アメンボウ祭り)・山口本泉寺ほか)・秋葉まつり(今村慶昌院)などがみられます。

中でも10月に行われる氏神の秋季例大祭に献馬する行事は、山口・菱野・本地・今村などでみられるもので、山口・菱野・本地では標具の警固として棒の手・火縄銃を伴ったムラ連合の警固行列が今日も残されています(郷社祭り)。各ムラを代表する飾り馬の標具には、それぞれのいわれがあります。例えば、菱野のおでくは人形を標具としていますが、これは天正12年(1584)の小牧・長久手合戦の際に、豊臣方の若武者で猿投神社に戦勝祈願に向かった梶田甚



郷社祭り

五郎が、誤って村人に殺害されてしまった故事がモチーフとなり甚五郎の霊を弔うために標具としたと伝えられています。今村は、かつて藤巻検倒流棒の手が発祥した地区ですが、八王子社の秋季例大祭には棒の手・鉄砲隊は伴わず、旧今村4ヶ所のシマから献馬するシマ連合の献馬形態が残っています。

現在、産業祭として陶磁器廉売イベントが主流となっているせともの祭も、江戸後期に加藤民吉家の祭神遥拝所を建てたことが契機で、後に民吉も祀った窯神祭が元であり、せともの祭と同様なイベントとなっているせと陶祖まつりも、もとは文政7年(1824)に陶祖として神格化された加藤四郎左衛門景正を祀る陶彦社の祭礼としてあった陶祖祭から出発したものであり、やきもののまちならではの祭礼といえます。